

真理の御魂  
最聖  
麻原彰晃尊師

超能力

秘法の  
開光法

新・増補大改訂版

人はだれでもその内側に、  
“常識でははかりしれない力”を  
持っている。

人が修行によって“人間”を超えようとするとき  
必ず人知を超えた“力”が身につく。  
超能力のつかない修行などニセモノだ！



真理の御魂 みたま 最聖麻原彰晃尊師プロフィール

仏教・ヨーガの修行に取り組むこと約八年。一九八六年ヒマラヤにて最終解脱を果たす。その後も厳しい大乘の修行を続けるとともに、多くの弟子を指導し三五〇人以上を解脱へと導く。その瞑想ステージは、チベット仏教の成就者から「イニシエ」(最高の智慧を得た段階、完全なる絶対なる神の叡智)のステージであると称えられたのをはじめとして、インド・スリランカ・ブータン等伝統的な仏教国の聖者方に絶賛される。瞑想によって得た神秘力と解脱者の叡智によって、宗教のみならず科学・医学・音楽・文筆・翻訳・教育等においても専門家以上の力を発揮、危機の時代の新たな宗教家として内外から注目を集める。

また、各国の聖者方との交流を通じて、仏教と平和を守る活動を積極的に展開。九二年、タントラヴァジャラヤナを国教とするブータン政府から招待された際には、「最聖」という最高の称号を贈られるなど、その仏教実践は国際的に高く評価されている。

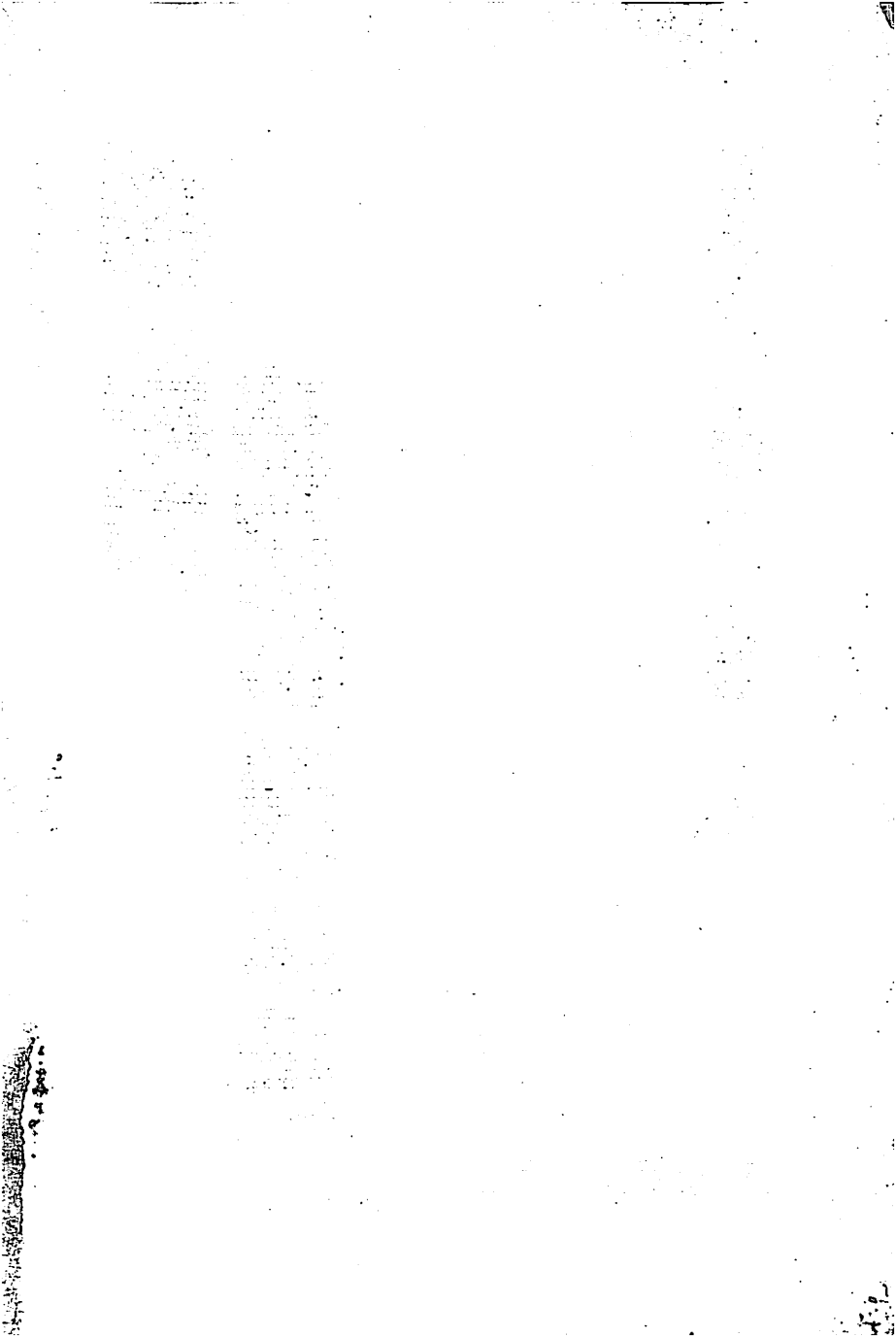
「イニシエーション」「生死を超える」「マハーヤナ・ストラ」「タターガタ・アピタンマ」等著書多数。九二年、日本国内、ロシア国内、世界向けのラジオ放送を開始し世界的な真理の流布に努めている。現在、直弟子七〇〇〇人、信徒一万人、日本各地に二〇、海外に四つの支部(ニューヨーク、ボン、スリランカ、モスクワ)を持つ。

超能力

秘密の開発法

真理の御魂みたま 最聖 麻原彰晃 尊師

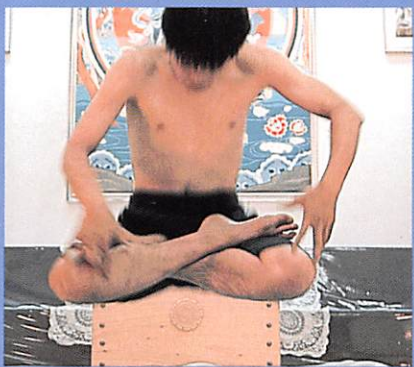
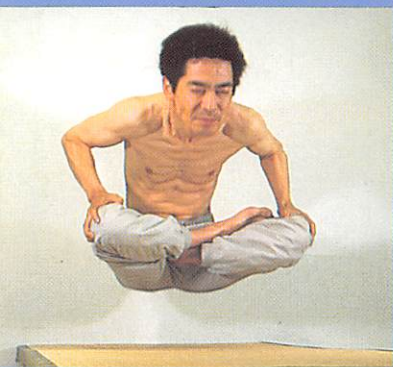
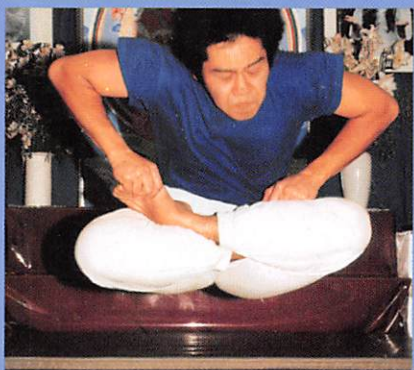
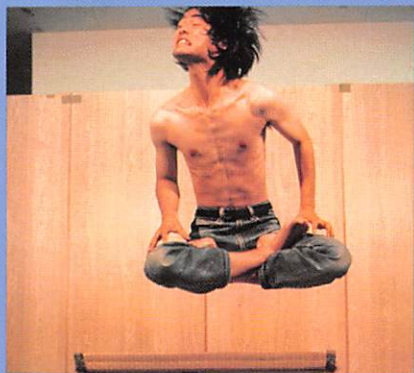
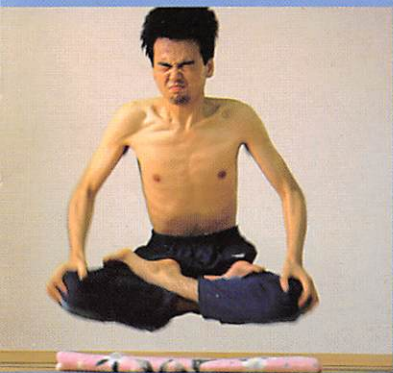
新・増補大改訂版



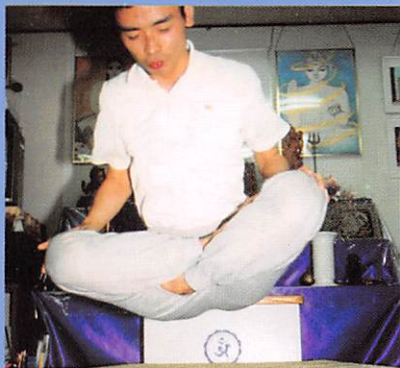
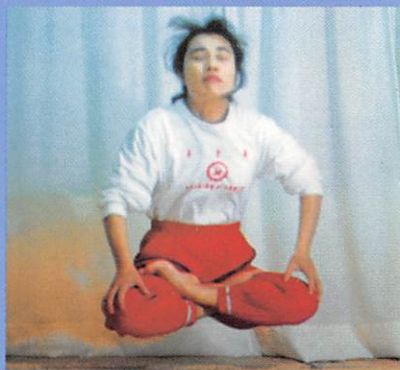
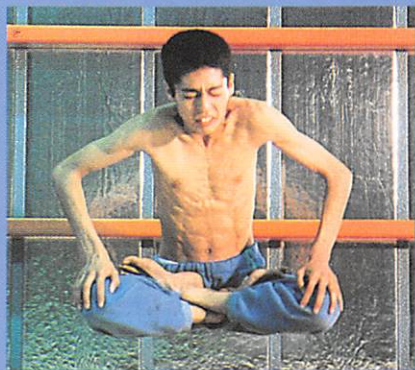


真理の御魂 最聖 麻原彰晃尊師の空中浮揚(1986年1月25日撮影)

# —本物の修行だからこそ超能力がつく

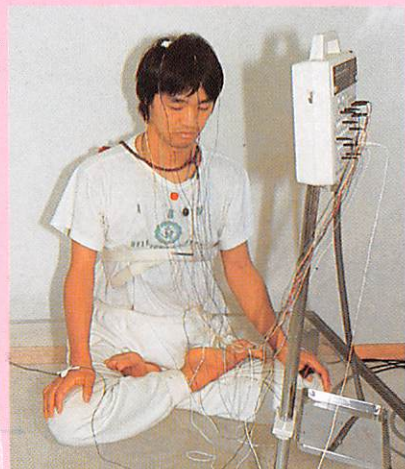
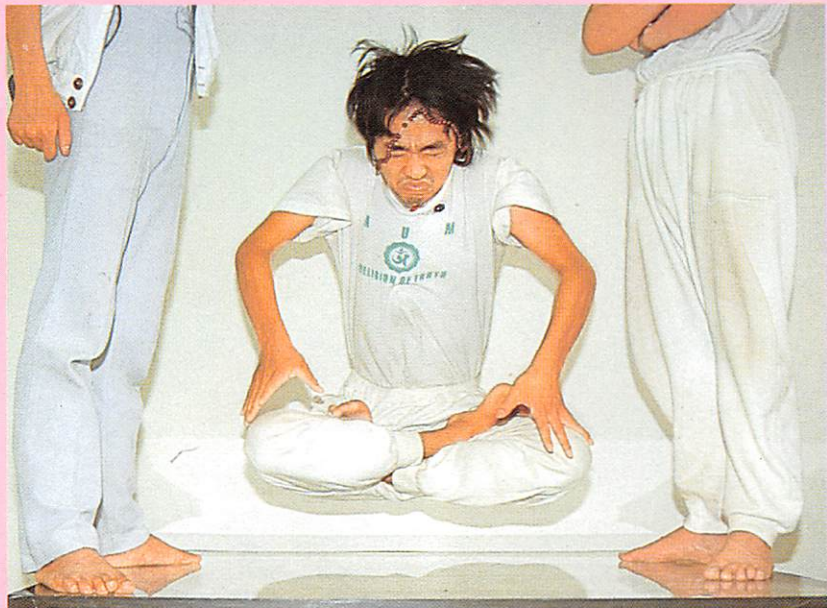


# ダルトリー・シツディー



# 超能力を科学で解明!

超能力を検証するために、オウム真理教では様々な科学実験が行なわれている。写真は、空中浮揚と筋肉を用いたジャンプとの違いを明らかにするために試みた実験。





はじめに——独自の超能力開発法を公開

驚かないでほしい——これが本書を手にしたあなたへのお願いである。本書には、知られざる超能力の世界が広がっているのだ。

超能力といっても、知られざるとわざわざ付け加えたように、普通考えられるような力だけではない。まず、本書の口絵の写真をご覧になっていただきたい。わたしの身体が宙に浮いているのを確認することができるだろう。これはトリックなど使っていない。合成写真でもない。空中浮揚と呼ばれる超能力の一種なのだ（一九八六年一月二十五日撮影）。重さのある肉体が重力の束縛から解放されて宙に浮くというこの超自然的な現象を、現代物理学で説明できないのはもちろんである。だから初めて

見る人（ほとんどの人がそのはずである）にとつては驚異としかいいようがないだろう。科学では説明できない力、人間の限界を越えた力——これが超能力である。

しかも、空中浮揚などは、序の口である。だれしものがあこがれるだろう超能力が次々と出てくるのだ。

わたしは、以前は超能力者ではなかった。ごく普通の人間だった。ふと人生に疑問を感じ、真実を求めて試行錯誤を繰り返すうちに、超能力を獲得する秘伝に巡り合ったのである。その秘伝を今明かそう、そう決心した。

わたしのような平凡な人間でも、驚異的な力を持つ超能力者として生まれ変わるこ  
とができたのだ。したがって、だれでもこの方法で修行をすれば、必ず超能力を使いこ  
なせるようになるはずである。あなたも超能力者になる——それは間違いないだろう。  
すでに、わたしに直接指導を受けている人たち、通信教育を受けている人たちは、  
この方法で着実に力をつけている。今度はあなたの番である。独習でも大丈夫なよう  
に“わかりやすく”ということを念頭に置いて書いた。だから、安心してスタートし

ていただけれるものと思っている。そしてその効果は、あなた自身が確かめることができるのである。

なお、本書では仙道・仏教・密教・ヨーガの集大成の中から、特に超能力に関して効果を持つ修行法のみを抜き出し、また組み合わせる。

ところで、超能力を目指す者がまず最初にクリアしなければならないのが、クンダリーニー（霊的エネルギー）の覚醒である。これについては、日本はおろか、インドにおいてさえ詳しく説明されている本は存在しなかった。そこで本書では、わたしをはじめ多くの弟子たちの豊富な体験談を交え、詳しい説明を試みてみた。興味深く読んでいただけるものと思う。

また、超能力を使った事例も数多く取り上げてある。普通だったら、例えば透視の場合、見えるか見えないかという点のみしか語られていないだろう。しかし、それでは片手落ちというものである。

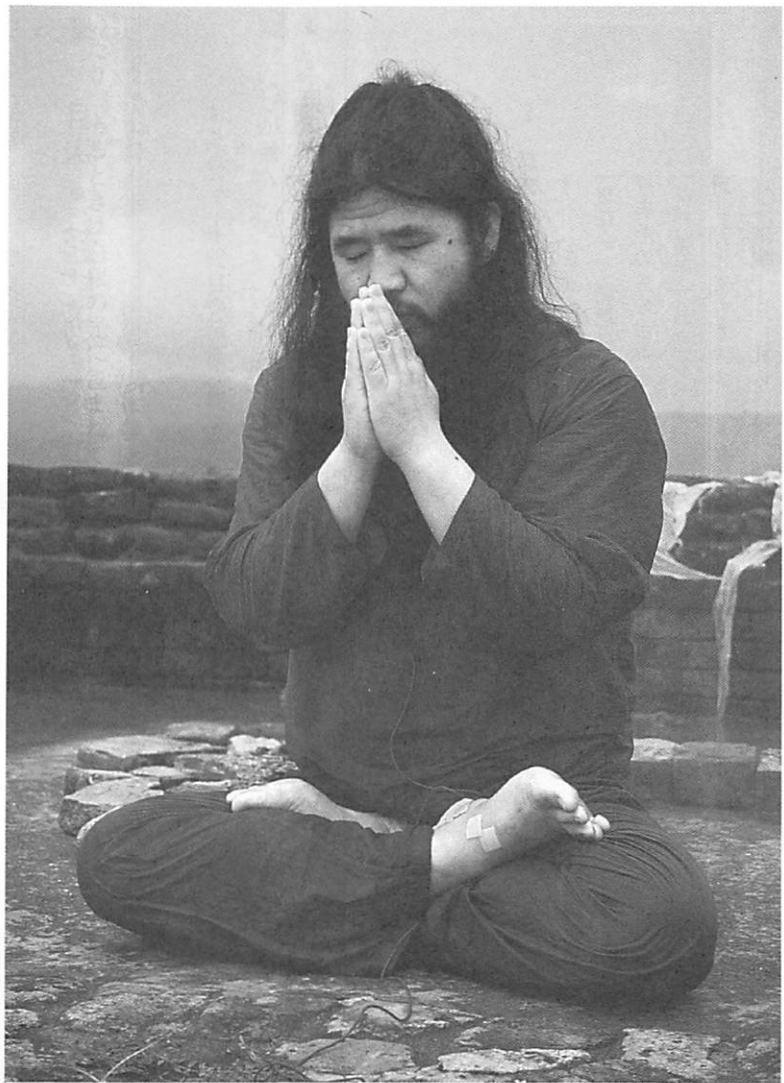
わたしは、そのときの状況、精神集中の仕方など、体験した者、現にその力を持つ

者にしかわからない事柄に、できるだけ触れるように努めてみた。それらは、本書を頼りに修行を始められた方たちの目標となり、励みとなるに違いない。自分で自分の超能力のレベルを確かめながら、一步一步進んでいっていただきたい。

最後に一言――。

超能力獲得の修行は、先を急ぎすぎないことである。別に急がなくても、最も速く超能力が身につく方法だけを紹介している。だから、これ以上速くという、必ず危険が待ち受けていることであろう。その危険とは、生命の危険、精神・肉体の危険とあらゆる方面わたっている。それには十分注意しなければならぬ。しかし、わたしが示したプログラムどおりに修行を進行させるならば何の心配もいらぬ。わたしの指導経験からも、それは断言できる。

それでは、勇気と自信と慎重さを持って、この超能力の世界へ入っていきこう。



目次・超能力「秘密の開発法」新・増補大改訂版

はじめに——独自の超能力開発法を公開…………… 1

● 第I章 空中浮揚の奇跡——だれも書けなかった神秘の体験…………… 15 ●

1 「と、飛んだ！」——わたしの修行法は間違っではないなかった…………… 16

ヨーガを中心とした独特の修行法…………… 16

場の空気が揺らぐ…………… 19

2 超能力の得られない「運命学」宗教はニセ物である…………… 24

すべてを捨てて「絶対」を求めた…………… 24

「気学」で問題は解決しない…………… 26

経典そのものが不正確な「四柱推命」…………… 28

「奇門遁甲」の恐るべきパワー…………… 30

超能力獲得のきっかけとなった「仙道」…………… 32

幽体離脱——「死の恐怖」の体験…………… 33

- とうとう原始仏教にまみえた！…………… 35
- 3 「阿含経」がわたしを変えた！…………… 38
- わたしが最終的に求めているもの——「解脱」…………… 38
- 「阿含経」とかけ離れている「阿含宗」の教義…………… 41
- 千座行がすべてをぶち壊した…………… 42
- あえて「所作クラス」に挑んだ理由…………… 44
- 4 「ヨーガ・ストラ」の超能力プログラム…………… 46
- 四つの経典にすべてが書かれている…………… 46
- 空中浮揚は、教科書どおりの奇跡…………… 48
- こんな超能力がシナリオの中にある…………… 49
- 5 超能力ヨーガの信じられない威力…………… 52
- ヨーガは、体操ではない…………… 52
- アーサナはあくまで瞑想のための準備…………… 53
- 「調気を行」が完成したとき空中浮揚ができる！…………… 55
- 「ムドラー」と「チャクラ」の意味…………… 56
- 「ムドラー」で得る八つの能力…………… 59
- 考え得る限り最短の超能力獲得法…………… 61
- 瞑想のカギとなる「四つの記憶修習述」…………… 62

「ラージャ・ヨーガ」と「バクティ・ヨーガ」の注意点…………… 65  
「カルマ・ヨーガ」こそ精神的支柱となる…………… 69

● 第Ⅱ章 すべてが思いのままになる——驚くべき超能力パワー 71 ●

- 1 修行で超能力がつくのは 当たり前…………… 72  
超能力者迫害の歴史…………… 72  
超能力の出ない修行は「遊び」である…………… 74  
2 こんな超能力をわたしは使っている…………… 76  
下着が透けて見える！——N氏の体験…………… 76  
目を閉じていながら梵字を読む…………… 77  
遠くのものが見える遠隔透視…………… 79  
ろうそくの炎が回る！…………… 81  
「わたしの感情」を「あなたの心」に注ぎ込む…………… 83  
十五メートル先のヒソヒソ話が聞こえる…………… 85  
「供儀祭」で天気を変える…………… 87



- 靈治療で体を治す…………… 88
- 驚異のシャクティーパーット…………… 90
- 3 七つのチャクラに超能力が隠されている…………… 94
- チャクラ別超能力…………… 94
- 4 心が遊ぶ・消える・読心・願望成就の超能力…………… 104
- ここにいてあそこにいる「幽体離脱」の超能力…………… 104
- バリヤーで姿が見えなくなる…………… 106
- わたし自身はあまり使いたくない「他心通」…………… 107
- 弟子が気付いた「不可解な超能力」…………… 108
- 漏尽通——相手の「迷い」を見破る…………… 109
- 死生智——未来世を見透かす…………… 110
- 日航機墜落は前もってわかっていた…………… 112
- 願いは何でもかなえられる！…………… 114
- 5 健康を作り出す超能力——五つの「氣」とチャクラの応用…………… 118
- 身体を動かす五つの氣…………… 118
- 局部的な病はチャクラで治す…………… 119
- 透視で身体の悪いところがわかる…………… 122
- 喉のチャクラで十五キロ以上痩せられる！…………… 124

- 6 その他の超能力——經典にはここまで書かれている！……………128  
書き記された偉大な超能力……………128

●  
第Ⅲ章〈火と水の洗礼〉を受けよ！——超能力者になる第一段階  
133  
●

- 1 〈火と水の洗礼〉なしに超能力は得られない……………134  
「三つの気道」が通ると超能力者になる……………134  
火に焼かれ水につけられる試練……………136  
人間から抜け出すために「悪業」を焼く……………139  
2 〈火と水の洗礼〉の体験例……………142  
まるで風邪の症状——三つの実例から……………142  
3 真つ赤なエネルギーが背骨を吹き上げる——クンダリニー覚醒の順序……………148  
スシユムナー気道を貫く……………148  
異次元のエネルギーを受ける——魔境の出現……………149  
覚醒するとき頭にコブができる……………151  
高度の精神集中ができるようになる……………153  
身体を痛める危険性……………155

クンダリニーの覚醒は二回ある……………

156

〔実践編〕〈火と水の洗礼〉のプログラム……………

160

超能力者となるための最低条件……………

160

修行のカリキュラム——アーサナ・呼吸法・瞑想とマントラ……………

160

チャクラ開発のための修身法……………

199

修行を成功させる生活法……………

203

● 第Ⅳ章 超能力開発法——最短最良極秘のカリキュラム……………

205

●

最短マスター法を公開……………

206

1 〈空中浮揚〉の超能力開発法……………

208

2 〈願望成就〉の超能力開発法……………

216

3 〈透視・遠隔透視〉の超能力開発法……………

228

4 〈テレパシー・他心通〉の超能力開発法……………

232

5 その他の超能力開発法……………

236

●  
付録 超能力獲得〈修行体験記〉  
●

第一部 超人たちの証言——修行はわたしをこう変えた！

【願望成就】

◆ 音信不通の相手をも動かす

◆ 功德の力で思いのままに

【直感智】

◆ 適中続きの直感

◆ 恐ろしいほど適中！

【空中浮揚】

◆ 寝ていると体が浮き上がる！

【透視】

◆ 遠くの出来事を見る

◆ 相手のデータをそのまま見透かす

【サイコメトリー】

◆ 椅子に残ったデータを読む

【予知】

◆ ヴィジョンで知る未来の出来事

聖者タントラウツタマー上流師……………

聖者カンカー・レーヴァータ上流師……………

聖者タントラバッター到達光正師……………

聖者キレーサバハーナーナンダ到達光正師……………

聖者ヴァジラティッサ到達光師……………

聖者ウツジャヤ到達光師……………

聖者ヴァジラダンマサヴァ到達光師……………

聖者ナンデイヤ到達光師……………

聖者アッサージ化身成就師……………

248

250

251

254

257

260

262

264

266

245

- ◆ 未来の出来事を事前にキャッチ
- ◆ 試験の内容がズバリと適中!

【化身】

- ◆ 目撃された変化身
- ◆ 変化身で察知した不審な車
- ◆ 変化身で海外旅行

【天耳通】

- ◆ 天耳界の神々が示唆する未来
- ◆ 耳の奥底から聞こえる声

【他心通】

- ◆ ヴイジョンで知った人の心
- ◆ 色で知る人の心

【テレパシー】

- ◆ 人の心を正確に読み取る
- ◆ 心の中の言葉が聞こえる

【死生智】

- ◆ 恐怖の動物転生
- ◆ 光がいざなう来世

聖者ディーラー到達光師…………… 269

聖者マチク・ラブドンマ到達光師…………… 272

聖者チャンダー上流師…………… 274

聖者ヴァジラハーサ化身成就師…………… 276

聖者メーカラダーイカー化身成就師…………… 278

聖者ソーナー思念不変連続師…………… 281

聖者タントラデュバ到達光正師…………… 283

ウッタマー師…………… 286

聖者メッター・アヴィヒンサー化身成就正師…………… 289

聖者サッカー到達光師…………… 292

聖者ソーマー化身成就師…………… 294

聖者ラッキタ上流師…………… 296

聖者テインジン・サンボ化身成就師…………… 298

第2部 サマデイがもたらす神秘の力

- ◆ 新たなる心の旅立ち 聖者マハー・ケイマ最上善逝…………… 302
- ◆ 神秘の世界から音が聞こえる！ 聖者ヤソーダラー最上善逝…………… 311
- ◆ 不思議の国へ 聖者マイトレイヤ最上善逝…………… 322
- ◆ 変幻自在の世界 聖者マンジュシュリー・ミトラ供養値魂…………… 328
- ◆ もう一人の自分、もう一つの世界 聖者ミラレバ供養値魂…………… 335
- ◆ アストラルへの旅 聖者サクラー供養値魂…………… 341
- ◆ ジョアンと象使い 聖者キサーゴータミー供養値魂…………… 346
- ◆ 瞑想、そして真実の世界 聖者ウッバラヴァンナー供養値魂…………… 353
- ◆ 再び巡り合った偉大な光 聖者アンナ・マンターニブッタ供養値魂…………… 358

おわりに……………

◆

---

# 第I章 “空中浮揚”の奇跡

だれも書けなかつた神秘の体験

---

◆

● 1 「と、飛んだ！」——わたしの修行法は間違っではないなかった ●

● ヨーガを中心とした独特の修行法

それは、驚異の一瞬だった。わたしの身体が、宙に浮いたのである——。

昭和六十年二月、寒さが身に凍む夜のことだった。わたしは、ここ数年ヨーガを中心とした独特の修行をしていた。わたしの修行場は、東京渋谷駅近くのマンションの一室である。夜には弟子たちも集まり、一緒に修行するのが日課となっていた。そのとき、弟子たち数人は、修行場の片隅で静かに夜食を取っていた。

わたしは、アーサナ（調気体操）、スクハ・プールヴァカ調気法、トライバンダとナウリ（二つとも霊的覚醒の修行・第IV章「空中浮揚」の項参照）などを終え、無想三昧に入った。



……いつもと違う。何かが違う。目を閉じているにもかかわらず、額からまばゆいばかりの閃光が入ってきた。頭頂部が熱くなった。なんて熱さだ！ まるで真っ赤に焼かれた鉄の塊を押しつけられているかのようだ。駄目だ、耐えられない！ わたしはあまりの熱さに瞑想から覚めてしまった。

今日予定したプログラムはまだ終わっていない。どうしようか。いつもと様子が違うので、このまま進んでいくのも心配だ。しかも、次にやるべきものは、大脳を最も激しく刺激するのである。でも、ここでやめるわけにはいかない。わたしはそう自分に言い聞かせた。

しばらくして気を取り直したわたしは、最後のバストリカー調気法に入った。

しんと静まり返った凍てつくような寒気の中、「シュツ、シュツ、シュツ」という鋭い音が響きわたる。数分後、身体が震え出した。それと同時に、上から身体を引っ張られているような初めての感覚を味わった。わたしは少しとまどった。しかし、考える時間などわたしには与えられなかったのだ。

瞬間的に、尾てい骨から頭頂に向かつて「氣」が吹き上がったかと思うと、蓮華座（193ページ参照）を組んでいた身体が、上下に激しく跳ね出したではないか。まるでゴムまりのようだ。それだけではなかった。最後に飛び上がったとき、わたしはなんと空中にとどまっていたのである。

空中浮揚——その言葉が脳裏をかすめた。そして夢から覚めるかのように、わたしはドスンと床に落ちた。空中浮揚は終わった。

「浮きましたね！」

「と、飛んでいましたよ！」

目の当たりにこの不思議な光景を見た弟子たちは、口々に叫んで大騒ぎをしていた。いうまでもなく、わたし自身感動と興奮に身を包まれていた。ついにわたしの超能力は、空中浮揚のできるレベルにまで達したのである。これはわたしの修行法が間違っていないかったということを意味していた。

わたしは師を持たず、独立独行で今までやってきた。それは、試行錯誤の連続であっ

た。それが、空中浮揚の成功によって、これまで積み重ねてきた修行の確認となったのである。苦しくつらい年月を過ごしてきたわたしにとって、この上もなくうれしい成果であった。

●場の空気が揺らぐ！

初めて空中浮揚を経験したこの日以来、精神のコントロールさえできればいつでも浮揚できるようになった。浮揚しようと思うときには、高度な精神集中によって身体の周りに特殊な“氣”を巡らせる。そして、その氣が充実した段階で、アナハタ・チャクラ（胸）とアージュニア・チャクラ（眉間）に氣を集中させる。そしてそれを浮揚に必要なエネルギーと換えて放出するのだ（チャクラについては後に述べる）。

この氣に関しては、わたしの空中浮揚に立ち会った弟子の一人が、ある雑誌社のインタビューにこう答えている。

「身体全体から白い光が出ていて、それが発散されているという感じなのです。そし

て背筋から青紫の光が見え、心臓部分には黄色いもや、眉間には白いもやが見えます。身体はものすごく熱くなっている様子なのですが、汗は出ていません。それから、場の空気が揺らいで振動しているように見えます。浮いているときは、何かに耐えているかのような、すさまじい形相になっています。」

弟子たちが言っているような、身体から発散されている種々の光は写真でもはつきり確認できる。これはチャクラから放出されているエネルギーである。

さて、気をチャクラに集中させると、身体が痙攣<sup>けいれん</sup>し、横滑<sup>すべ</sup>りしたりする。経験のない方にはわかりにくい表現かもしれないが「無意識」状態を「真我の意識」が認められた瞬間」にフワッと身体が宙に浮くのである。このとき、「来るな」と感じることができる。

最初、クンダリーニーのエネルギーが吹き上がる反動で浮くのだと思っていた。けれども、近ごろそうでないように感じる。フワッとゆっくりと浮き上がる感覚は、まるで風船のようである。身体が軽くなる超能力のせいかもしれない。身体が風船のよう

に軽いと、ちょっとしたの刺激でフワッと宙に舞ったとしてもおかしくない。

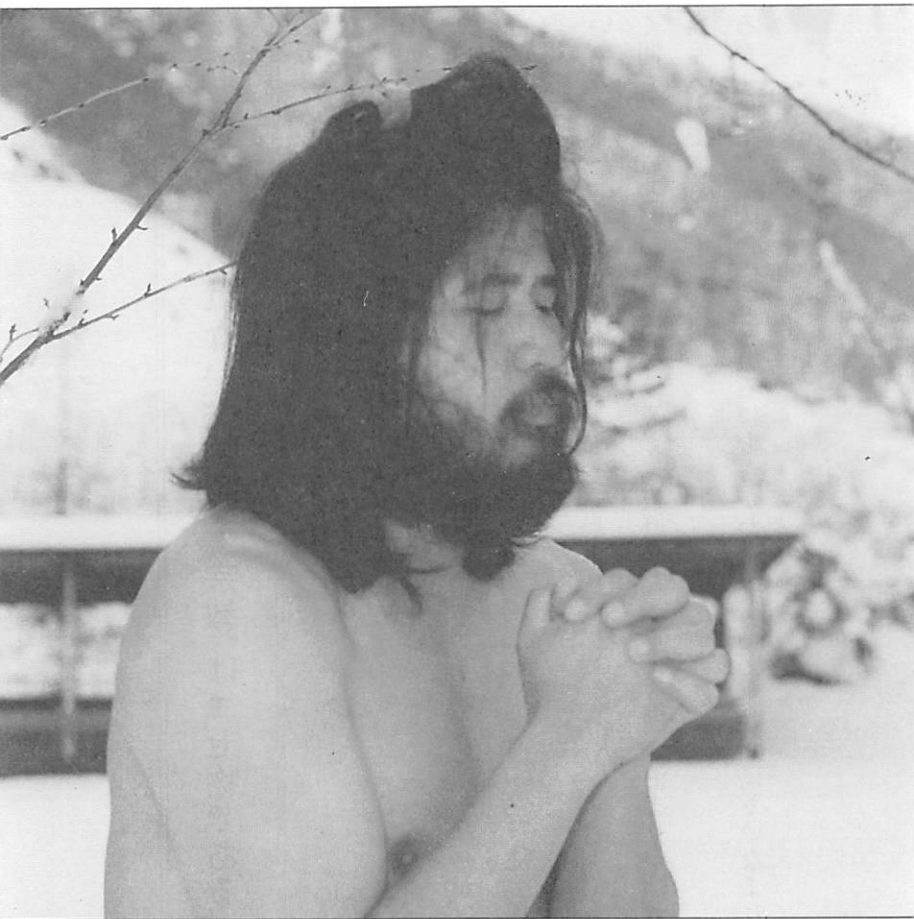
今までに何人となく、雑誌者の記者やカメラマンが取材に来たが、皆一様に、「飛ぶ瞬間がわからない。脚で床をける気配もなく、気がつくと浮いてしまっている」と言う。また、「高く上がったときの方が、着地するときの音が小さい」と驚く。空中浮揚は現代物理学では説明のつかない靈的現象だということである。

現場に立ち会った人は、この神秘を信じていることができるだろう。しかし、写真を見ただけでは、ジャンプなどのトリックを使ったと思う人がいるかもしれない。しかしそう思う人がいたら、自分で試してほしい。脚を蓮華座に組んだまま、五十センチ以上もジャンプして飛び上がれるかを。

ちなみに、わたしがジャンプした場合、上がるのはせいぜい十三センチほどである。現代人は自分の「目」で確認しない限り何事も信じないらしい。写真を写してもまだ信じない。ただ、わたしの記述の中から真実を感じ取ってくれる人が必ずいると信じている。

これから、わたしがどのようないきさつを経て超能力者となっていくたか、書こうと思う。その過程をつぶさに見てもらおうことで、わたしの「真実」に触れてもらうことができるであろう。空中浮揚に直接関係していない事柄もあるが、わたしの歩んできた道が今のわたしを形作っているので、あえてそれらも含めて書き留めておく。

第I章 “空中浮揚”の奇跡



すべての魂の至福を願って修行は続く。

2 超能力の得られない「運命学」宗教はニセ物である

●すべてを捨てて「絶対」を求めた

わたしが修行生活に入ったのは、今からちようど八年前のことであった。それまでごく普通の生活をしていたといえる。鍼灸師しんきうしを職業としていた。わたしが鍼灸師となったのは、長兄がそうだったからにすぎない。自分では、あまり考えることなく資格を取得して開業していたというわけである。

腕はいい方だった——とわたしは思っている。毎日毎日、多くの人がやってきて、息をつく間もないほどだった。中には遠く島根県から、年に何回か泊まりがけで来る人もいたくらいである。

ところが、仕事が順調にいつているにもかかわらず、絶えず疑問にさいなまれ続け



ていたのだ。「自分は無駄なことをしているのではないか」という疑問である。なぜならば、病氣の人を一生懸命に治しても、キリがなかったからである。完治したように見える人でも、治療から離れて元の生活に戻れば、すぐに再発してしまうのである。そんなこともあって、わたしの内面では、自信とコンプレックスの葛藤が続き、次第に疲れ果てていった。精神的にも大変不安定になり、「このままでは駄目になる」という、漠然とした不安を感じるようになった。いったい何が、どこから狂ってきてしまったのだろうか。生きていくための仕事の選択を間違ってしまったのだろうか。ひよっとしたら、もともとわたしは治療家には向いていなかったのかもしれない。人生そのものが、違った方向へ向かっているような気さえする。

そのとき初めてわたしは、立ち止まって考えてみたのである。自分は、何をするために生きているのだろうか、と。この“無常感”を乗り越えるためには、何が必要なのだろうか、と……。

こういう感じを、皆さんも時折は味わっているはずなのだが、強烈なものではない。

人によっては、転職をする人がいたり、ふっと蒸発してしまうこともある。わたしは全く別の方向へ歩み出したのである。

絶対のもの、動じないものを求めようという気持ちが始まったのである。それは、否応なしにすべてのものを捨てなければならぬということの意味していた。そう、今までのことすべてを――。これは、大変な勇気と信念と、そして覚悟を必要とすることであった。

### ●「気学」で問題は解決しない

わたしはまず、自分の運命をはっきり知ろうと試みた。いろいろな運命学を研究し始めたのだ。最初は「気学」からであった。それは、わたしの助手をしていた人物が気学を趣味としていたからである。彼から気学を教えてもらうことから、わたしの新たな道は始まった。

気学とは、九つの星の動きを利用して、運を変えていこうというものである。よく

いわれる「玄関は東南向きが良い」とか「鬼門方位（東北）を避けよ」などということとは、みんなこの気学から来ているのである。

わたしは、気学を実行するだけで、問題は解決し運がよくなるのだと信じていた。運命学とは、そういうものだと思っていた。何にでも一度はのめり込んでしまう性格のわたしは、さっそく実験をし始めた。それこそ、仕事もそっちのけで打ち込んだ。例えば、どの方位を使うとどういう“象意”（方位の影響で自分にはね返ってくる現象）が出る、ということを実際に確かめようとしたのである。

しかし、常識的に考えてもわかるように、仕事もしないで実験ばかりしていても、いいことなどはなかった。お金には行き詰まってしまったし、人間関係もギクシヤクしたものになってしまった。その上、短期間にあっちこっち動いて、“気”を大量に受けたせいも、精神分裂症気味にさえなってしまうた。わたしは、気学は完全ではないと悟った。

●經典そのものが不正確な「四柱推命」

次に同じく運命学の一種である「四柱推命」へと目を向けてみた。日本で有数の大家といわれる何人かの人に、自分の運命を見てもらったのである。ところが、いずれの場合にも過去が当たっていなかったのである。未来のことは、これから起こることなのでわからないとしても、過去は自分自身が喜怒哀楽とともに過ごしてきたものでよく承知しているはずのことだ。それが当たっていないとすると、未来においてはいわずもがなである。

しかしわたしは、ここで四柱推命を放り出すということはしなかった。今度は、自分で運命鑑定ができるだけの力をつけようと、勉強を始めたのだ。大家と呼ばれる人でさえ、すべて奥儀を極めているわけではないのではないか。だから、過去のことさえ割り出すことができなかつたのではないか、と思ったからである。

四柱推命とは、干支えと十二支で生まれた年月日を表わし、その組み合わせによって運命の流れをみる運命学である。自分で研究した結果、次のような結論に達した。

確かに人の運命を正確に知ることができる。しかし、運命を知ることができても、それを変えることはできない。

前に書いたように、数人の大家がわたしの過去を言い当てることができなかつた。この謎もやがて解けた。一つは十年単位の運命を出すときにミスがあつたのである。四柱推命では、この十年単位の運命を重要視するのだが、うっかりするとその十年が現在ではなく十年先を言っていて、そのぶん狂ってしまうのである。

そしてもう一つが象意についての研究不足である。

はつきり言うのと、これらは経典そのものが不正確なのだ。奥儀を門外不出とするために、わざとそう書いたのだろう。中国の流派はよくそれをやるのである。それに気づかず経典をうのみにする鑑定家も鑑定家である。中には本物といえる奥儀まで究めた四柱推命の研究者や鑑定家もいるのかもしれない。しかし、わたしは現在に至るまでそのような人物に会うことができなかった。

ところでわたしの場合、四柱推命に関する著作のある研究者のもとで勉強した後、

古典も含めて何十冊という書物を研究した。そして、二カ月ほどで四柱推命を自分の内で消化したのである。この段階で奥儀の隠ぺいにも気づいた。

しかし、四柱推命もわたしが求めていたものではなかったようだ。運命を知ることができても、凶運を好運に変えるなどということができないからである。

ただ、運命を表わす正確さから、わたしは現在でも四柱推命を用いている。運命鑑定を希望する人には、これと「七星占学」というものをミックスした独特の方法でみてあげているのである。七星占学とは、太陽・月・火星・水星・木星・金星・土星の七つの星の実際の運行を利用して運命を占う一種の占星術である。

### ●「奇門遁甲」の恐るべきパワー

さて、四柱推命に一応の見切りをつけたわたしは、次々に新しいことに手をつけ始める。

いくつかのものをかけ持ちして研究に没頭した時期さえあった。台湾鍼灸と漢方、

断易、六壬、奇門遁甲、仙道……と実に多彩であった。

これらの中で、「奇門遁甲」という運命学は、ものすごいパワーを秘めたものであった。例えば、お金が欲しいとする。その場合、住んでいる家の中心からある方位を割り出し、その場所の土を掘るのである。二メートルほど掘ってから、その穴に磁石や供物を入れて土をかける。

そうすると、“応期”と呼ばれる効果が現われる時期がやってきて、お金が手に入るのである。これはわたし自身効果をはっきりと確認することができた。わたしの研究した方法でやった場合、百パーセントの結果を期待できると言っても過言ではないと思う。例に挙げたお金をはじめ、恋愛、仕事、求智、信用……とあらゆることに応用できるという点も優れているといえる。

しかし、これもある程度のところで切り上げてしまった。というのも、奇門遁甲は現世的な利欲を求める人に好都合な運命学であり、わたしには少しも必要なものと思われなかったのである。現世的な利欲を満たされる反動として、大切な徳を失ってし

まう——そんな感じであった。

◎超能力獲得のきっかけとなった「仙道」

また、仙道の修行もした（仙道に関する著作十点ほどによった）。仙道は、以前から不老不死や仙術を得られるものだというイメージがあった。仙術とは超能力のことである。

昔のわたしは、スポーツの得意なエネルギーシユな人間であった。しかし、そのころのわたしは、生命力が欠乏しているような状態であった。だから、仙道を実践すればあらゆる方がいい方へ変化するに違いない、という多大な期待を持って臨んだ。

この仙道において、わたしは小周天<sup>しょうしゅうてん</sup>、大周天<sup>だいしゅうてん</sup>という段階を修めた。小周天は、人体を宇宙とみなして、後ろから前に気（エネルギー）を回すという技法である。これによって頑強な身体がで上がるのだ。大周天は、尾てい骨にある霊的センターであるムーラダーラ・チャクラから頭頂へと気を突き抜けさせる行である。これは、クン



ダリニーを覚醒させるのである。クンダリニーとは、人間の靈性を高次元へと引き上げるエネルギーとなるもので、クンダリニーの覚醒に成功すると、超能力を得ることができるのである。

わたしは、独学ながらクンダリニーの覚醒に成功し、超能力を持つようになった。わたしが数々の超能力を身につけていく出発点となったのは、まさにこの仙道からであった。

### ●幽体離脱——死の恐怖の体験

当時わたしが得た超能力は、幽体離脱、手当療法、靈障を見ること、他心通（他人の心を読む）などである。幽体離脱とは、魂が肉体から抜け出して異次元へと飛び出していく現象で、慣れないうちは、大変恐ろしい思いをしたものだ。そのころは、抜け出した魂のコントロールが自由にできず、異次元に引き込まれたままになりそうなことがあった。肉体に帰ることができなくて、何度「このままだと死んでしまう」と

青くなったことか。

例えば、ある日、激しい修行を終え、ぐったりと横になったわたしの耳に、いつもの音が響いてきた。ウォンウォンウォン……という、幽体離脱直前に聞こえる音である。

わたしは無意識に壁に向かって滑り出した。「ぶつかるっ！」と思った瞬間、もう一人の自分が壁を突き抜けていた。そして放り出された先は、宇宙であった。

わたしは青くなった。それこそ右も左もわからない宇宙なのだ。左右どころではない。上下さえ、不明——。暗闇に浮いている数え切れないほどの星々がわたしを取り巻いているばかりである。

「T子——っ、T子——っ！」

気の弱いわたしは、恐ろしさのあまり、妻の名を呼びながらもがいた。もがいてもがいて気が遠くなるほどだった。もう、帰れないかもしれない。そう思った。

ところが、そのとき身体が落下し始めたのだ。そして何かに引っ張られているかの

ように、自分の身体に戻っていった。そして、幽体と身体がぴったりと一致したとき、ほっと胸をなで下ろしたのであった。しかし、幽体離脱に習熟するにつれ、このような恐怖を感じることもなくなっていくた。

ごく普通の人間だったわたしが、いくつかの超能力を得た仙道も、精神の安らぎという点で満足できるものではなかった。

それはどうしてかというところ、小周天、大周天を完成させる過程に無理があるようなのだ。ただ超能力だけが目的だったら、仙道はそこまで最短距離でいける方法である。

●とうとう原始仏教にまみえた！

仙道も宗教の一つであったのだが、このころからわたしは宗教的なものにひかれていったようだ。以前は、宗教など大嫌いであったというのに——。第一、宗教などは現実逃避にすぎないと思っていた。信仰を持っている人の性格も生き方もそれ以前と変わっていないと感じたし、指導者に疑問を尋ねてもだれも最後まで答えることがで

きなかった。

それに加えて、自己改革のための具体的な方法や技術がないことも気に入らなかった。精神論だけでは片手落ちだという考えを持っていたのだ。

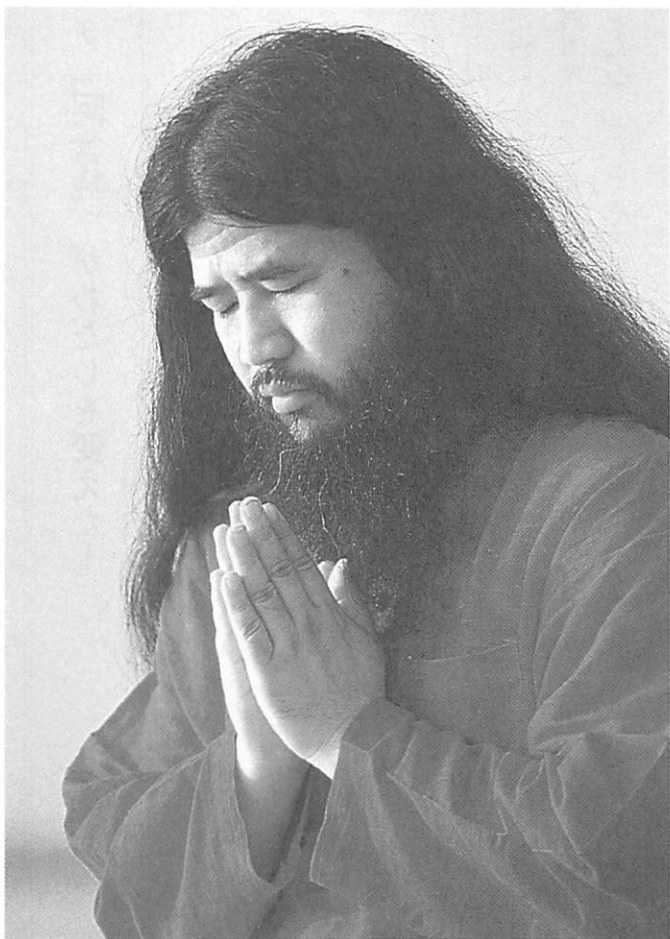
そんなわたしが宗教に傾倒していった。これだけでもわたしの苦悩の深刻さを理解していただけるのではないかと思う。

わたしは、「安らぎ」「光」といった類の言葉に救いのようなものを感じ、高橋信次氏の著書二十冊くらいに目を通した。高橋信次氏はゴッド・ライト・アソシエーション（GLA）の創始者である。

残念ながら、解答らしきものを得られないままに、中村元<sup>はじめ</sup>氏の『原始仏典』と増谷文雄氏の『阿<sup>あごん</sup>含経典』に巡り合った。これによって、わたしは高橋信次氏の記述が正確でないことを知ったのである。

知識は知識として、正確に頭に入れたい、その思いを強くしたわたしは、いよいよ原始仏教の修行へと入っていく。

第I章 “空中浮揚”の奇跡



3 『阿含經』がわたしを変えた！

◎わたしが最終的に求めているもの——「解脱」

原始仏教とは、仏陀が直接説いた教えと実践が中心となっている。それに、仏陀の高弟たちが後世に伝えた教えも含まれている。

すでに形骸化してしまっている現代の仏教に比べて、なんと新鮮で素晴らしかったことか！

わたしは、仏典を読み、瞑想した。そして、この世のすべてが罪だと悟った。自身が汚い人間だと知ったとき、涙があふれて止まらなくなってしまった。自己犠牲の精神も学んだ。そして、価値観が百八十度転換したような気がした。生まれて初めて知った心、そしてその世界の素晴らしさ——、この感動はとても言葉としては言い

表わすことができない。しいて言えば、目の前が白銀の輝きに満ちたとてもいいえようか。ごくありふれた生活の一シーンを見ても、今までと全く違った印象を持つのである。

新しい超能力も身についた。念力、因縁を知ること、霊界の声を聞けることなどである。

ただ、この素晴らしい原始仏教も、わたしにとって障害となることがあった。それは、修行が進めば進むほど、現実的な生活ができなくなるということである。言い換えれば、出家をしない限り、修行の成就があり得ないのではないか、ということだ。

知つてのとおり、日本では托鉢などでは生きていけない。わたしには、修行に没頭するだけの金銭的蓄えがなかった。そのため、少なくとも生活していくだけの現実的な仕事はどうしても必要であった。その上、すでに妻子がいた。妻子を捨ててまで出家することもためらわれた。とすると、このまま原始仏教を続けてもそれに徹しきることができないゆえに、最後まで極めることができないということになる。

——最後まで極める——ここまで考えたとき、わたしはハッとしました。無意識に使ってしまったこの言葉は、解脱を指していた。ようやくわかったのである。わたしは、解脱を求めていたのだと。今まで「何か」を求めていた。絶対のもの、動じないものとはわかって、わたし自身それが何か知ることができなかった。しかし、今は違う。わたしは確信したのだ。わたしの魂が解脱を求め、苦悩していたのだと。なす術を知らず、今に至ってしまったのだと——。

解脱とは、すべての束縛や苦悩から離脱して絶対自由の境地に達することである。原始仏教の『原始仏典』と『阿含経典』を修すれば、出家して修すれば、解脱できる！しかし、わたしは生活のための仕事も愛しい妻子も捨てることができない。出家の条件を満たせないのだ。嘆いても始まらない。在家のまま、現実的な生活を営んだまま解脱に至ることのできる方法はないだろうか。わたしは再びそれを探しに出発しなければならなかった。



◎『阿含經』とかけ離れている「阿含宗」の教義

ところで、ここで『阿含經典』について少し触れておきたい。それは、現在日本には「阿含宗」という宗教団体があつて、ここでの教義と眞の阿含經を混同しやすいからである。阿含宗の創始者は、同じものだと言っているのだが、わたしに言わせれば全く違うものなのだ。

実は、わたしも最初は阿含宗は『阿含經典』をもとにしてしていると信じていたのである。だからこそ、“布施”の実践のために実際に入会してしまったのだ。『阿含經典』は、在家の修行の場合、布施行に重きを置いている。そして、その布施も宗教的指導者に対する布施が重要なポイントである。わたしは、布施をする対象となる指導者を必要としたので、阿含宗に入会したのだった。

ところが、入会してみても驚いてしまった。わたしが修行していた阿含經とはかけ離れたものだったのだ。

例として、瞑想のポイントを挙げてみよう。『阿含經典』では「我が身これ不淨な

り」である。これは、身体は不浄なものであるから、そこから離れなければならないということの意味している。魂を肉体から離れさせて自由にさせるといふことへ発展していく重要なポイントなのである。

それに対して、その宗教団体は「我が身これ清浄なり」としていた。つまり、正反対のことを瞑想のポイントとしていたのだ。これは阿含教ではない。日本における大乘秘密金剛乘（密教）の考え方である。自分がすでに金剛薩埵こんこうさだたであるという瞑想をするために使うイメージであり、大乘秘密金剛乘ではそこから儀式へと移っていくのだ。金剛薩埵とは真言密教付法八祖の一人であり、大日如来の説いた教えを集めて鉄塔に納め、後に龍樹菩薩りゅうじゅほふさつに授けたといわれる解脱者である。

●千座行がすべてをぶち壊した

また、この点も違っていた。その宗教団体には、千座行という親・自分・子の因縁を切って至福へ導くという行があった。しかし、『阿含経典』には、自分がいかに解

脱するかということしか述べられていない。考えてみればすぐにわかることである。解脱すらできていない修行中の人間に、人の因縁を切るなどという芸当は不可能なのだ。これは、明らかに神道の影響である。

さらに、千座行の期間中に十万円以上かかる永代供養や解脱供養などを申し込むように勧めるのも、矛盾を感じる。なぜなら、千座行時には毎日できる限りのお金を供養箱に納めなければならないので、他の供養への余剰など本来あつてはならないからだ。だから、千座行の供養箱へは「一日十円にしよう」「いや、一円でいい」などという会員が何人かいた。特に、他の供養にお金を出した方がマンガラや写真をもらえるから得だ、と言う。めちゃくちゃである。それなら、修行などやめてしまった方がいい。

わたしは、千座行を終了した。期間にして約三年かかったわけである。途中で千座行は三回必要である、と言われたが無視することにした。入会時には千座行で因縁解脱できるということだったのだから。

この三年の間、自分の煩惱が増大したような気がする。それ以前の修行で得た心の安定は打ち碎かれた。何度、修行を放棄しようと思ったことか。しかし、何でも自分で確かめてみるのがわたしの主義だったので、最後までやり通したのである。

わたしが製造販売した健康食品が、薬事法違反に問われた（届け出をし忘れた）のも、経済的基盤を失ったのも、詐欺にあったのも、多額の借金をしたのも……すべてこの期間のことであった。追いつめられたわたしは、マイナスからの再出発を余儀なくされた。修行成就の信念がなかったなら、とてもやり直すことなどできない悪条件の渦中であつた。

●あえて「所作クラス」に挑んだ理由

千座行期間中の心の乱れ、不幸の連続がなぜ起こったか、今振り返ってみるとよくわかる。それは、千座行が「所作クラス」という初歩の修行段階だったからだ。

それまで、わたしは『原始仏典』と『阿含経典』に基づいて、「智慧クラス」の修

行をしていたのである。修行には四つの段階（クラス）がある。初歩の所作クラスから始まって、行クラス・智慧クラス・無上智慧クラスへと進んでいく。無上智慧クラスを終えることができた者は、解脱者となる。

その智慧クラスの修行をしていたわたしが、逆行して所作へと入ってしまったところに、悪い諸現象が起こった原因があったように思われる。それに加えて創始者の靈的エネルギーの質がわたしに合わなかったらしい。

実は、智慧クラスの修行者であったわたしには、この結末は前もってわかっていたのだ。当時、周囲の人間には「わたしはすべてを失ってしまうかもしれない」と言っている。あえて、千座行を行なったのは、わたしが挫折の因縁を持って生まれてきたからだ。千座行を途中で投げ出してしまったら、修行はさらに後退してしまう。破滅が待っていても、また出発できると信じていたし、耐え抜くことも修行の一つであるのもよく知っていた。このような理由で、そのまま不幸へ向かって突き進んでいってしまった次第である。

4 『ヨーガ・スートラ』の超能力プログラム

●四つの経典にすべてが書かれている

出家を断念したわたしが必要としていたものは、在家のまま解脱し、絶対自由の境地に至る手段、ただそれだけであった。いったい、そんなに都合よくできたものがこの世にあるのだろうか。わたしは少々心細かった。そのようなものが、存在していなかったら無為のうちに不本意な一生を終わってしまうことになる。

ところが——わたしに定められた道だったのだろうか——ある一冊の書物と劇的な出会いをするのである。その名は『ヨーガ・スートラ』！ わたしが今あるのは、まさにこの出会いのお蔭である。

それまで、ヨーガといえば、美容や健康といったことしか、頭に浮かばなかったわ

たしにとって、全く新しいヨーガの世界であった。そこには非常に論理的にヨーガによる解脱への道が説かれていたのである。

わたしは、水を得た魚のようにヨーガ修行に没頭した。これは古典的なヨーガである。『ヨーガ・スートラ』をはじめ『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー』、『ゲランダ・サンヒター』、『シヴァ・サンヒター』（四冊とも佐保田鶴治訳）……と、わたしは経典をもとに独学で進んでいった。独学でも大丈夫だった。というのは、自分の精神的レベル、ヨーガ技法上のレベル、そして超能力のレベルを的確に把握できるからである。そのレベルの記述を読みながら、自分の状態に照らし合わせてみるだけで確認できた。そして、そのレベルに達したら、次に何をすべきかも指示されていたのである。

例えば、静慮じょうりょといっていったん集中した意識を拡大していくことができるようになったとする。これは、瞑想の終わりに近いレベルである。次は、もっと進めてより深く意識を拡大していくサマディを目標とするという具合にある。

●空中浮揚は教科書どおりの奇跡

冒頭の空中浮揚も経典に書かれていたことであり、ある日突然それを体験したわたしは、修行が経典どおりのレベルに達したことを知った。

初めて経典で空中浮揚の記述にぶつかったときは、大変驚いた。やはりどこか信じきれなかった。

それはそうだろう。この世のすべての物体は地球の引力に縛りつけられているのだ。人間の力などではいかんともし難い。人が空にアコガれていても、空を飛んでみたいと思っても、しよせん夢である。

それが、重力の束縛から解放されて宙に浮くというのだ。まるで他人事のようにだった。我が身が空中に浮くその瞬間まで――。

わたしは、空中浮揚が可能なだけの超能力を得ることができた。ヨーガは、超能力によって修行の進み具合を推し量ることができのだが、空中浮揚は「輪廻の闇を消す調気の行が成就したとき」に得られる超能力であるという。輪廻の闇を消すという



のは、輪廻の中で自由に転生できるという意味である。つまり、生まれ変わりの世である来世の姿を選ぶことができるのだ。

●こんな超能力がシナリオの中にある

空中浮揚ができる段階を「アーランバ段階」という。わたしは今、アーランバ段階の終わりの方にいるわけである。アーランバ段階では、空中浮揚をはじめ、次のような超能力を身につけることができる。

予言能力、遠隔透視能力（遠くのものを見ることができ）、遠隔透聴能力（遠くの音を聞くことができる）、微視能力（分子・原子のような小さいものが見える）、人の身に入って動かす能力、大小便で磨いて劣等な金属を黄金に変える能力、物に霞をかけて見えなくする能力、三界（愛欲界・形状界・非形状界）を自由に入出入りできる能力、自分の思いどおりに生きられる、相手を意のままに動かせる、幽体離脱ができる、万物を意のままに作り出せる、身体を重くしたり軽く

したりできる、身体を拡大させたり縮小させたりできる

さて、こうやって並べてみるとまるで神の技だという気がするだろう。しかし、まだまだ完全でないにしても、確かにわたしはこれらの力を身につけつつあるのである。それは、経典の記述が真実であるということの証明でもある。そうになると、当然アーランバ段階より上の段階である「ガタ段階」「パリチャアヤ段階」「ニシュパティ段階」の記述も真実であるということになる。

わたしも、現世で生きているうちに、最終段階であるニシュパティ段階に到達できたらどんなにうれしいことか。もし、力及ばずして死んだとしても、必ずや来世で修行を続けるに違いない。

参考のために各段階についても簡単に触れておこう。

〔ガタ段階〕 アーランバ段階の次の段階である。

・ 輪廻の輪の中で成就し得ないことは一つもない  
・ すべての感覚にとらわれなく

なる ・ 親指で全身を支えることができる

〔パリチアヤ段階〕 ガタ段階の次の段階である。

・ 業（カルマ）を消滅し、来世に再生する必要がなくなる ・ 地・水・火・風・空  
の危険を除く超能力を得られる ・ 巨大な時間を経ても死は来ない

〔三シユパティ段階〕

・ 生きている間に解脱できる ・ 不死の甘露を飲むことができる ・ もはやヨーガ  
修行の必要はなくなる ・ 疲労、熱病、老衰、病気はなくなる ・ 必ず死を征服  
する ・ 再生することなく、神々と共に楽しむことができる ・ あらゆる障害か  
ら離れて完全な独立者となる

ヨーガ經典には、人間だったらだれもが願う至福の世界が描かれている。それは修  
行者の熱意と努力次第で、今生に生きていくうちに手に入れることも可能なのである。  
このわたしも、それに向かって努力を続ける一人なのだ。

## 5 超能力ヨーガの信じられない威力

●ヨーガは体操ではない

ヨーガ修行に入門したてのころのわたしは、ラージャ・ヨーガとハタ・ヨーガを中心に行なった。ラージャ・ヨーガは瞑想が中心であり、ハタ・ヨーガはアーサナ（体位法）や調気法など身体を使う技法が中心であった。

その後、神に対する献身に重きを置くバクティ・ヨーガへと進んだ。そして現在は、このバクティ・ヨーガにカルマ・ヨーガを加えて実践している。カルマ・ヨーガとは、すべての生物の内側に神性・仏性を見いだして学び、奉仕するというヨーガである。こうやって、ざっと見てくるだけでもヨーガがかなり精神面が中心になっていることがわかることと思う。これが本来のヨーガの姿なのである。現代の日本では、どう

してあの“体操”といったような面ばかり紹介されているのだろうか。全くもって不思議である。こんなことでは、ヨーガの良さを多くの人に理解してもらえないだろう。以前のわたしのように、美容や健康というようなイメージでしかヨーガを見ない人がほとんどだろうと思う。まことに残念なことである。後章で本当のアーサナと“体操”の違いなどに詳しく触れたいと思っている。

ここで、さらに具体的に初期から現代のアーランバ段階に至るまでの心身の変化について記しておくことにしよう。

●アーサナはあくまで瞑想のための準備

わたしは最初からアーサナ（体位法）はあまりやらなかった。アーサナとは、ヨーガ独特の呼吸法を取り入れた体操で、完成された形をできるだけ長時間保つというところに大きな意味がある。本来は瞑想をするための座法（脚の組み方）を快適に、しかも堅固にするためのものだという。なぜなら解脱のための瞑想には、一日十二時間

も同じ姿勢を保たなければならぬからである。長時間脚を組んだまま微動だにしないためには、身体の関節や筋肉が柔軟でなければならぬ。また、瞑想のみだと新陳代謝が低下してしまつて、健康を損ねてしまう。そこで、座法のためにも、健康のためにもアーサナが必要となるわけである。これが、アーサナが著しく発達した背景である。ヨーガには四百種類ものアーサナが伝えられている。

日本で一般的にヨーガだと思われているのが、実はこのアーサナなのである。前にも述べたように、瞑想と密接な関係のあるこのアーサナが、間違つて受け入れられているようだ。健康になるといふのは、本来の意味から外れていないにしても、「ヨーガで美しく」だとか「スマートに」などというだけの書物や教室が存在するのは、なにやら先哲に申し訳ないような気がする。

さて、わたしがアーサナをあまり実習しなかつたといつても、座法が組める程度には行なつたということである。そして、そのアーサナと共にプラーナーヤマ（調気法）とムドラーを実習した。それと瞑想中心のラージャ・ヨーガである。一つ一つを

わかりやすく説明してみよう。

●「調気の行」が完成したとき空中浮揚ができる！

プラーナーヤマとは、宇宙に満ちているプラーナ（生命エネルギー）を呼吸によってコントロールする方法である。プラーナを体内に取り入れて反対に毒素を吐き出すというのが原則である。このプラーナーヤマの完成は、高度な精神集中への必須条件となっている。これは、クンバカと呼ばれる保息（呼吸を止めていること）の間、精神集中をしやすいことからきている。

クンバカというのは重要な位置を占めている。というのも、呼吸を止めている時間の長さとの軽さが比例するからである。空中浮揚も心が軽くないと不可能である。わたしは七十二秒間コンスタントに呼吸を止められるようになったとき、身体が浮いた。空中浮揚は「輪廻の闇を消す調気の行が完成したとき」に得られる超能力だと前に書いたのを覚えていらっしやるだろうか。調気の行とはプラーナーヤマのことで

ある。修行においてプラナーナーヤマの重要なことは、ここからもうかがわれる。

◎「ムドラー」と「チャクラ」の意味

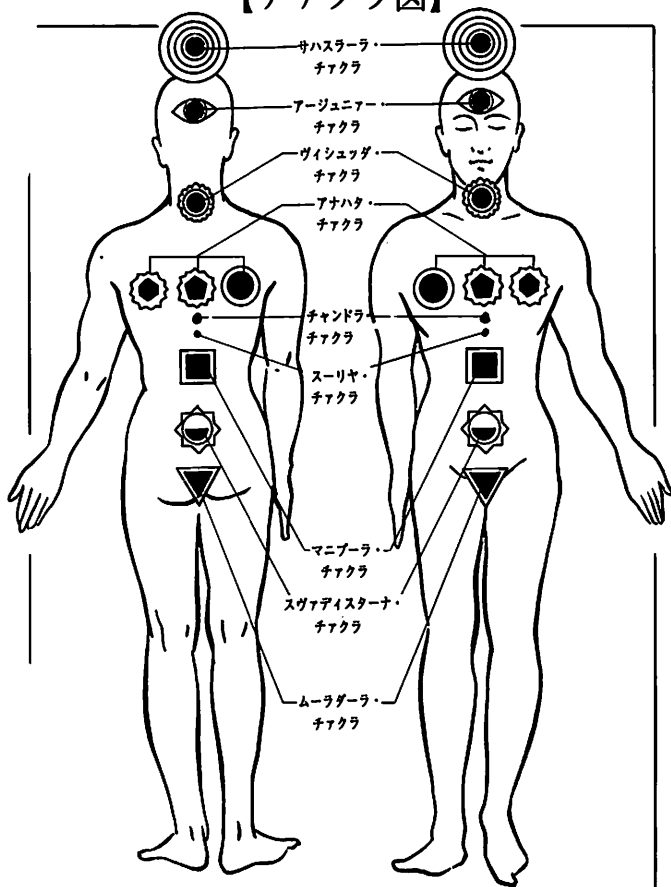
ムドラーとはアーサナ、プラナーナーヤマ、瞑想を組み合わせた行法で、超能力とも密接に関わってくる。ムドラーには十種類あるが、みなヒンドゥー教の主神であるシヴァ大神によって説かれた行法であると伝えられている。シヴァ大神とは、ヴィシュヌ神、ブラフマン神と並ぶインドの三大神で、宇宙の破壊、病気の治癒、解脱の援助を司っている。一般に死体置き場で死体を食らうという説話やその形相から恐ろしい存在として考えられているが、修行者にとっては大変優しく、示唆を与えてくれる神といわれている。

シヴァ大神は、いろいろと姿を変えて、ヒンドゥー教だけでなく他の宗教にも現われている。

例えば、チベット密教では、修行者はマニプーラ・チャクラ以上のチャクラを使う。



【チャクラ図】



—超能力を支配するチャクラ—

チャクラとは、人間の身体にある霊的なセンターで、主なものは七種である。しかし、普通の人はそれが眠った状態で働いていない。訓練によって開発されるのである。

また、チャクラは、身体の下部に位置するものに比べ、上部へいくほど次元が高くなっていく。

超能力もこのチャクラが司っているのだ。

これらのチャクラはすべてシヴァ大神が司っているといわれている。

チャクラという言葉は仙道のところでちょっと触れたが、重要なのもう一度説明しておこう。チャクラとは、人間の身体にある霊的なセンターで、超能力を使うときに必要な場所である。人間だったらだれでもチャクラをそれぞれの場所に持っている。主なものは七種である。ただ、普通の人はそれが眠った状態で働いていない。修行によって開発されて初めてそのチャクラが司る超能力を発揮するといふわけである。チャクラは、身体の下部に位置するものに比べ、上部へいくほど次元が高くなっていく。チベット密教の修行者がマニプーラ・チャクラ以上を使うといふのは、上部のチャクラ、高次元のチャクラを使うという意味である。

さて、シヴァ大神の話に戻ると、日本の真言密教における不動明王もシヴァ大神のもう一つの姿である。また七福神の一人である大黒も、シヴァ大神の化身である。もつとも、頭巾をかぶり、右に打ち出の小槌、左に大きな袋……という大黒は後世になつて作られたイメージであり、もとは真つ黒で怒りの相を示していたといふ。

わたしが見るシヴァ大神は、白銀のような、またドライアイスのような身体を持った神である。初めて目にしたときには、その美しさにびっくりした。威厳ある白銀色の光に包まれていて目鼻立ちは大変整っている。わたしはいつでも修行に迷いが生じると、シヴァ大神の指示を仰ぐことにしている。いつでもわたしの知りたいことを正確に教えてくれるのである。わたしが自分で考えて結論を出さなければならぬときには、ヒントを与えてくれる。シヴァ大神なしにはわたしの修行はあり得ない。

●「ムドラー」で得る八つの能力

さて、シヴァ大神がヨーガに与えてくれたムドラーは、八つの超能力を得させてくれる。ちなみに、八つの超能力とは、

- ① 身体を極限まで小さくして、岩石などを自由に通り抜ける力
- ② 身体を大空いっぱいになるほど大きくする力
- ③ 蓮の糸や綿くずよりも軽くなる力

④ 望みのままに、月にでも指を触れることができる力

⑤ 自分の意思するままに、どんな事柄でも実現できる力

⑥ 世界を創造し、支配する力

⑦ 万物を自分の意のままに従わせる力

⑧ 大地ほどに身を重くする力、である。

このような超能力がつくのは、ムドラーによってクンダリニーという霊的なエネルギーが覚醒するからである。それまでクンダリニーは尾てい骨の辺りに眠った状態である。覚醒したクンダリニーは、そのエネルギーをもって超能力を司るチャクラを開いていくのだ。

ムドラーは、それぞれにやり方が違うのだが、いずれも、アーサナやプラーナーヤーマよりいっそう高度な精神集中を可能とさせ、またスシュムナーという体内の氣道を障害物から解放させる。そして、時間を超越することさえできるようになるといふ。

わたしが初期に実践したヨーガのうち、身体を使うものは以上で、あとはラージャ・

ヨーガの瞑想である。

しかし、瞑想のポイントは原始仏教の「四つの記憶修習述（四念処<sup>しねんじょ</sup>）」を用いた。煩惱の強いわたしは、どうしてもこの瞑想を行なつて、煩惱から脱却する必要があつたのだ。

●考え得る限り最短の超能力獲得法

ところで、断わつておかなくてはならないのは、今まで修行の経験のある仙道や仏教の行法からいいものは残しているということである。仙道や仏教だけでなく、鍼灸、漢方、運命学に至るまで、残すべきところは残している。だから、わたしの修行法は一言でいえば、「仙道、仏教、ヨーガ等の密儀（奥儀、秘伝）の集大成」である。それは、わたしが体験的に作り上げた独自のものなので、この世でこれを実践しているのはわたしとわたしの弟子たちだけということになる。

普通、奥儀だの秘伝、密儀だのといつて、その奥深いところを隠したがる。おまけ

に、他宗や流派を排斥する傾向がある。それでは、目標とする到達点が同じだとしても、あまり効率がよいとはいえないのではなからうか。

わたしは大胆不敵にも、ヨーガを中心とした上で、その他のものの最高の密儀を取り入れてしまったのである。師を持たない、独立独行の修行者の気安さであろうか。いや、そうではない。これは、道に対する信念の問題である。解脱という崇高な目標を前にしては、どの宗教も、修行法も分けへだてがなくなってしまうといいと考えたのだ。その結果として、驚異的なスピードでここまで修行を進めることができたのである。ヨーガを中心とした独自の修行に入ってわずか三年半。空中浮揚を会得したのは、まだ二十代の若さであった。

#### ●瞑想のカギとなる「四つの記憶修習述」

では、わたしがこのように原始仏教を取り入れたラージャ・ヨーガの瞑想について記そう。前に述べた原始仏教の四つの記憶修習述とは、次の四点を示し、それを使っ

て瞑想する。

①我が身これ不浄なり

②受は苦なり

③心は無常なり

④法は無我なり

これらは、今もなおわたしの基礎的な方針である。

①の「我が身これ不浄なり」とは、肉体が汚いものだと思えることである。瞑想によって、この悟りに至ると魂は肉体に執着しなくなる。ここまで来ないと魂が肉体から抜け出す幽体離脱はあり得ない。わたしは、自分が不潔な人間だと知っていたから、なんなくこれをクリアした。しかし、自分を美しいと思いたがる女性には難しいらしい。わたしの弟子の中でも嫌がっている女性が多い。もつとひどくなると、その瞑想をしているふりをして、実際は無視している。わたしに、それがわからないと誤解しているとしたら、間違いである。

②の「受は苦なり」の受とは感覚のことである。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚などの感覚器官は苦の原因である。その苦は三種類あると思う。一つは、得た感覚を失ったときの苦しみ、二つ目は、今ある感覚以上のものを求めて得られない苦しみである。そして三つ目が、自分に合わない嫌なものを感じる苦しみである。これはだれでもよく理解できると思う。

③の「心は無常なり」もたいていの人が身にしみてわかっていることだろう。人の心は常に移り変わっているということである。

④の「法は無我なり」については、法をあまりに小さく考える一般的な解釈とは違う、わたしの考えで説明したい。法とは、大宇宙の法則であり、神であろうと人間であろうと、その前には身を委ねるしかない、という意味であるとわたしは思っている。

これら四つの瞑想によって、まず身体に執着しなくなる。知覚からも解放される。また、人や自分の心（意識・意志）に対して寛容になり、観念（固定概念）にも左右



されなくなる。そして宇宙の大法則の前には、人間界のルールなどままごとのように思えてくる。例えば、身分の上下、学歴、社会秩序などである。

このようなことを悟るということは、真我に近づき、解脱に近い境地となることだ。そして真理を見抜けるようになる。

四つの記憶修習述は、解脱して修行の必要がなくなるまで続けなければならない。人間の陥りやすい盲点なのであるから。

●「ラージャ・ヨーガ」と「バクティ・ヨーガ」の注意点

その他に、ラージャ・ヨーガでは二種類の瞑想をした。一つは、瞑想中に心に浮かんでくる事柄を無視し続けるというやり方で行なった。これは心を浄化するためである。濁った水も時が経てば次第に澄んでくるように、心の中の欲念、邪念、雑念などが消え去っていくのだ。

もう一つの瞑想は、原因と結果を徹底的に分析する方法である。例えば、気が重い

とする。どうしてそうなったのかを考える。そして、最終的には、そうなった原因を取り除くところまで進めていくのである。この瞑想に習熟すると、何かが起こったときに、パッと直感で原因がわかるようになり、さらに進むと、不幸の原因を事が起こる前に避けて通ることができるようになる。

以上述べてきたことが、わたしが初期に行なった修行であった。

その後、バクティ・ヨーガへと移っていった。バクティ・ヨーガとは、信仰的ヨーガともいわれ、神への献身そのものである。

一つは、供養法である。家のどこかに神々が降りてくる場所を定め、毎日、食事や果物、菓子などを捧げるのだ。あるいはお香の場合もある。

食事をするときには、自分は代理で、本当は神々が供養を受けてくれているつもりで食べる。それ以外するときでも、絶えず神々を唱え、神々の意思を押し量るよう努める。

ここで問題なのは、日本で考えられている神とヨーガにおける神々は違うというこ

とである。わたしの言っている神々とは、ヴィシユヌ神・シヴァ大神・ブラフマン神を中心とする宇宙の根源神である。それだけではない。大日如来、不空成就如来、宝生如来、阿弥陀如来、阿閼如来の密教系の神々、仏陀の十人の弟子たちと五人の向煩悩滅尽多学男(比丘)、ケーマー、ヤソーダラー、ウツバラヴァンナーなどの向煩悩滅尽多学女(比丘尼)の成就者(解脱者)も入る。また、仏教、ヨーガ、密教、仙道、神道の成就者もである。

ちよつと一度読むだけでは、わかりづらいことだろう。なぜこんなに多くの神々や成就者に供養するのか話さなければならぬ。それは、修行中に少しでも縁のあった方々に供養しなければならぬからだ。お礼という意味である。修行に役立つ書物を残してくれた人、幽体離脱をしたときに天界でいろいろと教えてくれた神々、不幸のどん底にあったわたしを救ってくれた神々などすべての方々にお礼をしたいと思うと、こんなにも多くなってしまうのだ。これらの神々については、わたしが深い瞑想状態に入ったときに無意識のうちに神々と語り合っていたのを、弟子たちが後に教えてく

れたのである。

なぜわたしがバクティ・ヨーガを始めたかという、自分の人生に神々の意思が働いていると感じるようになったからである。普通の人間だったら生きていけないような状態のときでも、神々に救われた。主に大変な経済的ピンチに陥ったときには、人間界の援助者が必ず現われるようにしてくれたのだ。何よりも修行生活に入ったこと自体が神々の意思であると思われる。だから、必然的に神々を信じ、献身するようになったのである。

このように、日本ではまだなじみのないヨーガの分野といえるが、これを実践するようになって、生きていくのが大変楽になった。何が起こっても、神々の意思だと信じ切れるようになったので動揺することが皆無となったのである。

神の御心のままに……となると、キリスト教とよく似ていることに気づかれることと思う。しかし、キリスト教とは違うのである。バクティ・ヨーガは、修行者自ら靈性を高めて神の意思を知ることとも含まれているのである。わたしが、シヴァ大

神を見ることができ、指示を仰げるようになったのも、このヨーガの修行による。この修行法はムドラー中心である。

◎「カルマ・ヨーガ」こそ精神的支柱となる

バクティ・ヨーガを続けながら、カルマ・ヨーガという倫理的なヨーガを修行に加えた。カルマ・ヨーガとは、すべての生き物の中に仏性・神性を認め、それから学び奉仕するというヨーガである。

例を挙げるならば、自分を裏切ったり、悪口を言ったりする人がいても、そういう人たちの行為を認め、自分を見つめ直す機会として学ぶのである。ゴキブリや蚊に対しても同様である。

わたしに、このヨーガが必要だったのは、傲慢になりやすい人間だったからである。よくよく自分の性格を分析すると、自分だけが正しいという思い込みがあって、他の人の心の動きを当然のことのように無視してしまうことがあったのだ。少しでも悪い

ところを直しておかないと、とても解脱までたどり着けないだろうと気づいたのである。わたしは、カルマ・ヨーガを現在でも実践し続けている。つまり、バクティ・ヨーガとカルマ・ヨーガが精神的支えとなっているのだ。

これまで、超能力、空中浮揚、わたしの修行などについて書いて書いてきた。超能力や修行について全く予備知識のない人は、ちょっと戸惑うかもしれないと思う。これらは、知られざる世界であるはずなのに、急に現実となってきたからである。

それに加えて、修行によって超能力を身につけるということ。このことを言い換えれば、普通の人間が修行によって超能力者となることになる。はなはだショッキングな言葉である。が、間違いなく事実である。現にこのわたしも、数年前までは実生活に疲れ、思い悩む一人の男だったのだから。

そして、それはいうまでもなく、あなたにもでき得ることなのである。

◆  
**第II章  
すべてが思いのままになる**

——  
驚くべき超能力パワー



## 1 修行で超能力がつくのは 当たり前

### ●超能力者迫害の歴史

これからわたしおよびわたしの周辺の者が、どのような超能力を備えているかをご紹介していくことにしよう。その前に、断っておきたいことがある。わたしの能力は決して初めから世に受け入れられたものではないということである。

マスコミなどによってわたしのことが紹介され始めると、わたしへの誹謗中傷が一変した。わたしが超能力者であるということが周知のこととなると、その力に否定的な人がいなくなった。反対に、「信じています。力を貸してください」という人が多くなった。以前のわたしも、現在のわたしも全く変わっていないというのに……。改めてマスコミの怖さを身をもって感じている。



日本のどこかで、以前のわたしのように非難や中傷に悩む超能力者はいないだろうか。あるいは、そういうことを恐れて、素晴らしい超能力をひたすら隠して息苦しい生活をしている人はいないだろうか。そんなことを考えると、とても心が痛むのである。

昔はもつとひどかったという。わが国で初めて超常現象の実験的研究が始められたのは明治四十三年のことである。心理学者である福来友吉博士みくらともきちが透視と念写の実験を開始したのだ。

しかし、この時代は、超能力を公おおやけにするには時期が早すぎたとしか言いようがない。時代に合わない“何か”が現われようとするとき、時代はその巨大なエネルギーによってそれを押しつぶしてしまう。福来博士の実験もその例に漏れなかった。彼の実験を否定し、インチキ呼ばわりする学者やマスコミがよってたかって非難したのだ。やがて悲劇が襲う。実験に協力していた超能力者・御船千鶴子が耐え切れずに自殺してしまったのである。もう一人の超能力者・長尾郁子も病死してしまう。そして最後には、

福来博士も助教授をしていた東京帝国大学（現在の東京大学）を追放されるという事態を招いてしまったのである。

時が流れて、昭和三十六年に「福来心理学研究所」が開設されて、改めて研究が開始されるまで、一連の事件のことも、福来博士のことも人々から忘れ去られていた。これが超能力に対する世間の反応だったのである。

閉鎖的な明治末期に比べて、郵政省が超能力の研究を始めたという現代は、わたしたちにとってはるかに良き時代の到来を告げているような気がする。来るべき新しい時代において、超能力者がどんな役割を担っているかなければならないか、考えておかなければならない問題である。

◎超能力の出ない修行は遊びである

超能力は、ヨーガではシッディと呼ばれ、修行の成功の現われという意味を持っている。

仏教でもこの語を音訳して悉地しゅちと表わし、同じく修行の成就という意味に使っている。

つまり、修行による超能力の顕現は、ごく当然のことと受け止められている。反対に考えると、超能力が出ないような修行は、遊びのようなもので、解脱など考えるだけに恐れ多いということである。

ところが、現在の日本はどうか。完全に修行に対する考え方が違うではないか。だから、著名な高僧でさえ、ガンの宣告に動揺してかえって命を縮めてしまった、などという話が出てきてしまうのである。

● 2 こんな超能力をわたしは使っている

● 下着が透けて見える！——N氏の体験

今でもわたしどもの修行場で語り草になっている話をご紹介します。

ある日、二十四時間の集中修行がわたしの修行場で行なわれていた。

参加者の一人であるS子さんが深刻な顔をしてわたしのところにやってきた。S子さんは二十二歳のOLである。なかなか言い出せないでいたので、

「どうした？」

と聞くと、

「シマシマだろうって言うんですよ……N氏が……」

「え？」

「そのう……シマシマだって言うんですよ。あの、透けて見えますか。」

何回か聞き直してようやくわかった。一緒に修行していたN氏が、彼女に「縞々のパンティーをはいているだろう」と言ったらしい。

「うーん、外からは見えない。あっはは、完全な透視だ、これは。」

わたしは感心したり、あきれたりだった。わたしは今まで関心がなかったので気づかなかったが、そんな興味を持っている人には、透視能力が変な役に立つらしい。S子さんは、まさしく縞々パンティー、といっても若い女性らしく彩り豊かな横ジマのパンティーをはいているのだという。

N氏はかなり俗っぽい目的のために超能力を利用してしまったが、ここでわたし自身の実験をお話ししよう。

●目を閉じていながら梵字を読む

わたしが確実な透視能力を身につけたのは、初めて空中浮揚をした前後である。そ

のとき、目を閉じていながら物体が見え始めた。それは、あたかも透明な水の中で何かを見ているという感じであった。

わたしは、眉間にあるとされる靈的な第三の眼が開いたのだろうかと思った。もし、そうなら面白い。テストをしてみようという気になって、近くにいた弟子をつかまえて言った。

「梵字を十種類持ってきてくれ。」

梵字は一枚の紙に一種類ずつ書かれている。十枚の紙がわたしのもとに運ばれた。わたしは自分の背後に弟子を座わらせ一枚ずつ選んで手に取るように言った。そこに書かれている梵字を後ろを向いたまま当ててみようというわけである。

わたしは目を閉じた。やはり思ったとおりであった。前方に水のようなものが広がり、そこに一つの梵字が浮き上がってきたのだ。眉間にあるアージュニア・チャクラの場所である。

「ヤッか？」

「そうです。」

「では次！」

こうしてやってみた実験は、百発百中であった。修行が進んで、また一つ新しい超能力を獲得することができたのである。空中浮揚のような劇的な感動こそなかったが、やはりうれしいことだった。

●遠くのものが見える遠隔透視

それからは、様々な透視ができるようになった。例えば、だれかがわたしのことを考えているとする。そういう場合、その人の顔が眉間に浮かんでくるのである。その浮かび方が、相手によって違っている。念の強い（集中力のある）人だったらはっきりと、念の弱い人はかすかかという具合である。また、その人の意識や功德の状態によっても明るかったり暗かったりという変化が出てくる。

こういうこともあった。長野県出身のS君が、超能力獲得セミナーに参加するため

に上京した折のことである。修行場に到着する予定時刻が過ぎても姿を見せない。彼と毎回顔を合わせている他の弟子たちが心配し始めた。一時間半が過ぎても何の連絡もないのだ。

そのとき、わたしの眉間にS君の顔が現われた。

「彼は近くまでやってきたよ。」

S君はその数分後にドアを開けた。わたしの眉間に顔が見えたのは、ちょうど渋谷駅に降り立ったときだったのである。

また、昭和六十年十一月末のことである。岩手から送られてくるはずの荷物がいつこうに届かない。仕事にも支障を来すので、発送人を透視してみた。すると、バルドー（死の世界）に入っているではないか。

「彼は、死んでしまったか、それに近い状態らしい。」

弟子の一人が問い合わせてくれたが、果たしてそのとおりであった。彼は心筋梗塞で入院していたのである。わたしが透視した日は、意識不明の重体であったそうだ。



これらの能力は、遠隔透視というのだが、透視ができるようになると距離は全く関係なくなるといことがおわかりいただけたと思う。

●ろうそくの炎が回る！

また、念力というのもよく耳にする超能力であろう。わたしの修行場で弟子たちがよくやる念力実験があるのだが、そのやり方を紹介しよう。これは簡単に実験ができるので、興味のある人は実験してみるとよいと思う。

まず、ろうそく台にろうそくを立て、火をつける。その周りをダンボール箱で囲って、横から全く空気が入らないようにする。つまり、上部だけが開いているようにするのである。

そうすると、空気の流れがほとんどなくなるので、ろうそくの炎も揺れなくなる。それを念力によって動かしてみようというのである。

初心者（熟練者は精神集中がなくても、ろうそくの炎が揺れる）は、ろうそくの炎

と自分のチャクラに交互に精神集中を繰り返す。そうすると次のような変化がろうそくの炎に現われる。

ムーラダーラ・チャクラ（尾てい骨）に精神集中したとき、念力があれば炎がぐるぐると回転する。スヴァディスターナ・チャクラ（性器）に精神集中すると、炎は上下に不規則に振動を繰り返す。

マニプーラ・チャクラ（へそ）の場合は、炎が上下に規則正しい振動をする。アナハタ・チャクラ（胸）の場合、炎は上へと伸び上がる。ヴィシュッダ・チャクラ（喉）では、小刻みに振動する。アージュニア・チャクラでは、炎は強く、早く、そして細かくリズムカルに振動する。

このように、各チャクラに対応して念力の波動が違い、炎の動き方も違うのだ。このことに気づいたのは、わたしが最初なのではないだろうか。そこで初心者は、それぞれのチャクラから波動を出す訓練を重ね、チャクラを自在に動かせるようにしたらよいと思うのである。

あるチャクラの波動を出すことができないというようなことがあったら、そのチャクラが働いていないとみてよい。チャクラに関しては後で詳しく述べる（94ページ参照）が、チャクラはまたそれぞれの超能力を支配しているのである。だから波動を出せないチャクラがあるとすれば、そのチャクラが司っている超能力も身についていないと判断できるのである。

しかし、実験結果がどうであつても、後でチャクラを開き超能力を得る方法をお教えするので、何も心配はいらない。

●「わたしの感情」を「あなたの心」に注ぎ込む

六十年十月のことである。一人芝居で有名なA氏という俳優が、わたしに相談を持ちかけてきた。超能力や修行によって得られる強い精神力を、芝居に利用できないか、というのである。彼は座長も務めている。

そこでわたしは、自分が抱いたイメージと同じものを他人に与える超能力（ヨーガ

経典では、世界を創造し破壊する超能力とされている）を見せてあげることにした。折しも、T氏という男性も相談事があったのでわたしの修行場に来ていたので、二人一緒に同じイメージを与えることにした。わたしは、どんなイメージを伝えるか二人には言わなかった。

わたしは、シヴァ大神に供物を捧げているような意識で礼拝した。わたしはいつものように何とも言えず満ち足りた気持ちでいっぱいになった。

すると二人とも異口同音に「ウキウキとしてきた」という。その表情を見る限り、言葉に嘘はなかった。そこでわたしは「シヴァ大神に供物を捧げるイメージを送ったのだ」と説明した。

次に悲しみのイメージを送った。自分の愛する者が次々に亡くなっていってしまうという悲しみである。彼らは口をそろえて言った。

「胸にしみじみと悲しみが伝わってきました」

同じように怒りなど他の感情についても行なってみたが、いずれもはっきりと二人

に伝わっていた。

こうして、芝居に超能力を使えば、観客にも役どころと全く同様の感情に浸らせることができるということを知ったのである。その後彼は全力で修行を進め、ついに新境地を開いた。超能力を使った彼の芝居は、大好評であったという。芝居がはねた後、お客を集めて、様々に感想を聞くのが彼のやり方である。その反応が今までと全く違うのだという（もちろん観客は、いきさつなど知らないままである）。

●十五メートル先のヒソヒソ話が聞こえる

遠隔透耳とうじ（天耳通てんにつう）も、面白い超能力である。

ある日のこと、わたしと女性の弟子二人は渋谷の雑踏の中を歩いていた。わたしが先頭を行き、彼女たちは十五メートルほど後方をつけてくる形であった。

わたしは、喉のヴィッシュダ・チャクラに精神集中をして、歩きながら修行を続けていると、彼女たちのヒソヒソ話が聞こえてくる。かなり離れており、しかも雑踏の

中である。超能力によって聞こえてくるのである。

女性は何かとおしゃべりだから、普段は彼女たちの会話など気にも留めないのだが、そのときの彼女たちの話はポイントがずれているということが聞いていたうちにわかった。その夕催された「超能力レセプション」の結果について云々していたのである。わたしの弟子である以上、物事を正確に見てほしいので、振り返り、彼女たちが近づいてくるのを待つて言った。

「それは、そうじゃない。どんな能力も“期”が熟さない限り駄目なことがあるのだ。」  
わたしにそのように言われて、二人がびっくりしたのはいうまでもない。絶対にだれも聞いているはずのない内緒話であったのだから――。断わっておくが、ヴィシユッタ・チャクラに精神集中をしていたから聞こえただけの話で、普段は別に盗聴しているわけではない。

遠隔透耳の場合、距離には関係なく、いつもすぐそばで聞くような大きさを音や声が聞こえるということが、大きな特徴であろう。

●「供儀祭」で天気を変える

冬の丹沢（神奈川県）で五泊六日の集中セミナーを催した。ある山荘で行なったのだが、冬季はバスが通っていないのでそこまで歩かねばならない。速い人で一時間半、ゆっくり登ると三時間もかかってしまうので、雨が降ってはお手上げである。総勢七十名が参加するのだ。中にはまだ病弱な人もいる。

最低、行きと帰りは天気が良くなければならない。出発の日は前日に少し雨が降り、当日も天気予報では雨となっていた。一足先に出たわたしは、

「君たちが来るころには、いい天気にしてあげるよ。」  
と後発の弟子たちに言い残しておいた。

こういうときは、儀式ヨーガしかない。三角壇の供儀祭くぎさいによって供物を神々に捧げ、力を貸していただくのだ。それを行なったため後発の弟子たちが歩いてくるころには神々の力によって晴れわたっていた。地面も少々ぬかるみがある程度にまで回復していたのだった。

帰りはまた、前夜になっても雨が降り続いていた。わたしは再び供儀祭を行ない神々に祈った。神々は聞き届けてくださり、素晴らしく美しい天気にしてくれた。参加者全員、澄んだ青空と山々の美しい展望を心ゆくまで楽しむことができた。

父親の代から山荘にいるという管理人が言っていた。

「秋にはこんな天気になることもあるけれど、冬には珍しいことだ。」と。

### ●霊治療で体を治す

わたしのところに、身体の具合が悪いといって来る人が多い。そういう人に対して、わたしはまず霊眼を使って透視をする。そうすると、病んで「氣の流れ」が停滞しているところが黒く見える。特にガンや喘息は、真っ黒になっている。喘息は、その場で楽にしてあげることができる。ただし、完全治癒を目指すなら、本人の努力も必要である。



ガンの場合は二通りに分けられる。黒いところにやや薄めのまだらがあるものは治るガンである。この場合は、わたしが生命エネルギーを注入し、本人も回復を願って修行に励めば必ず治る。

仙道ではガンについてこのようにいつている。人間には第一の死期、第二の死期、第三の死期があるという。第一の死期から人を救うのは、現代医学である。反対に言えば、現代医学がなかったら、第一の死期が来たときに命を落としてしまうということである。同じように考えて、第二の死期を救うのは漢方と鍼灸で、第三の死期を救うのは山（仙道）だという。そして、ガンは第三の死期に属しているのだ。そういうわけで、本人の修行がないと完全な回復は難しい。

ところが、不治のガンも中にはある。この場合は完全に真っ黒である。わたしのもとに来るのがすでに手遅れとなつてからだど、いくら生命エネルギーを身体に注ぎ込んであげても救うことはできない。本人の修行に費やす期間が足りないからだ。しかし、布施の実践によつて一、二カ月は死期を遅らせることができるので、その間に修

行に打ち込めば、恐ろしいこの病魔から逃れることも十分に可能である。

その他の軽い病気は、靈治療（こちらのエネルギーで治す）だけで治るが、現在はやっていない。二、三カ月靈治療をやりすぎて、自分自身のエネルギーを使いすぎ、身体の調子を崩してしまったことがあるからである。そんな調子が続けていれば、確実に八年後には自分の死期を迎えてしまう。そこで、軽い病気の人たちにも、修行で治すことを勧めている。

### ●驚異のシャクティパット

いろいろとわたしの超能力のことを書いてきたが、わたし自身が自分で「これだ」と思っている超能力は、シャクティパットである。

シャクティパットとは、わたしの持っている靈的エネルギーを相手に直接注入することによって、その人の靈的進化を助けてクンダリーニを覚醒させたり、心を成熟させたりするというものである。第三章「へ火と水の洗礼」を受けよ」でシャクティ

パットの効果について触れるつもりであるが、ここではシャクティーパーットの瞬間を、実際の体験者に再現してもらおうことにしよう。

なお、オウム真理教では現在マハー・ムドラー成就という小乗仏教の完成を果たし彼岸へと到達した正悟師せいごしのうち、さらに激しい修行を行なった者のみにシャクティーパーットを行なう権限が与えられている。

M・N君（二十四歳・神奈川県小田原市在住）の体験

導師からシャクティーパーットを受けていると、虹色の光が二本見えた。一本は、左下から右上へ、そしてもう一本は右下から左上へといずれも斜めに走った。

「クンダリニーが昇ったよ。」

という導師の声が聞こえたとき、その光はらせん状に変わっていた。

シャクティーパーットが終わったとき、身体が動かなくて起き上がれなかった。催眠状態のような感じがしたけれども、意識ははっきりしていて、身体がなくなってしまう

たような感じで手足の感覚は全くなかった。

その後、小周天という、エネルギーを転回させる技法を行なったところ背骨が熱くなり、アナハタ・チャクラ（胸）から後頭部へものすごい量のエネルギーが昇っていった。その夜は寝ているときでも背骨が暖かかった。

昭和六十年の三カ月間に百人くらいのクンダリニーを覚醒させたのを手始めに膨大な人数のクンダリニーを覚醒させている。常識的には、クンダリニーの覚醒は、エネルギーが間違った上がり方をする危険性があるので、極めて難しいとされている。それをわたしは、安全にかつ簡単にやってしまうのであるから、我ながらすごいと思っているのである。

相手のクンダリニーが覚醒していく様子は、霊眼で見ている。まず、相手の眉間に当たったわたしの親指から白銀色の光がシウムナー管（クンダリニーの通り道）を通じて尾てい骨のムーラダーラ・チャクラまで降りていく。これを三回ほど繰り返すと、

光はパッと消えてしまう。これは、スシユムナーにクンダリニーの通り道ができたことを意味する。

さらにシャクティーパーットを続けていると、小さな豆粒ほどの赤い点が相手のムーラダーラ・チャクラに四点くらい見え始める。このとき、わたしのムーラダーラ・チャクラも呼応してむずがゆくなる。それらの点は初めは離れて見えるのだが、やがて一カ所に集まり、逆三角形を作る。そのとき、わたしのムーラダーラ・チャクラは熱くなる。三角形は次第に大きくなり、骨盤ほどの大きさにまでなる。わたしのムーラダーラ・チャクラはいっそう熱くなり、エネルギーが上へと昇り始める。同時に相手の赤いクンダリニーも上へと昇り始めて、それがわたしの親指のところまで到達すると、相手の身体全体が赤く見えるようになる。これで第一回目のシャクティーパーットは終了である。たいていこれでクンダリニーの覚醒も終了する。シャクティーパーットを受けた人は以後超能力をどんどん獲得していくことができるのである。

### 3 七つのチャクラに超能力が隠されている

#### ●チャクラ別超能力

少なくとも霊視ができないと真の超能力者とはいえない。それは、霊視によって超能力を司るチャクラを見ることができないと、自在にチャクラを操ることもできないからである。チャクラを霊視することができないのに超能力を使えるという人もいるだろうが、その力は不完全なはずだ。

各チャクラがどんな超能力を司っているか、まだ話していなかったので、それについて書き記しておくことにする。チャクラは目には見えないが、わたしたちの体には存在している霊的なセンターで、肉体のホルモン、神経系統にも影響を与えている。霊視によって見る事が可能である。『シヴァ・サンヒター』に記述されていると

ころにのっとって記していくことにする。

●ムーラダーラ・チャクラ（尾てい骨）

ムーラダーラ・チャクラは、わたしの靈視によると、暗い赤色で逆三角形をしている。まだ靈力が弱かったころは、赤い点が三つ見える程度だった。それが徐々にはつきりと見えてきたのである。このチャクラは肉眼によっても見ることが可能である。尾てい骨の辺りの皮膚が逆三角形に赤くなっていたとしたら、それがそうである。

ムーラダーラ・チャクラが完全に開発されると、靈視で骨盤ほどになっているのを見ることができるといえる。

★ムーラダーラ・チャクラが司る超能力――

- ・ダルドリー・シッデイ（カエルのごとく高く跳び上がる超能力）
- ・過去、現在、未来の出来事を、その原因も含めて知り尽くす
- ・望むことがすべて実現する

・高位の神霊を見ることが出来る

●スヴァディスターナ・チャクラ（性器の根本）

このチャクラは、霊視すると、八枚の花弁を持っている。経典によると六枚だという事になっていてるのだが、わたしには八枚見えるので、このまま書くことにしよう。花弁の中心は半月形が見える。色はオレンジで絶えず振動している。そして驚いたときなど、そのチャクラにツンと響くのである。

★スヴァディスターナ・チャクラが司る超能力――

- ・多くの異性に愛される
- ・不老長寿
- ・低次元の霊視、霊聴を得る



● マニプーラ・チャクラ（へそ）

形は四角形で、色は輝くような藍色である。マニプーラ・チャクラが開発されてくると、へその辺りが痛むのでよくわかる。へそに棒を立てられて押し広げられているような痛さである。

★ マニプーラ・チャクラが司る超能力――

- ・ この世において欲するものが手に入る
- ・ 死神をだまして生き延びることができる（面白い表現だ）
- ・ 他人の体内に入り込むことができる
- ・ 地中に埋蔵されている宝物を透視することができる
- ・ 黄金等の貴金属を製造することができる
- ・ 過去の解脱者の姿を見ることができる

● アナハタ・チャクラ

これは、わたしだけの考えであるが、アナハタ・チャクラは三つある。一つは右乳頭、もう一つは左乳頭で、残る一つは左右の乳頭を結ぶ線と正中線が交わる点にある。左乳頭にあるアナハタ・チャクラは黄金色で、正中線上にあるものはスカイブルーである。そして、右乳頭にあるものは深紅で、形もそれぞれ違う。左が十二花卉を持った六角形である。中心は十枚の花弁を持った五角形、右は花弁を持たない円である。わたしが空中浮揚に使うチャクラは中心の五角形のものである。これを振動させて、浮揚に必要なエネルギーを出すのだ。また、右のアナハタ・チャクラは、心を浄化させるのに役立つ。そのため、解脱するのに必要となってくるのである。

このようなことから考えて、右と中央のチャクラは重要である。一般的には左しか知られていないのだが。

また、アナハタ・チャクラが開発されてくると、次のような変化が現われる。

・ 無気力になる

・心臓が痛む

・妄想にふけるようになる

・心悸昂進が起こる

★アナハタ・チャクラが司る超能力――

【左のチャクラ】・他心通（他人の心の中を読むことができる） ・相手の心を動かすことができる

【中央のチャクラ】・空中浮揚 ・空中歩行 ・透視、遠聴

●ヴィシユツダ・チャクラ（喉）

このチャクラは十六枚の花弁を持っている円形である。色は灰色で、開発されくと、喉がいがらっぽくなる。完全に開いてしまうと、喉に精神集中をしたときに、耳に響くようになる。

特に興味深い変化は、自分が人間ではなくなるのではないかという恐怖に襲われる

ことである。修行を放棄したくなるほどである。わたしの場合、死に直面したときの恐怖もこれと同じではないかという気がした。

★ヴィシユッタ・チャクラが司る超能力――

- ・不老不死
- ・意のままに世界を支配できる
- ・全身が快感状態になる
- ・死後も肉体をミイラ化して、何千年もこの世に残しておく
- ・動植物と会話ができる

●アージュニアー・チャクラ（眉間）

アージュニアー・チャクラの花弁は大きく分けて二枚である。そして、それぞれが四十八枚に細分化されている。色は白銀、形は長円である。

驚いたことに、わたしは二重写しのようになった二つのアージュニアー・チャクラ

を眉間に持っている。他の人が、二つのアージュニア・チャクラを持つていたという例には、今までのところわたしはぶつかっていない。

わたしが持っているもう一つのアージュニア・チャクラは、赤と黄の花弁を持っている。そして白銀の光を發し、スポーク（花弁）は合わせて九十六ある。わたしは、このチャクラは煩惱破壊界（涅槃、解脱者が行く世界）に通じていると確信している。なぜなら、ここを通過して高次元の神靈（神）がわたしの肉体（大脳）に降りてくるからである。

しかし、実際のところ、なぜわたしだけがもう一つのアージュニア・チャクラを持っているのか、また、何のためにそれを使わなければならないのかわかっていないのである。

アージュニア・チャクラが開く前にはそこに圧迫感を感じる。そして開いていくにしたがって、圧迫感はしびれに変わっていく。そして、最後には白銀色の光が射し込んでくる。

★アージュニアー・チャクラが司る超能力――

- ・自分の内側にいる守護神と外側にいる守護神を見ることが出来る
- ・微細物質（原子など）を見ることが出来る
- ・今までについた超能力がさらに磨かれていく

●サハスラーラ・チャクラ（大脳中央）

サハスラーラ・チャクラの色は、薄いブルーの入った白銀である。形は球状をしている。

このチャクラが開いていくときには、そこが熱くなってくる。ところが開き切ってしまうと、サハスラーラ・チャクラから、冷気あるいは冷たいしずくのようなものが出たり落ちる。

★サハスラーラ・チャクラが司る超能力――

- ・身体を極めて小さく（大きく）させる

- ・ 身体を軽く（重く）させる
- ・ どこへでも好きなどころへ行ける
- ・ どんな望みでも実現できる
- ・ どんなものでもつくり出せる
- ・ 万物を意のままに動かす

以上、これまで述べてきたように、チャクラはそれぞれの部位にあり、それぞれの超能力を司っているのである。そのチャクラが開発されていく順序は個人個人によってまちまちである。わたしは、ムーラダーラ・チャクラとアージュニア・チャクラは一緒に開発された方がよいと思う。それは両者がつながっているからである。そして、残りのチャクラに関しては、どのような順序で開いていっても構わないと思っている。

さて、これから今までに触れていないその他の超能力について見ていきたい。

#### 4 心が遊ぶ・消える・読心・願望成就の超能力

●ここにいてあそこにいる「幽体離脱」の超能力

幽体とは、微細物質でできているもう一人の自分である。超能力があってもなくても人は幽体を持っている。いつもは、本当の身体と重なって肉体に収まっている。

この幽体が肉体を抜け出していくのが、幽体離脱と呼ばれる現象である。抜け出した幽体は、異次元に遊んだり、現世で好きなのところに飛んで行ったりと、どこでも自由に動き回ることができる。

わたしが幽体離脱の練習をしていたころ、街中でわたしの幽体を見たという人がいた。その人はわたしの修行場に通っているR子さんというOLである。

ある日、渋谷のバス停で「わたし」を見かけたという。あいさつをしようと思って、



声をかけたが、返事をしない。それどころか、すぐ前にいる彼女が目に入らないふうだった。「わたし」は歩き出した。それにつられて、「わたし」を追っていったが、どんだん先に行ってしまい追いつけない。そして、とうとう見失ってしまったという。

それと同じ時刻、本物のわたしは修行場で深く瞑想に沈んでいた。

また、こんなこともあった。

「ねえ、今日の三時ごろ何かしてなかった？」

こう妻が聞いた。

「修行中に幽体離脱をしていたかな。」

「それで、うちに来たの？ 赤い球みたいな光ったのが部屋の隅にいたのよ。大きくなったり小さくなったりして、まるで呼吸しているみたいだった。子供たちも知ってるわ。」

妻や子供は、わたしの魂そのものを見ていたらしい。

●バリヤーで姿が見えなくなる

信じられないことだろう。現にドンとして存在している肉体が消えてしまうというのだから。まるで忍者である（もつとも、そのような忍者像は後世の大衆芸術が作り上げた虚像らしいが）。

どうして身体が消えるかという、身体に“氣”を巡らせたときのエネルギーが、一種のバリヤーとなって身を包み隠してしまうのである。

「み、見えないっ。」

突然一人の若者が叫んだ。

「えっ？ 実はわたしにも見えなかった。でも目の錯覚かと思った。」

若者の一言によって、その場にいた二十人全員が、自分たちの錯覚でないことを知ったのである。

六十年十一月、短期集中修行を開いたときのことだった。皆、超能力を得ようと全国各地からやってきた人間ばかりであった。わたしは、どんな超能力が存在している

のか見せてあげようと思って、「姿を消すよ」と言ってから、消したのである。しかし、前もって言われていたにもかかわらず、目の錯覚かと思った人が何人かいたわけである。わたしが超能力者であることを承知していても、やはりこの現象は想像を超えていたらしい。

この超能力はまた、上半身だけ消すとか、下半身だけ消すとかいうこともできる。

●わたし自身はあまり使いたくない「他心通」

あの人は何を考えているかわからない、というときなど、この他心通という力があつたら便利だろう。

わたしは、相手の心を知らない方がいいと思うこともあるので、この超能力を使っていない。ただ、初対面の人には、何を話題にしたらいいか知るために使うことがある。そんなときは、顔を合わせただけで、相手の心が伝わってくるのである。

わたしの弟子の中で、この超能力を得た者は、恋人の心がわかってうれしいと言っ

ている。いくら気心の知れた恋人といっても、長いつきあいの中には、トラブルがあったり、けんかしたり、他の異性が近づいてきたりと波乱万丈である。もし、その人と結婚し、人生を共に歩んでいきたいと決心したなら、それなりの技術が必要となってくる。この他心通を得た人は、理想的な伴侶を手に入れて、うまくやっていけることだろう。

他心通がなくて、それでもある人を自分にひきつきたいという望みを持つ若い女性  
が、わたしの周囲に何人かいる。そういうときは、やむなくわたしがどうやったらう  
まくいくか教えてあげることになってしまう。彼はこういう人間で、こう思っている  
から、君はこうしなさい……と。

●弟子が気づいた不可解な超能力

不可解な感じの超能力がある。わたしがマントラを唱えながら深い瞑想に入ると、  
周囲の人間が、

「身体が大きくなったり小さくなったりしていましたよ。」

と言うのである。だから、最初にこの現象に気づいたのは弟子の一人であった。確かに、ヨーガの経典に書かれているが、わたしは少し誇張された表現だと思っていたのである。

自分では、瞑想によって意識を広げていったときに身体が大きくなり、意識を小さくしていったときに身体も小さくなっているのではないかと思う。

実際に使うときは、小さな穴をくぐるとか、大きくなってガリバーのような働きをするとかといった場合しかないのではないかと思う。だから、わたしは積極的にこの超能力を磨こうなどということは考えていない。

●漏尽通——相手の迷いを見破る

ある高名な仙道研究家が、「漏尽通は、精液を漏らさない超能力だ」と雑誌に書いていた。とんでもないことである。仏教には、中心となる超能力が六種ある。他心通、たしんつう

宿命通、天眼通、天耳通、神足通（空中浮揚）そして漏尽通である。みな、今までに説明したものと、これから書こうと思つてゐることなので、ここでは詳しい説明を省くが、漏尽通はこの中で最高とされる超能力なのである。それを精液云々とは嘆かわしいことだ。

漏尽通は、相手の煩惱の状態を見極める超能力でもある。わたしも、この超能力は欠くべからざるものだと思つてゐる。特に宗教的指導者、精神的指導者、修行者にとつてはそうであらう。

例えば、あつという間に「この人は修行する・しない」「解脱する・しない」がわかる。だから、わたしは大変楽である。余分な労力を使わずにすむからである。

### ●死生智——未来世を見透す

他の団体に修行したという二十八歳の女性がやってきた。しばらく修行について話し合つていたが、そのうち死生智に話が触れた。死生智とは、次に生まれ変わつてい

く来世がわかるという超能力である。

「わたし、生まれ変わったらどういう人間になるか知りたいんです。教えてください。」

「そういうのを見るの好きじゃないんだよ。だからやめとこう。」

わたしは断わったのだが、彼女に押し切られて、とうとう彼女の来世を見ることになった。

「うーん、猫が見えるな。白い猫だ。猫は好きか。」

「はい、好きです。」

「君は、猫の鳴きまねをしたり、夢で猫になったりしないか。」

「そういうこと、よくあります。」

「君は、来世では人間ではないみたいだ。白猫だよ。」

彼女は、「人間でなくてはいや」と言っただけで帰っていった。わたしだけって後味が悪かった。だから、人の来世を見るのは好きではないのだ。現世で人間だったから、来世でも人間というわけではない。あらゆる他の生物に生まれ変わる可能性の方が大きいのだ。

である。人間に生まれ変わりたかつたら、また天人や神々に生まれ変わりたかつたら、徹底的に功德を積むことである。

ところで、例の彼女は不安になつたらしく電話をかけてきた。本当にわたしが超能力を持っているか確かめようと思つたらしい。

「わたしは今までに二種類の職業に就きましたが、そのうちの一つを当ててください。」

「……手を使う仕事だろう。技術者だ。」

「そうです。(沈黙) じゃ、もう一つの仕事を当ててください。」

わたしはバカバカしくなつたので、「修行場に来なさい」と言つて電話を切つた。

死生智という超能力は使い方次第なのかもしれないが、わたしにはあまり魅力的に感じられない。

●日航機墜落は前もつてわかつていた

クンダリニーがサハスラーラ・チャクラを突き抜けたとき、予言の力が生じる。そ



れは、宇宙的規模の未来から、個人生活の未来まで、様々な未来に関して前もって知ることができる。

予言といえば、十六世紀のフランスの偉大な予言者ノストラダムスがあまりにも有名である。彼は、はっきりとした予言をすると、世間を動揺させ、自分が責められるので、「読者の感情を害することのない、秘密めいた構成の詩にした」と息子への手紙に書き残している。

その予言詩集が、一五五五年に出版された『諸世紀』なのである。彼は「時が流れ現実となるときに、予言を明白に解釈できるようにする」と言っていたが、事実ノストラダムスの死後、多くの予言が現実となって人々を驚かせた。そしてそれは、これからも続くに違いないのである。一九九九年には、人類の滅亡を暗示していると思われる詩もあり、多くの人々の関心を集めている。

わたしも弟子や周囲の人間に「今年はこうなるよ」とか「〇月になったら変化が出るから、それまで動かないでいい」とか予言することがある。昨年（一九八五年）の

事件でいえば、エトナ火山の爆発と多数の死亡者、メキシコ大地震、日航機墜落と続発した日航機事故、いずれも一カ月前から二、三週間前にわかっていた。また、弟子の中にも予言の能力を自分のものにしていった人がいる。その弟子の場合は、最初は夢という形で、今では瞑想中に、近い未来のことがわかってくるという。

●願いは何でもかなえられる！

望んでいることや願う事がなんでもかなう。わたしの弟子の中には、この超能力を得て幸せになった人が多くいる。一流企業に勤めるY・A嬢は、妻子ある上司が好きで、その上司と交際していた。ところが突然、彼の方から別れ話を切り出したのである。いくら不倫の恋でも、彼と別れることなどできないと悲しむ彼女がわたしに相談してきた。

彼女の前世を見てみると、解脱をする前に死んでしまった尼僧である。解脱を果たせなかったものの、かなりの功德を積んでいたの、彼女は生まれ変わったときに幸

せな少女時代を過ごした。ところが修行には縁がなかったので、前世からの功德を使い果たし悲しみが訪れたのである。

ここでちょっと功德について触れておきたい。功德とは現世、死後に良い報いを受けるような善い行ないのことを指す。わたしは中でも布施が重要であると思っている。布施とは人に物を施し恵むことであるが、本当は物に限らない。人に安心感を与えてくつろがせる安心施や真理を教える法施など、物品にまして功德となる布施がある。これは、わたしの考え方の基調となることなので、機会があったら、詳しく述べたい。さて、話は元に戻る。わたしは彼女に修行を勧めた。功德を増やさせるためである。彼女は素直に修行を始めた。すると間もなく、別れようと言った彼の方から再び近づいてきたのだという。それだけでなく、他の男性からも交際を申し込まれ、悲しみがあつという間にモテすぎる悩みに変わってしまったのだ。

他にも、かなり修行の進んでいる男性で、思いどおりの日々を過ごしている人がいる。ほとんど遊んでいるように見えるのだが、世界を股にかけて大活躍をしている。

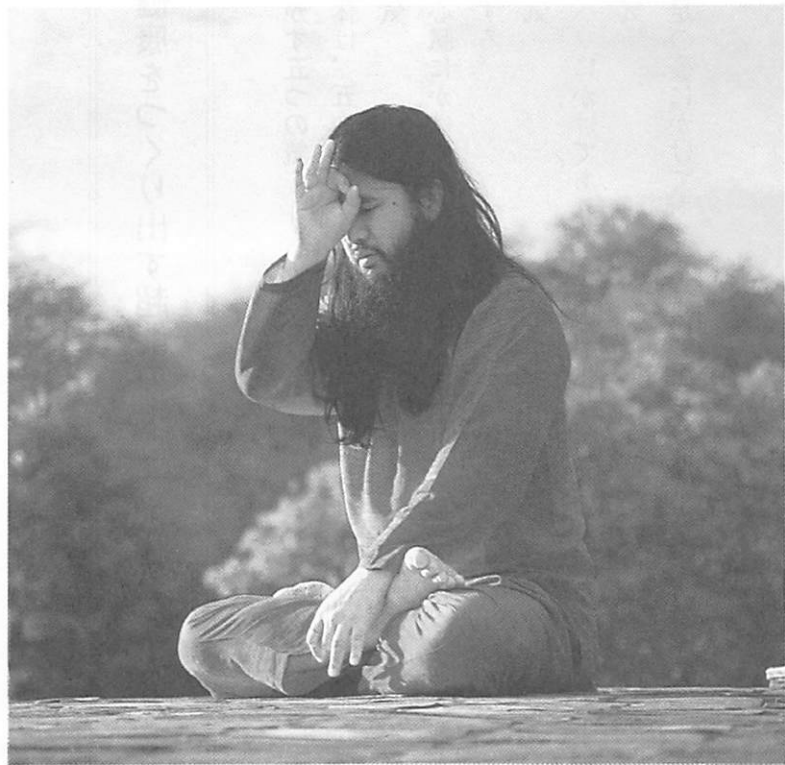
個人商社のような仕事とお考えいただければいい。お金にも全く不自由していない。うらやましい生き方である。

「小説家になりたいから、投稿して勉強する」とわたしに話していた人は、小説家としてのデビューではないが、勉強する間もなく実際に原稿書きの仕事に追われている。雑誌社、出版社からの依頼が相次ぎ「こんなに大変だと思わなかった」とこぼすほどである。

また、当時高校生だったI君は、一流大学であるT大の法学部を希望していたが、模擬テストで出た合格可能性は「四%以下」であった。その後、勉強とともに修行に励んだ結果、見事に現役合格を果たしたのである。これも願望成就の超能力のお蔭であろう。

ちなみにわたしの場合は、欲しいが見つからずにいる經典をすべて手に入れることができたり、知りたい修行法を知ることができたりするので、満足している。

第Ⅱ章 すべてが思いのままになる



● 5 健康をつくり出す超能力——五つの氣とチャクラの応用 ●

● 身体を動かす五つの氣

人間の身体は、五つの氣（エネルギー）によって動かされている。五つの氣とは、

① プラーナ氣

鼻頭から心臓にかけてあり、プラナーナ（宇宙エネルギー）を呼吸とともに体内に入る働きをする。

② サマーナ氣

心臓からヘソにかけてあり、食物を消化し、養分を巡らせる働きをする。

③ アパーナ氣

ヘソから足の裏にかけてあり、身体の汚れを取り去る働きをする。

④ ウダーナ気

鼻頭から頭にかけてあり、エネルギーを上昇させる働きがある。

⑤ ヴィアーナ気

全身にわたって身体を守っている気である。

● 局部的な病はチャクラで治す

健康にはこの五つの気と、前述の七つのチャクラが大きく影響している。例えば、便秘症を見ていると、これはアパーナ気の働きが悪くなっているときに起こる。そのときは、アパーナ気に精神集中をすると簡単に治ってしまう。

また、消化不良の場合は、消化を司るサマーナ気に精神集中を行なう。その部分が真っ赤に見えるようになったら、消化は完了していると思つてよい。

このように、病気があった場合、その病気の場所を動かしている気に精神集中をすれば案外簡単に治るものである。

範囲が広い場合は、気を利用して病気を治すことができるが、肝臓が悪いとか、心臓が悪いとかいうように、部分的な臓器が悪いときには、チャクラを利用する。

チャクラは、前に説明した七つのチャクラに新しく二つのチャクラが加わって九つである。新しく加わった二つのチャクラについて説明しておこう。

● スーリヤ・チャクラ

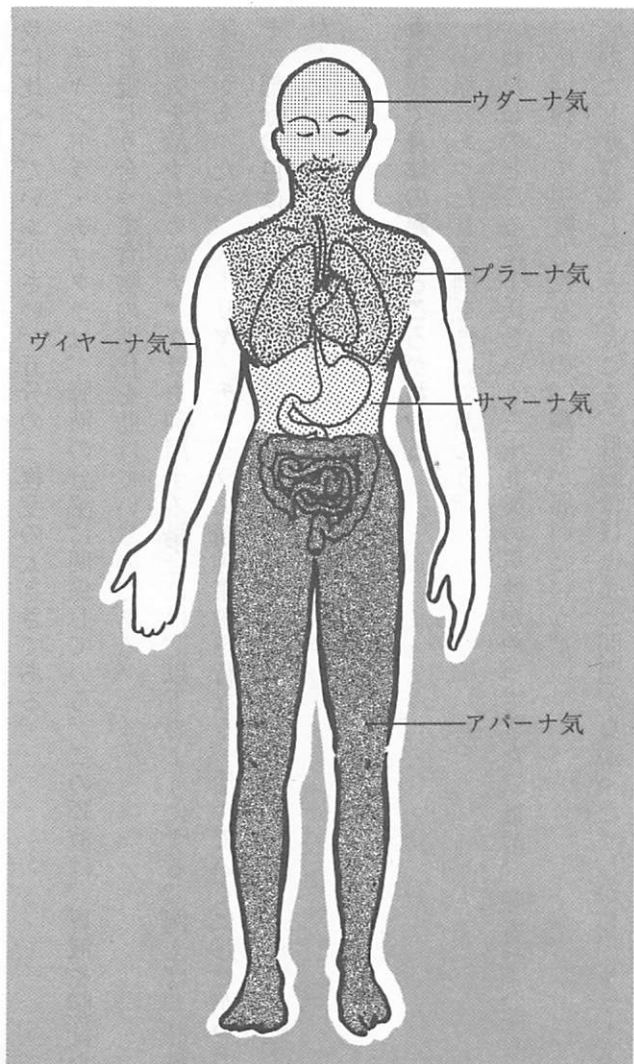
このチャクラは、肝臓に位置している。形は小さな太陽のようで燃えるようなオレンジ色をしている。そして、サマーナ氣の力を借りて食物の消化作用を助けているので、靈視すれば、消化作用を直接見ることができる。

● チャンドラ・チャクラ

このチャクラは、さいぞう脾臓とひぞう脾臓の近くに位置している。白い満月のような色と形である。前述のスーリヤ・チャクラも、このチャンドラ・チャクラも、他の七つのチャク



【五種の気】



ラに比べてだいぶ小さい。五分の一程度の大きさである。

チャンドラ・チャクラは、腓液の分泌に関係している。この腓液は、胃液や胆汁などと混じり合って食物の消化を助けているのである。

病気を治すためのチャクラを利用する場合には、以下のようにする。例えば、肝臓障害があったら、スーリヤ・チャクラに精神集中を行なう。治っていくにしたがって、その部分の色は、黒↓赤↓太陽の輝きへと変化していく。太陽の輝きは、初めは暗く、だんだん明るい色に変わっていく。

### ◎透視で身体の悪いところがわかる

実際にあつた具体例を書いておこう。

わたしのところにI氏という三十九歳の男性がやってきた。以前、肝炎で入院し、一応回復して退院したものの、調子が悪いという。

わたしが霊視してみたところ、肝臓はほとんど問題がなかった。しかし、サマーナ

気とチャンドラ・チャクラが正常でないことがわかった。これは消化力が弱まるとともに脾臓、脾臓の機能も低下しているということの意味している。わたしはI氏に聞いた。

「胃がもたれることはありませんか。昼過ぎに眠くなることはありませんか。また、気力が欠乏していると感じることはありませんか。」

I氏は、そのとおりで答えた。I氏が肝炎を起こしたときに、実は、脾臓や脾臓も悪くなっていたのである。それに気づかなかったので、肝炎が治った後も、身体の調子が悪い状態が続いたというわけである。

気やチャクラは、修行が進んで超能力がつけば自分で見えるのだが、I氏の場合は初めてだったので、わたしが代わりに透視した。しかし、病気の方は自分で治すことができるのとわたしは判断したので、I氏にサマーナ気とチャンドラ・チャクラに精神集中する方法を教えた。

I氏はその後、身体の調子が大変良くなったと言っている。

●喉のチャクラで十五キロ以上痩せられる！

ヨーガでは、修行が進むにつれて身体が美しくなるのが当たり前である。スマートになるのも、若返るのも当たり前前である。健康法と同様に、チャクラと気に精神集中をした結果そうなるので、やはり超能力を使ってということになる。この点が、同じヨーガでも他の多くのアーサナのみの方法と異なっている。

わたしのところの会員は、修行が目的できていても、結果的に美しくなってしまう。特に女性はそうである。だから、こんな笑い話のようなことも伝わってくる。

ある男性が、友達にわたしのことを聞いたと行ってやってきた。帰ってから友達にこう言ったという。

「あそこは、美人ばかり集まって……変なところだ。」

世の中、そう美人ばかりそろっているわけがない。彼女たちも最初はそう目立つ方ではなかったということは、賢明な方だったらおわかりだろう。

これから、①美容、②痩身、③若返りに分けて具体的なやり方を述べよう。

### ①美容

五つの気の流れの中で、特にプラーナ気とアパーナ気の働きが大きく影響している。プラーナ気は大気中から、身体を美しくする養分を取り入れて全身に巡らす働きがある。反対にアパーナ気は、全身の毒素の排泄を促すのである。そのため、この二つの気を自由にコントロールできると、美しく変身することができるというわけである。

美容のための精神集中の技法としては、プラーナーヤーマ（調気法）と浄化法があるが、詳しくは後章の「超能力獲得法」で述べることにする。

### ②痩身

ここでは、特に実例を挙げてみよう。

E子さん（三十五歳）、T子さん（二十六歳）、M子さん（三十一歳）は、かなり標準体重をオーバーしていた。ところが、三人ともわたしの指導によって喉のチャクラ（ヴィシュッダ・チャクラ）に精神集中した結果、十五キロ以上の減量に成功したのである。

M子さんは痩せた後も、解脱を目指して修行を続けているが、何を隠そう、先程の美人の話の中に彼女も含まれている。

精神集中の技法は後章で述べる。

### ③若返り

これは、男性でも女性でも心から望んでいることであろう。しかし、他の美容法に比べてこの超能力を習得するのは、大変難しい。目安として一日に三時間修行して三年はかかるであろう。しかし、いったんこの超能力を身につけると、次のような素晴らしいことが自在になるのである。

- 1 死ぬまで十六、七歳の若い容姿を保つことができる。
  - 2 死ぬ時期は、自分で決められる（百歳でも二百歳でも好きなだけ生きられる）。
  - 3 自由に老化することもできる（変装するときくらいしか使い道はないが……）。
- これらの超能力は、サハスラーラ・チャクラ（頭頂）の中にあるピンドウ・ヴィサルガというチャクラが開くと獲得できるものである。そのときからピンドウ・ヴィサ

ルガよりネクターと呼ばれる不死の甘露が滴り落ちるのだ。

わたしがヨーガを始める前は、大変老けて見えた。二十三歳ころには、四十代後半に見られたことさえある。びっくりしたのは、「わたしたちの時代は今とは全然違いましたよね」とある人が、わたしに戦前の話をしたことである。

ところが、今では反対に年齢よりも若く見られるのだ。ヒゲがなければ二十五、六歳に見えるらしい。若返りに関しても、ヨーガ経典の記述が正しかったことが確かめられたわけである。

6 その他の超能力——経典にはここまで書かれている

●書き記された偉大な超能力

経典によると、固体、液体、熱、エネルギー、異次元空間を自由に操れるようになると、虚空から物体を作り出すことができる。この超能力を得るためには、強い精神集中力、堅固な意志、それにリアルにイメージする力が必要だといわれている。ここで「いわれている」としか書けないのも、残念ながら、わたしにはこういうことができなからである。何ととっても、わたしは意志の力がまだまだ弱い。

仏教では、この超能力を持つことができるのは、天界の最上級と二番目の階級の神々であるとされている。つまり、人間界でこの力を得た者は、来世では天界の神として生まれ変わるといふことである。



その他にも、次のような超能力がある。

(1) あらゆる生き物の叫び声の意味がわかる

(2) 死期を知ることができる

「臨終正念」といって、死ぬときにはそれなりの心構えが必要である。死ぬ瞬間の想念が来世の運命を左右するからである。ゆえに、死期を知るとは大きな意味を持つ。

(3) ほしい力が身につく  
必要なときに必要なだけの力を出せるということである。まるで、ほうれん草を食べたポパイのように。

(4) 宇宙・星の配置・星の運行を知ることができる

昔から伝わる神話など読むと、過去においても、宇宙や星についてかなりの知識があったことがわかる。星の運行などのように、現代になってから、やっと科学的に証明されたことさえある。

(5) 体内の組織を知ることができる

医学が未発達であったころは、超能力によってしか体内について知識を得ることができなかったに違いない。いや、現代においても科学的に解明しきれないことも多いし、個人的な健康管理という面からも役立つであろう。

(6)自分の深層心理さえも知ることができる

たいていの人は深層心理がその人の人生に多大な影響を与えていることに気づいていないかもしれない。

例えば、あの社長と知り合いだとか、国会議員と幼なじみだとかいうことを自慢ばかりしている男が皆さんの周囲にいないだろうか。人のことを自分のことのように自慢したり、知り合いだというだけでうぬぼれるのは、自分に自信がないことの裏返しなのである。子供を一流大学へ行かせようとしのぎを削るのも、お金があることを誇示するのも、屈折した深層心理の現われと見ることがができる。屈折した深層心理——これを内に秘めたままにしているはいけない。なぜかという、それが人の判断を誤らせ、人生を間違った方向へと導いてしまう危険が大きいからである。特に自分では、

そのことに気づきにくいのでやっかいである。

しかし、超能力によって自分の心を明確に知ることができれば、第一歩を踏み出すことができる。より幸福に生きていくための手がかりとなるわけである。

(7) 心を他人の体の中へ入り込ませる超能力

これは、アージュニアア・チアクラから自分の魂を抜け出させ、目的としている相手の身体に入る超能力である。入り込んだ相手そのものとして自由に動くことができる。

(8) 水上を歩く

プラーヴィニー（調気法の一つ）というプラーナーヤマに習熟したときに得られる超能力である。水上を、まるで道があるかのように歩けるとしたら便利であろう。

(9) 空中を歩く

前項の水上を歩くことのできる超能力とともに、空中浮揚の延長上にある超能力である。

(10) 身体から火炎を発する

この超能力を使いこなした人物としては、弘法大師空海が有名である。彼は、自分の身体から火炎を発して護摩法（ヌルデの木や机などを燃やし、仏に祈る儀式）を行なったと伝えられている。

(11) 万物を自分の意のままに従わせる超能力

人間でも動物でも、意のままに操れるということ、人によっては喉から手が出るほど欲しいと思う超能力であろう。

(12) 世界を創造し、支配する力

これは、自分の周りの小世界から地球的規模の世界まで、思いどおりにつくり上げ、動かすことのできる力である。

今まで数多くの超能力について説明してきた。これらの超能力を自在に使える人間は、もはや神と呼んだ方がよいのかもしれない。修行によって靈性を高め進化させた結果、こうした力を得るのであるから、それも当然であろう。

◆  
**第三章 〈火と水の洗礼〉を受けよ!**

——  
超能力者になる第一段階



1 〈火と水の洗礼〉なしに超能力は得られない

●「三つの気道」が通ると超能力者になる

超能力を実際に使えるようになるまでに、二つの段階がある。最初を第一段階、次を第二段階と呼ぶことにしよう。

第一段階は、超能力者となるための素質をつくっていく時期である。そして第二段階が、一つ一つ好きな超能力を身につけていく時期である。第二段階では、自分の好きな超能力を身につけるといふ選択の余地があるが、第一段階は、超能力者を目指す者全員が通らなければならない。

そして、第一段階が〈火と水の洗礼〉そのものなのである。〈火と水の洗礼〉を受けて超能力者の素質を得るといふわけだ。それでは、〈火と水の洗礼〉とは何か、ど

うしてそれが必要かについて説明することにしよう。

人間の霊体（エーテル体）の中には、エネルギーが流れる七万二千本の管がある。そのエネルギーによって霊体が動いているのである。その中に今回関係のある『ピンガラ氣道』、『イダー氣道』、『スシユムナー氣道』の三本も含まれている。

ピンガラ氣道は「火」や「陽」を象徴し、イダー氣道は「水」「寒」「甘露」を象徴している。まず「火と水の洗札」を受けて、人体の右側に位置するピンガラ氣道が通る。次に左側にあるイダー氣道が「火と水の洗札」を受けて通るのだ（今述べたのは、男性の場合で、女性は左右が反対になっている。ただし、例外もある）。

さて、ピンガラ氣道とイダー氣道が通るようになった後に、尾てい骨から背骨に沿って真っ赤なエネルギーが上昇してゆき、頭頂にあるサハスラーラ・チャクラに入る。それから会陰から、そのサハスラーラ・チャクラへ向かってスシユムナー氣道が通り、その中をクンダリニーが上がっていく。このクンダリニーが、四つのチャクラを貫いたときに、靈的覚醒が終了するのである。

この靈的覺醒とは、すなわち第一段階終了を意味するもので、ここまで来ると好きな超能力を身につけていくことのできる身体ができ上がっているということになる。もちろん、これからは〈実践編〉で述べる修行とともに進行していく。

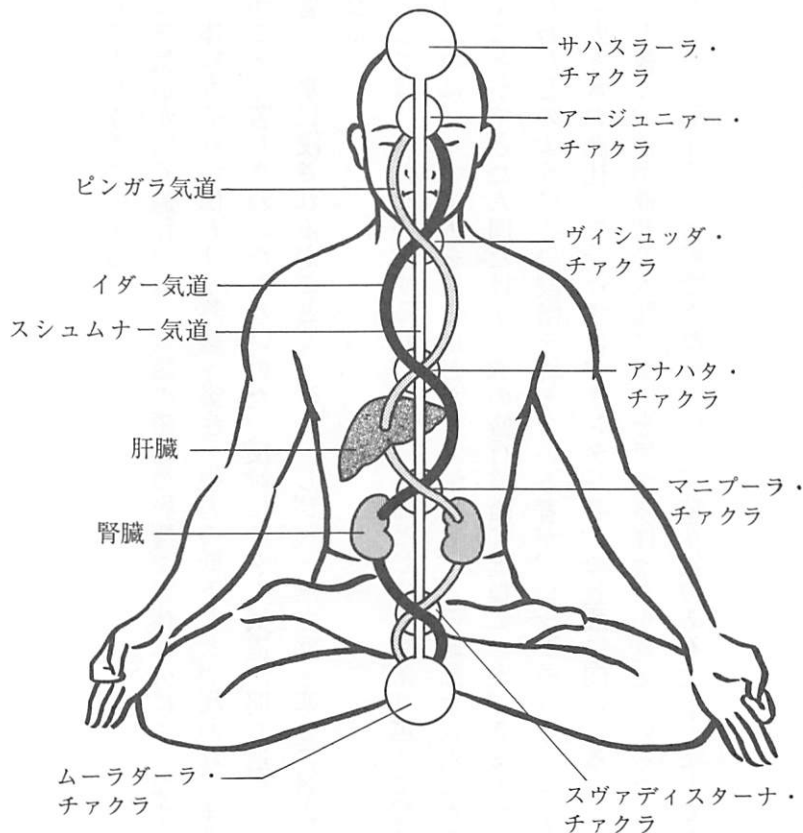
### ●火に焼かれ水につけられる試練

ところで、洗礼という言葉はキリスト教で信者となるときの儀式を表わす。それから転じて、人間的成長のために必要な経験や試練にもたとえられる。〈火と水の洗礼〉はまさに後者であるのだが、疑問に思う人もいるだろう。修行に励めば、必ず心身が良い方へと向かうはずだ。そうでなかったら、修行する意味がないではないか。それなのに靈体が試練を受けるとはどういうことかと。

しかし、どう考えても、この過程は試練を受けているとしかいいようがない。この段階を越えるために必要な修行方法は、後で記すことにするが、ここでいう試練とは肉体的なものである。靈体で受けている試練の影響で、肉体にも変化が現われ、それ



### 【気道図】



ピンガラ＝スーリヤ：熱、太陽、男  
イダー＝チャンドラ：寒、月、女

に苦しむことになるのである。

ピンガラ氣道が開く過程では、太陽の磁場の影響で靈体は火にさいなまれる。そのため、肉体にもそれが伝わり、熱病・炎症・視力の低下などが現われ、まさに火に焼かれるがごとく苦しまねばならないのだ。反対にイダー氣道が開く過程では、月の磁場の影響で、水に浸されるがごとく、冷え・しびれ・無力感・寒さに耐えなければならなくなる。

この苦しさは、修行を中止するか、あるいは何と少しでも乗り越えて靈的進化を遂げるかの二つに一つの選択を迫るほどだ。非情にも、この過酷な〈火と水の洗礼〉に耐え抜くことができた人間だけが、次の修行段階に進むことができるのである。

ただしわたしのようにこの段階を終えている者が、シャクティーパーットを施せば、相手は〈火と水の洗礼〉を受けずに、クンダリーニーの覚醒に向かえる。

キリスト教で、神が最初の人間アダムを何から作ったか覚えているだろうか。それは土であった。形作ることができたからには、粘り気のある土——粘土であろう。人

間が土から作られたとしたら、それを焼き上げ強く固くするのが、火の洗礼なのである。そして、熱せられるばかりでは人間は死んでしまうので、水の洗礼が必要となる。事実、指導者なしで勝手に火の洗礼だけ受けてしまうと、命を落とすということが経典に記されている。もし期せずしてこのプロセスに入ってしまったなら、早急にクンダリニーの全プロセスの経験者に指導を仰ぐのが望ましい。

●人間から抜け出すために悪業を焼く

〈火と水の洗礼〉には、他にも意味がある。それは、人間の身体から神（超能力者）の身体になるときに、人間時代の悪業を消滅させておかなければならないということだ。〈火と水の洗礼〉によって、火炎地獄と寒冷地獄を身をもって体験すれば、それまでに積み重ねてきた悪業をなくすことができるのである。

中には「わたしは悪業なんかつくっていない」という人もいるだろう。しかし、悪業の判定基準は非常に厳しく、ゴキブリを殺すことすら悪なのである。だから、たい

ていの人には知らず知らずのうちに悪業を積んでいるのである。

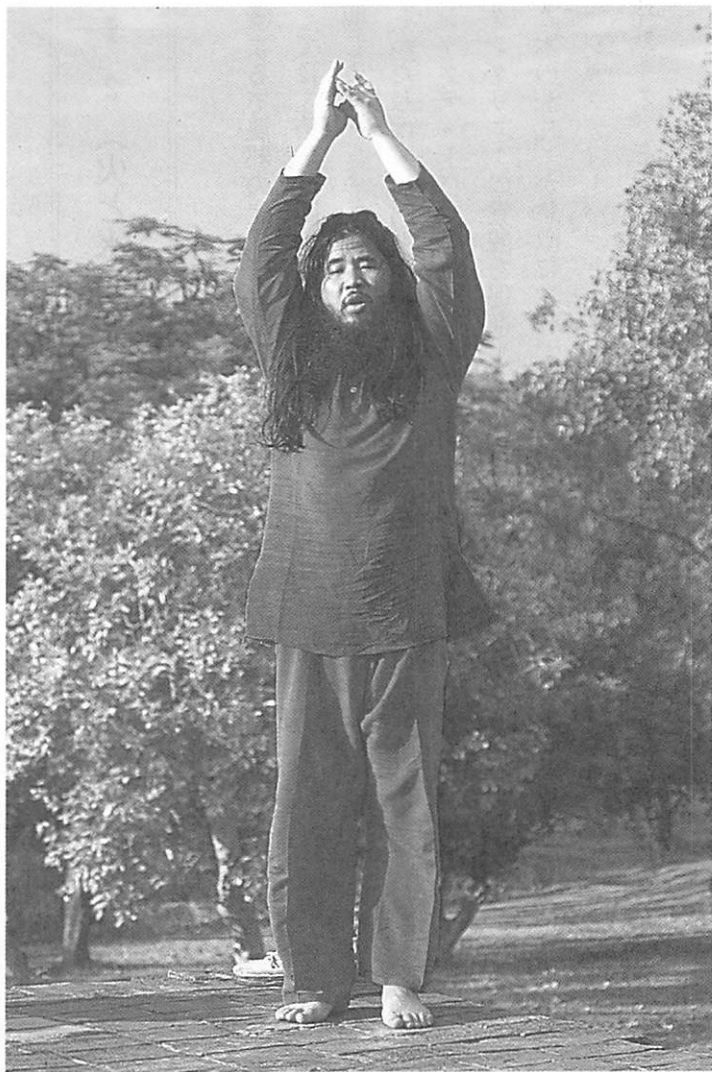
《火と水の洗礼》によって、悪業を消滅させるのは、荒行・苦行に属する。

他に悪業を消滅させる方法としては、ザンゲがある。ザンゲとは、過去の罪過を神仏の前で悔い改めることである。しかし、正しい教えが広まっていない現代では、善悪の基準が正確ではない。そうすると、ザンゲによって悪業の消滅を期待するのは無理であろう。

また、徳を積むというのも一つの方法である。前にも一度書いたが、布施をすることである。その布施とは、物質的な布施、人に安らぎを与える安心施、正しい教えを広める法施があるということも前に書いた。しかし、現代では、そんな精神を持つている人もほとんどいないだろうから、悪業の消滅の段階までは考えられないのではなからうか。

そうすると、やはり《火と水の洗礼》を受けるのが、悪業を消滅させるという観点からも有効であろうと思われるのである。

第Ⅲ章 〈火と水の洗礼〉を受けよ



## 2 〈火と水の洗礼〉の体験例

### ●まるで風邪の症状——三つの実例から

では、第一段階の〈火と水の洗礼〉が、どういう状態になるか、体験例を交えて説明しよう。

わたしは、短期集中修行などの機会があると、参加者にシャクティーパットを施す。シャクティーパットとは、わたしの持っている靈的エネルギーを一人一人に注入して、クンダリニーの覚醒を促進する技法である。シャクティーパットを受けた人は、〈火と水の洗礼〉が急激に進行するので、その状態をはっきりと確認できる。

シャクティーパットを受けた人は、早ければその日から、遅くても二、三日以内に発熱する。そして、節々の痛みやその他の熱性の病特有の症状が現われる。これは、

火の洗礼を受けていることを示している。それが終わってから、一カ月くらい経つと、悪寒や無力感などの寒性の病特有の症状が現われる。このときは、水の洗礼を受けているのである。

いずれも、風邪の症状と大変よく似ているが、意識が鮮明で体力も持続する点が風邪とは違っているので容易に識別できる。

— J・Sさんという三十歳の女性の場合 —

わたしは彼女に眉間のアージュニア・チャクラから霊的エネルギーを注入した。彼女は、「シャクティパットが始まってから、三、四分後に体中に電気が走ったようだった」という。その夜、彼女は熱を出した。それから、熱と寒さが交互に襲ってきたという。彼女の場合は、ピンガラ気道とイダー気道が一気に通じてしまい、〈火と水の洗礼〉も同時に起こったらしい。それが一カ月ほど続いて洗礼は終了した。

彼女は、しばらくの間〈火と水の洗礼〉の苦しさと恐怖から修行できずにいたが、

最近になってまた修行を再開することができた。今では天眼通（透視能力）などの超能力を獲得していつている。

T・T君という三十二歳の男性の場合――

彼は、解脱を目指していたので、週に一、二回修行場に来ていた。一カ月後、彼は突然、火の洗礼を受け始めた。そこでわたしは早く火の洗礼を抜け出す方法を教えた。それは特殊な瞑想である。

男性だったので、尾てい骨の左側とチャンドラ・チャクラ、それとサハスラーラ・チャクラに順次意識を集中させる。この三点は、身体を冷やす働きがあるのである。そのため、彼は三日ほどで抜け出した。

抜け出すと同時に、今度は水の洗礼が始まった。それを抜け出すには、小周天という技法が必要だった。水の洗礼は四日ほどで抜け出すことができた。

その後、クンダリーニーが覚醒し、かなりのスピードで修行が進んでいる。



Y・Y君（二十八歳・プログラマー）の場合――

なかなか〈火と水の洗礼〉を抜け出すことのできなかつた例である。

わたしと同じように修行狂のY君は、会社に勤めながらも一日三、四時間の修行を続けていた。そのため、わたしのところに来たときには、すでに尾てい骨にあるムーラダーラ・チャクラまで洗礼は終わり、クンダリニーもそこまで上がっていた。

わたしのシャクティーマットによって、一回目は胸のアナハタ・チャクラまで、二回目は喉のヴィッシュヌッダまで、そして三回目でやっと頭頂まで氣道が全開した。彼は、時間がかかった方である。

二回目から微熱が続いていたが、三回目に完全に発熱した。いろいろな技法を使っても、火の洗礼が終了するまでに一カ月以上を費やした。彼に教えた技法とは、前の三点のチャクラに対する精神集中とピバリータ・カラニーという逆転の体位（185ページ参照）である。ピバリータ・カラニーも特殊な方法に少し変えた。

火の洗礼が終わった後、すぐに水の洗礼が始まった。小周天を行ない、十日ほどで

終了することができた。

このように、〈火と水の洗礼〉といっても、期間や状態には、かなり個人差がある。洗礼の時に、特に反応の強く出る場所も、それぞれ違う。第一例のJ・Sさんは、お酒もタバコも好きだったので、肝臓・脾臓と肺の部分がキリキリと痛んだという。第二例のT・T君はヘビースモーカーだったので、背中の肺の位置が痛んだ。第三例のY君は、酒の害を身体に持っていたらしく、肝臓が痛かったという。

仏教では、修行に入ってから七回生まれ変わって解脱するといわれている。それを裏づけるかのように、生まれたときにはすでに〈火と水の洗礼〉を終えている人間もいる。わたしもそのひとりである。しかし、これはあくまで特殊な例と考えてよいと思う。

第三章 〈火と水の洗礼〉を受けよ



### 3 真つ赤なエネルギーが背骨を吹き上がる——クンダリーニー覚醒の順序

#### ●スシユムナー気道を貫く

〈火と水の洗礼〉を終えると、身体は強健になっている。風邪をひいても、ひどくなる前に治ってしまう。こうなると、次はクンダリーニーの覚醒が待っている。

まず、尾てい骨のムーラダーラ・チャクラから背骨に沿って真つ赤なエネルギーが上昇してゆき、頭頂のサハスラーラ・チャクラへ入る。それから会陰からサハスラーラ・チャクラへ向かってスシユムナーという気道を通じ、その中をクンダリーニーが上がっていく。そしてこのクンダリーニーがスヴァディスターナ・チャクラ（性器）、マニプーラ・チャクラ（へそ）、アナハタ・チャクラ（胸）、ヴィシュッダ・チャクラ（喉）を貫き、霊的覚醒が起こるのである。

●異次元のエネルギーを受ける——魔境の出現

クンダリニーがチャクラを貫いていくとき、人は魔境に入りやすい。それは、異次元のエネルギーを受け始めるので、精神のコントロールが効かなくなってしまうからである。

この時期は、キリストやサキャ神賢（仏陀釈迦牟尼）も経験したように、破滅天（悪魔）の誘惑にたとえられるが、修行者はいろいろな欲望に負けやすい状態になっている。その上、外的条件も悪い方にそろってしまう。

わたしも、第Ⅰ章で書いたように、挫折して何もかも失ってしまった。それから立ち直るまで実に四年の年月を費やしてしまっている。本当に魔境を抜け出すのは大変なことだった。わたしは抜け出すことができたからよいが、修行者の中には修行そのものを放棄してしまう人も多いに違いない。

ところが、キリストやサキャ神賢は破滅天の誘惑に負けることなく、短期間にやり過ごしている。クンダリニーが覚醒した人は、自己満足やおごりを捨て、自覚を持つ

ように注意することである。そして、昔の聖者のように破滅天に打ち勝てば、恐ろしい魔境に入らなくてすむのだ。

ここで、魔境に入っただけの挫折が何を意味するか、もう少し詳しく触れておこう。挫折とは単に修行の挫折だけではなく人生の挫折を意味している。それも普通の人の挫折と違い、これ以上ないような挫折なのである。そうなってしまったら、不運な一生を過ごすしかなくなってしまう。いや、一生などという甘いものではない。生まれ変わっても続いてしまう恐ろしい修行の挫折なのである。これでは、最初から修行などしない方がよっぽどましということになる。

しかし、いちろの望みがないわけではない。すべてを失っても、あがきながらでも努力をすることである。どんなにみじめな状態になっても、捨て鉢にならずにひたすら努力を続けることだ。

わたしは、そうすることによってやっと恐ろしい修行の挫折からはい上がった。

●覚醒するとき頭にコブができる

ある男性は、知らず知らずのうちに魔境に入り、さんざんな目に遇ったという。その一カ月ほど前にクンダリニーの覚醒があった。これがどうして確認できるのかというと、突然クモ膜下出血で倒れて病院へ運ばれたのである。これはクンダリニーが少し左へずれて覚醒したものと考えられる。当然のことのように、病院では原因がわからないままに手術をした。そして頭頂が陥没していることに気づいたという。クンダリニーが一気に上がって頭蓋骨を骨折させたのだろう。普通これがうまくいくと、骨折せずに盛り上がって肉げいとなるのだが、彼の場合はあまりにも急に上がってしまったらしい。

その後、破滅天のささやきが聞こえてきた。

「多額の生命保険に入って自殺しろ。そうすれば、妻も子も幸せになれる。」折しも、クンダリニー覚醒直後で精神状態はおかしい。すっかりその気になってしまい、一億円の生命保険に入った。

「飛び込め、飛び込め！ 死んだ方が楽だ。飛び込めば死ぬる。飛び込め！」  
耳元でささやく声に、ハンドルも切らずブレーキもかけずに自動車ごとダムに飛び込  
んだのは、保険加入後一カ月経ってからのことである。

幸いにも、浅い所に車が落ちたので、彼はシートベルトを外して車外へ出た。その  
瞬間から、夢から覚めたかのように魔境から抜け出すことができた。以上の話はその  
後集中修行に参加するようになった彼から直接聞いた話である。

彼は、わたしのところへ来る前に瞑想によって自力でクンダリーナの覚醒にまでこ  
ぎつけたのであるが、最初からわたしの指導を受けていたら、こういうこともなく、  
スムーズに進んだことと思う。

一時はわたしの弟子となっていた女性で、とうとう魔境から抜け出すことのできな  
かった人がいる。そのころのわたしはまだ力が弱かったので、彼女を救い出すこと  
ができなかった。

彼女はN子さんという。ある宗教団体に入っていたが、デタラメな宗教団体であっ



たので、クンダリニーが覚醒した後、精神分裂気味になったまま放置されてしまった。現に、精神病院に通院したこともある。

夫がわたしの道場に通うことを反対したため離婚してしまった。しかし、修行に打ち込むわけでもなく、言うことは支離滅裂であり、行動はちぐはぐであった。他の会員とトラブルを起こすし、わたしにも嘘をついた。その他いろいろ不始末をしかした末に、離れていってしまった。あの状態では一生魔境から抜け出るのは無理であろう。わたしにとっても不本意であった。

◎高度の精神集中ができるようになる

クンダリニーが覚醒してから解脱までの状態を精神面およびエネルギーの展開から見てみよう。

修行を始めてしばらく経つと、クンダリニーの覚醒前でもヘソ下数センチの所（丹田）にエネルギーがたまって熱くなる。それをクンダリニー覚醒後は自由にコントロー

ルことができるようになってくる。意識を集中させることによって、エネルギーを動かせるようになるのだ。例えば、指先に意識を集中すると指先が熱くなるし、足先に意識を集中させると足先が熱くなるのである。これは、高度な精神集中がいつている証拠である。高度な精神集中は、これからの超能力獲得に欠くべからざるものである。

このようにエネルギーをコントロールできるようになるまでは比較的容易である。しかし、その後の道のりははっきりいって長い。誘惑がスキをうかがっている時期もある。

この一つ先の段階では、密教では「風の制御」、仙道では「胎息」、ヨーガでは「サヒタクンバカ」ができるようになる。言葉は違うが、いずれも「自由に呼吸を止めおける状態」なのである。わたしが霊視してみたところでは、皮膚呼吸が増大している。無呼吸によって減少する酸素を皮膚呼吸が補っているのだろう。

●身体を痛める危険性

この時期は、最も危険な時期だともいえる。身体を痛めつける恐れが絶えずつきまとうからだ。それは、大脳、ホルモン系、神経系、呼吸器系、循環器系と、重要な器官が進化し出して過敏になっているためである。この進化は、異次元のヴァイブレーションを受ける準備として必要である。

わたしは、身体を痛める危険を十分承知していたつもりであったが、やはり気がせて先を急ぎすぎてしまった。その結果、身体を痛めてだいぶ苦労したものである。特に視力と内臓を痛めた。わたしの経験からいうと、この時点では指導者がいた方が安全でよいかもしれない。

同時に精神的な変化も出てくる。一番大きな変化は、表層意識が消滅し始め、潜在意識が浮き上がるようにして顕現してくることである。そのために、表層意識の葛藤がなくなるので、感情表現がストレートになる。また心がどんどん落ち着いていき、寂靜の状態になる。このころ体内でシンシンという鈴に似た音を聴くこともある。

この状態は百五十〜二百日間くらい続くだろう。この期間にエーテル体（身体を包んでいる管）が浄化されるようである。

●クンダリニーの覚醒は二回ある

その後、本格的なクンダリニーの覚醒が一気に始まる。〈火と水の洗礼〉後に起こるクンダリニーの覚醒と違う点は、この覚醒が高次元のチャクラの活性化を誘発するという点である。つまり、わたしたちが普通に生活しているのは三次元の世界であり、最初のクンダリニーの覚醒で活性化するのは四次元のチャクラ、そして今回活性化するのは、それ以上の次元のチャクラというわけだ。このチャクラの活性化によって、あらゆる超能力を身につける確約ができたようなものである。

二回目のクンダリニーは、大きく強いエネルギーを持つっているので、各チャクラを貫くときは爆発音とともに、白銀色の閃光がきらめく。そして、背骨を揺さぶる。この背骨は、縦揺れ↓横揺れ↓回転へと揺れ方が変わっていく。

また、丹田に快感が走る。これは性交時よりも強い快感である。それとともに心地良いゾクツとした感覚が尾てい骨から頭頂に向かって、次第に広がっていく。

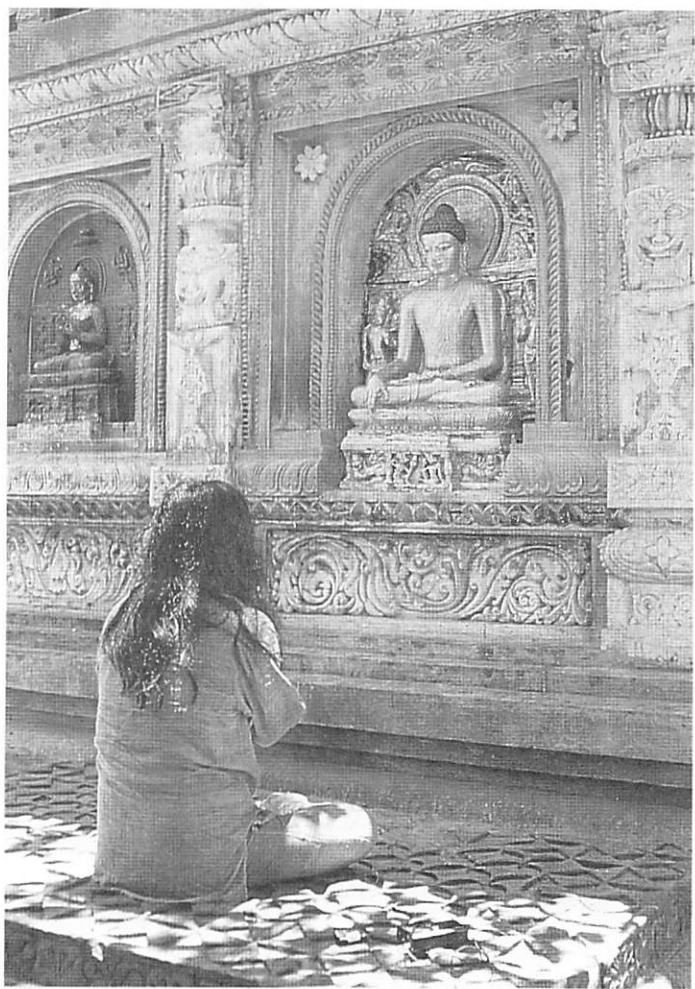
精神的な変化では、自分一人が異次元に放り出されたような恐怖感にさいなまれる。また、愛着していたものから離れなければならないような悲しみも覚える。こういう状態が一カ月半くらい続くが、そのころに空中浮揚をするようになる。そればかりでなく、強力な超能力を相次いで獲得するのも、そのころである。

ここまで来ると解脱が近い。超能力だけでなく、解脱を目指している人に、次のことを示しておこう。解脱のキーポイントは、「離欲」ただそれだけである。離欲してないと、これまでに身につけた素晴らしい超能力さえも、解脱のじゃまとなる。だから、超能力に対して喜びや執着を持たないことが肝心である。この離欲の状態になったとき、必ずやあなたは解脱するであろう。

これまでクンダリニーの覚醒から解脱までの数々の変化を簡単に述べてきたが、自分の修行の進度を知る目安としてほしい。そして、それ以上に詳しいことは、身をもつ

て体験していくしかないであろう。それでは次に第一段階のクンダリニー覚醒までのカリキュラムを公開しよう。前述したように、超能力者の素質をつくるへ火と水の洗礼がある。したがって、超能力者を目指す人は必ずこの段階を修めなければならぬ。これが終わって初めて超能力別のカリキュラムに進むことができる。決して挫折することなく、頑張ってほしい。

第Ⅲ章 〈火と水の洗礼〉を受けよ



## ● 「実践編」 〈火と水の洗礼〉 のプログラム

### ● 超能力者となるための最低条件

これから、〈火と水の洗礼〉を受ける修行法を紹介しよう。これは、アーサナ、基本呼吸法、スクハ・プールヴァカ調気法、マントラと瞑想から成り立っているが、毎日ひと通りの修行を続けることが、超能力者の素質を得るための最低条件である。

### ● 修行のカリキュラム

初期の段階では、アーサナは全部やって約四十五分かかると思われる。基本呼吸法とスクハ・プールヴァカ調気法で三十分。マントラと瞑想は四種の中から最初の「ムーラダーラ・チャクラ開発のための技法」を行なうので二十分必要である。したがって



初期では毎日一時間半の修行が必要である。

マントラと瞑想は、修行が進むにしたがって残りの三種も順次加えていく。もし、修行に時間の取れない日があったら、このマントラと瞑想修行だけでも行なうようにする。時間が短くなっても構わないが、毎日欠かさず続けなければならぬ。

わたしが書き記した順ですべて進めていただきたい。

わたしの修行場でも初心者には、これと同様の修行を行なっている。半年ほど続けると超能力を別にしても、肉体的、精神的に大変強くなってくる。例えば風邪をひきやすい体質が治ったり、持病が治ったりということである。今まで、ちよつとのことです。イライラしたり、上司に何か言われたりすると落ち込んでしまっていた人でも、精神的に安定するので、何事も気にしないようになり、生きたいように生きることができるようになってくる。

超能力を持つためには、超能力を使うに足るだけの、肉体と精神がどうしても必要である。だから、ここで述べてきた修行法は、強い肉体と精神をつくり上げることが

主眼に置いている。

当然、この途中で〈火と水の洗礼〉を受けることになる。〈火と水の洗礼〉は、先に述べた体験例のように個人差があることをご承知おきいただきたい。ただ、目安として、発熱などの熱性症状と悪寒などの寒性の症状が出て、なおかつ意識が鮮明で体力があつたら、それが〈火と水の洗礼〉であると思つてよい。あとは、そのまま修行を続行し、クンダリニーの覚醒を待つばかりである。

クンダリニーの覚醒が始まると、次のような変化が現われるので覚えておいてほしい。

まず、尾てい骨にあるムーラダーラ・チャクラから背骨を伝わって頭頂に向かって赤い光が上昇してゆき、同時に会陰からスシュムナー氣道が通り、クンダリニーが大きく回転しながら上がっていく。

赤い光が上昇する前には、背骨を中心として、もぞもぞとするのを感じたり、痛みを感じたりするだろう。

その後、赤い光が上昇していくときには熱が上昇しているように感じるだろう。しかし、霊眼がまだ発達していないので、赤い光を見ることはできないと思う。

それから、クンダリニーの覚醒が起こるはずであるが、クンダリニーは霊眼では黄色色に見える。しかし、霊眼が発達していない人には、ただ快感が走ることしか確認できないであろう。

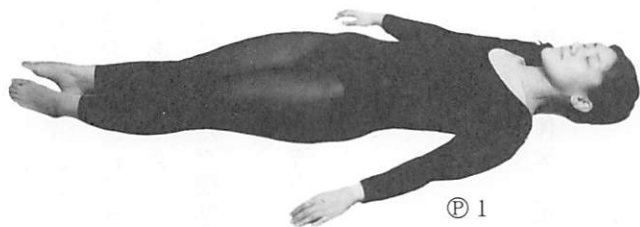
これらのことが、あなたの身に起こったならば、第一段階の修行は終了である。あなたはすでに、強い肉体と精神、そして数々の超能力を身につけていくことができるだけの霊的素質を獲得したということになる。

●アーサナ

これは普通の体操と違い、呼吸法、精神集中、保持（体を一定の形にとめる）が含まれている体位法である。

## ☆ガス抜きの体位

- ① 身体を真つすぐにして、あお向けになる。ⓐ 1
- ② 左脚は力を抜いて自然に伸ばしたままで、右脚を折って、組み合わせた手で押さえる。ⓐ 2
- ③ 息をいっぱい吸い、ゆっくりと吐きながら、腕で右脚を引き寄せ、それとも上半身を持ち上げてゆき、あごをひざに付ける。そのまま普通に呼吸をして二十〜三十秒間保つ。ⓐ 3
- ④ 息を吸いながら、脚と上半身を元の状態に戻してゆき、②の姿勢に戻る。



⑤②③④までを三回繰り返して①の姿勢に戻り、次に反対の脚で同様に三回繰り返す。

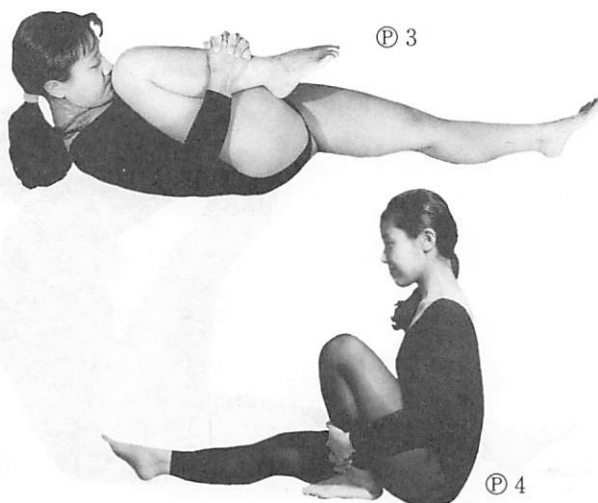
⑥⑤までが終わったら両脚で同様に三回行ない、①の姿勢に戻って終了する。

※注意……曲げた脚が外側を向いてしまふ人が多いので、必ず身体の真上にくるように気をつける。

### ☆鷲の体位

①両脚を前に伸ばして座る。

②背筋を伸ばしたまま、左ひざを立てて両手で足首を持ってかかとを脚の付け根に付ける。③④



③左足の裏を少し上げて、組んだ両手で左足の裏を持つ。

④ゆっくりと息を吸いながら、ひざを伸ばしてゆき脚を持ち上げる。脚が伸び切ったら息を止め、左脚の親指を見つめ五秒間保つ。P 5

⑤ゆっくりと息を吐きながら、左脚をいっそう上げて額を付ける。息を止め五秒間保つ。P 6

⑥ゆっくりと息を吸いながら、左脚を額から離して④の姿勢へと戻る。

⑦ゆっくりと息を吐きながら、左ひざを曲げて③②①と逆に戻っていく。①に戻つ



たら反対の脚で同じことを行なう。

※注意……常に背筋は真っすぐに伸ばしておく。額に脚が付かなくても、背中を丸めて付くようにしては意味がない。付かなくても練習を重ねて完成に近づけてゆくことが大切である。

☆頭をひざに付ける体位

①両脚を前に伸ばして座る。

②左脚を曲げて、かかとを会陰部に付ける。曲げた左脚は床に付けておく。⑦

③両腕を伸ばし、右手の人差し指と親指で右足の親指をつかむ。次に左手の同じ指で重ねるようにつかむ。右ひざが曲が



⑦ 6

らないように注意する。⑧

④③の状態を下腹を引き締めて息を吐き、次に緩めて息を吸う。

⑤ゆっくり息を吸いながら、腰を引きつけ、あごを上げて背中を反らせる。十分に息を吸ったら、五秒間そのまま保持する。⑨

⑥ゆっくりと息を吐きながら、あご、背中、腰を緩めるように前に倒していき、額を右足のひざに付ける。このとき、両ひざの外側をはさんだ両ひじは床に付け、背中丸くなっている。⑩

⑦なおも息を吐きながら上半身を前に倒





していき、両手で右足の親指を引き寄せ、額をひざから足首の方へと滑らせていく。それとともに胸、腹は右脚に付き、背中  
は伸びる。上半身がびったりと右脚に付  
いたところで吐く息を止め、その姿勢を  
十秒保つ。

⑧ ゆっくりと息を吸いながら、頭をひざ  
まで戻していき、上半身を起こして③の  
姿勢に戻る。両手を右足の親指からゆっ  
くり離して元に戻る。

⑨ 少し休んだ後、反対の脚で同様に行な  
う。

※注意……全部を通して、伸ばした方



⑩

の脚はひざが曲がらないようにする。もし、脚の親指がつかめなかつたら、ひざでも足首でも、つかめるところから始めて徐々に親指にまでもっていくようにすること。

☆背中を伸ばして前屈する体位

- ①両脚を前に伸ばして座る。
- ②左脚を曲げて、足の甲を右の太ももの上に深く乗せる。㊦ 11
- ③左手を背中側から回して左脚の親指をつかむ。
- ④右手は人差し指と親指で右足の親指をつかむ。このとき、左ひざが床から離れ



- ないように注意し、両肩と右足の親指で二等辺三角形を描くようにする。特に肩が床に傾かないように注意する。⑭
- ⑤ ゆっくりと息を吸いながら、背筋を伸ばして五秒保つ。
- ⑥ ゆっくりと息を吐きながら、上半身を倒してゆき、顔、胸、腹の順に右脚を付け、十秒間そのまま保持する。⑮
- ⑦ 息を吸いながら、ゆっくりと上半身を起こしてゆき、右手を離す。次に左手を離し、左脚をゆっくり前に伸ばす。①の姿勢に戻って少し休み、反対の脚に変えて同様のことを行なう。



※注意……「頭をひざに付ける体位」と違い、背筋は常に伸ばすように心がける。

### ☆ワニの体位（両脚）

- ①あお向けになる。
- ②足先をそろえて脚を伸ばしたまま、ゆっくり息を吸いながら静かに両脚を上げていく。脚は床と垂直になる。ⓐ14
- ③息を吐きながら、脚を右手の指先に向かって倒していき、床に付ける。それとともに顔は反対方向へ向けていき、左手の指先を見る。その姿勢を三秒間保つ。

ⓐ15



④ ゆっくりと息を吸いながら②の姿勢へ戻る。

⑤ 両脚を上げたまま、今度は左へ倒していきながら、同様のことを行なう。

⑥ 息を吐きながら、垂直に脚を伸ばしたまま下ろし、①の姿勢に戻る。

※注意……背筋はできるだけ両手に垂直にしたまま保持する。

☆ワニの体位（片脚）

① あお向けになる。

② ゆっくりと息を吸いながら、左脚を伸ばしたまま上げていき、床と垂直にする。

⑰  
16



③息を吐きながら、脚を右へ真横になるように倒していき、床に付ける。それとともに顔は左を向く。左手の指先を見て、三秒間その姿勢を保つ。Ⓟ 17

④ゆっくり息を吸いながら、脚を垂直に戻す。同時に顔を戻す。次に息を吐きながら①の姿勢に戻す。

⑤少し休んだら、反対の脚で同様のことを行なう。

### ☆背骨をねじる体位

①両脚を伸ばして座る。

②左ひざを曲げて床に付けたまま、かかとを尻の右側に付ける。Ⓟ 18



③右ひざを曲げて、右足を両手を使って左の太ももの横に置く。立てた右脚はできるだけだけ自分の方へ引き寄せておく。Ⓟ  
19

④右手は尻の右側の床に置く。次に左脇の下を右脚の太ももに付けて腕を伸ばして右脚の土踏まずをつかむ。それができたら、右手を床から離して右の脇腹に手のひらを当てる。Ⓟ 20

⑤息をゆっくり吐きながら、顔を初め上半身を右の方へねじっていく。このとき、あごは引き、背筋を伸ばす。十分ねじれて息を出しきったら、その姿勢を十秒間



Ⓟ18

Ⓟ19

保つ。

⑥ ゆっくりりと息を吸いながら、上半身を元に戻してゆき、④の姿勢に戻る。次に左手を右足の土踏まずから離して正面を向く。最後は①の姿勢に戻る。

⑦ 少し休んだら、今度は反対側で同様のことを行なう。

#### ☆バツタの体位（片脚）

① うつぶせになる。腕は身体の横に伸ばしておき、手のひらを床に付ける。

② あごを精いっぱい前へ出す。

③ ゆっくりりと息を入れながら、右脚を伸ばしたままゆっくりと上げていく。この





とき、骨盤が床から離れないように気をつける。

④十分に右脚を上げたら、ひざや足先を意識的に伸ばし、息を止めて十秒間この姿勢を保つ。⑰21

⑤ゆっくりと息を吐きながら、右脚をゆつくりと静かに下ろしてゆき、脚が床に付いたら全身をゆつたりとさせる。

⑥顔を横に向けて床に付け、少し休んだら左脚で同様のことを行なう。

☆バツタの体位（両脚）

①うつぶせになる。額を床に付け両腕はこぶしを握って床に置く。



② ゆっくり息を吸いながら、両脚はそらえて伸ばしたまま上へ上げていく。

③ 十分に上がったたら、息を止めて十秒間この姿勢を保つ。②22

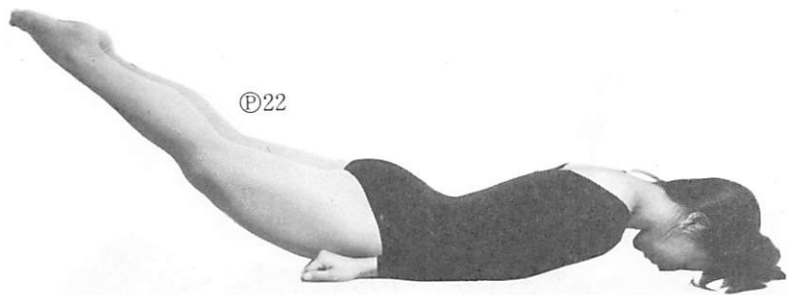
④ ゆっくりと息を吐きながら、上げていた両脚を静かにゆっくりと下ろしていく。脚が床に付いたら全身をゆったりとさせ、力を抜く。

⑤ 少し休んでから同じことを繰り返し、全部で三回行なう。

### ☆バツタの体位（全身）

① うつぶせになる。両脚は前方へ真っすぐに伸ばし床に付ける。

②22



② ゆっくりと息を吸いながら、両腕、そろえた両脚を一緒に上げていく。

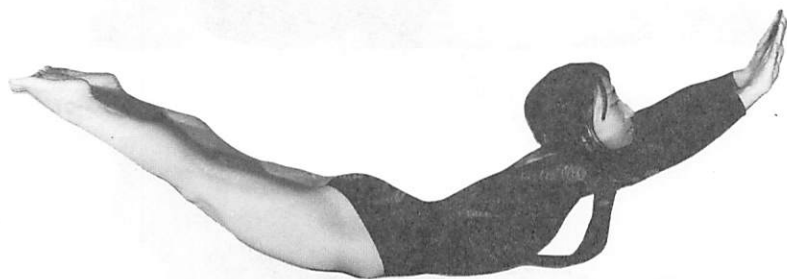
③ 全身を腹で支えるような状態まで両腕、両脚を上げて身体を反らせたら、普通の呼吸をして二十秒間その姿勢を保つ。Ⓔ

23

④ ゆっくりと息を吐きながら、両腕、両脚を同時に、ゆっくりと静かに下ろしていく。

⑤ 両腕、両脚が床に付いたら、全身をゆったりとさせ、力を抜く。

⑥ 少し休んだら同じことを繰り返し、全部で三回行なう。



Ⓔ23

## ☆コブラの体位

① うつぶせになる。額は床に付け、腕を曲げて手のひらが胸の横の床に付くようにする。ひじは立てて腕を脇に付ける。

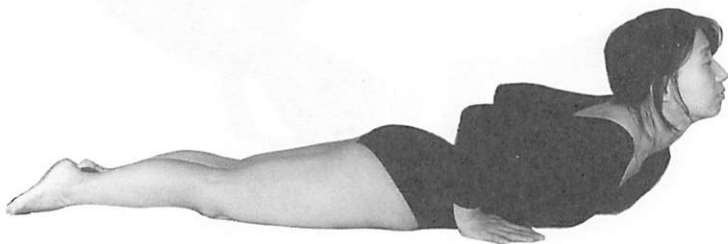
②

② ゆっくりと息を吸いながら、額、鼻、あごの順に床にこするようにして頭を持ち上げていき、胸が床に付いている程度に背中を反らす。③

③ 次に両手で上半身を支えるようにして、さらに強く反らせる（腹が床から離れない程度）。



②24



③25

④両腕を伸ばし、恥骨が床に付くほどに身体を反らせる。

⑤最後に思いきり反らせ、②から吸い続けていた息を止め、肛門を引き締め、五秒間その姿勢を保つ。Ⓟ26

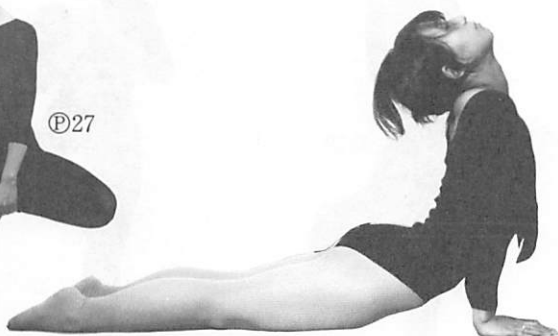
⑥ゆっくりと息を吐きながら、今までと逆の順序で元に戻っていく。

#### ☆木の体位

①爪先とかかとをそろえて直立する。

②足先を下に向けて左ひざを曲げ、かかとを右脚の付け根に付ける。このとき、左手で左足首を持って行なう。Ⓟ27

③左手を足首から離して、両手のひらを



胸の前で合わせ、二十秒間同じ姿勢を保持する。⑰28

④ ゆっくりと息を吸いながら、手のひらを合わせたまま上へ真っすぐに伸ばす。手が伸び切ったら、普通呼吸をして二十秒、この姿勢を保持する。⑰29

⑤ ゆっくりと息を吐きながら、合わせた手を胸の前にまで下ろしてくる。次に手のひらを離して左脚を下ろし、①の姿勢に戻る。

⑥ 少し休んだら反対の脚で同様のことを行なう。

※注意……もし、バランスが取れず倒



れそうになっても、ドンッと足を床に付けないで静かに下ろすように努めること。

☆三角の体位

- ① かかとと爪先をそろえて直立する。
- ② 両脚を三十五〜四十度に開く。両腕はそのまま垂らしておく。
- ③ ゆっくりと息を吸いながら、手のひらを下に向けて両腕を肩と水平になるまで上げていく。腕は真つすぐに伸ばしたままである。Ⓟ 30
- ④ 両腕が肩と水平になったら、左手のひらを上向きにして、手のひらを見る。
- ⑤ 息をゆっくり吐きながら、両腕を真つ



Ⓟ 30

すぐにしたまま、右真横に上半身を倒していき。右手のひらは右脚に沿って下ろし、両腕が床に垂直になったら目を左手から外し、上を見る。㊦ 31

㊦ 左腕は真上を越えて右側へ倒してゆき、耳に付けて床と平行にする。㊦ 32

㊦ 普通呼吸をして、この姿勢を三十秒保持する。

㊦ ゆっくりと息を吸いながら、今までと逆の順序で㊦の姿勢に戻る。少し休んでから反対側で同様のことを行なう。

※注意……㊦の普通呼吸を丁寧に行ない、同時に脇腹の筋肉を緩め、十分に伸





ばすこと。

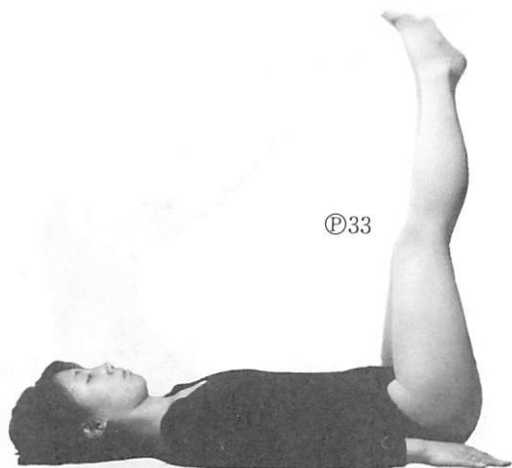
☆逆転の体位（ビバリータ・カラニー）

①あお向けになる。腕を身体の両側に伸ばし、手のひらは床に付ける。

②両脚をそらえたまま、ゆっくり息を吸いながら上げていく。床と直角になったら息を止め、五〜十秒間その姿勢を保つ。足首には力を入れないようにする。Ⓟ 33

③息を吐きながら、上げていくときの二倍くらいの時間をかけて脚を下ろす。

④両脚が床に静かに付いたら、全身を緩める。少し休んでから、もう一度②〜③を行なう。



⑤今度は、床の上の手のひらに力を入れ、息を吐きながら腰を床から上げていく。

⑥次に両手を腰に当てる支え、体が「く」の字になるようにする。P 34

⑦その姿勢を一分間保持し、ゆっくりと息を吐きながら元の姿勢に戻り、そのまま休む。休む時間は、⑥の姿勢を保持した時間と同じか倍までとする。

※注意……⑥の姿勢の保持は、一分間から始めて一日に一分ずつ増やして、一カ月後には三十分になるようにする。もちろん、その後の休む時間もそれに応じて長くする。それから、休むときには、

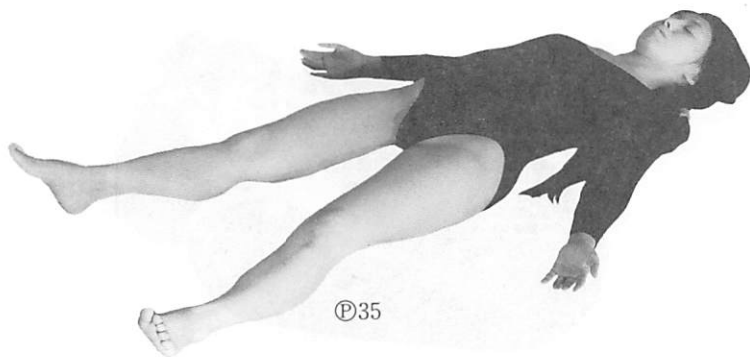


必ず「屍しかばねのポーズ」をとらなければなら  
ない。「屍のポーズ」は後で説明する。

逆転している時間が長くなるにつれ、  
腰の痛みや胃の痛みが出てくると思うが、  
これは生体反応が過敏になっているため  
なので我慢してそのまま続けること。こ  
のアーサナを始める前には、準備運動と  
して、首を左右にゆっくりと三回ずつ回  
しておく。

### ☆屍のポーズ

①あおむけになり、脚は十五度に開く。  
腕は身体から少し離して、手のひらを上  
へ向けて自然に床に置く。目は軽く閉じ



る。②35

② 身体の末端である指先、足先から心臓へと向かってゆったりと弛緩していく状態を意識する。

③ 全身を緩め、リラックスした状態であれば、それそのまま過ごす。

※注意……この「屍のポーズ」はピバリータ・カラニーの後だけでなく、他のアーサナを実習しているときでも疲れたら必ずこのポーズをとって休むようにする。

ヨーガは、ただがむしゃらにやれば効果があるというものではない。緊張と弛



②36

緩も重要なポイントなのである。そのためには、全身を弛緩させる「屍のポーズ」に熟達しなければならぬ。また、「屍のポーズ」を終えて起き上がる時には、その前に手足を曲げて一度力を入れてからにするとよい。⑰36

●呼吸法

☆基本呼吸法（二〇息・一息は一回の出し入れ）

①金剛座（正座）を組み、下腹部を引き締めて、両鼻孔から息を吐き出す。

②下腹を緩めながら息を入れ、次第に胸



⑰37

にまでいっぱいにする。胸にいっぱいになつたら、そのまま保息する。

③息を吸うのと同じ時間をかけて。胸、腹の順に息を吐き出す。

※注意……入息（息を吸う）保息（息を止める）と出息（息を吐く）の割合が絶えず一対一になるようにすること。入息の時間を延ばせるようになったら、それに合わせて出息の時間を延ばす。もし、風邪などで鼻が詰まっている場合は、口を利用してよい。ただし、口を大きく開けないこと。

また、ムーラダーラ・チャクラ（尾て

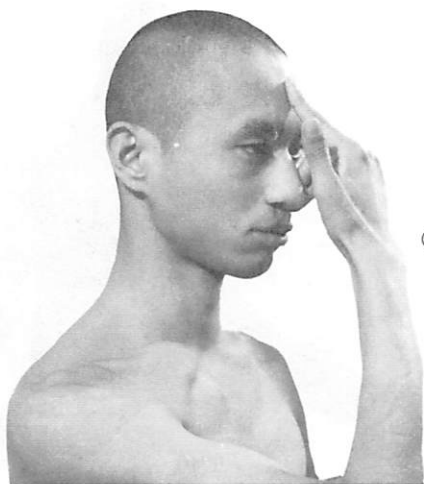


③38

い骨)に精神集中をしながら基本呼吸を行なうこと。

☆スクハ・プールヴァカ調気法(六十息)

- ①金剛座(正座)を組む。
- ②下腹を引き締め、両鼻孔から息を吐き出す。
- ③右手の人差し指を眉間に当て、親指で右の鼻孔を押さえてふさぎ、左の鼻孔から息を入れる。入れた息は腹、胸の順に満たしていく。㊦36
- ④息が胸にまで十分に満たされたら、中指、薬指、小指で鼻孔を押さえてふさぐ。

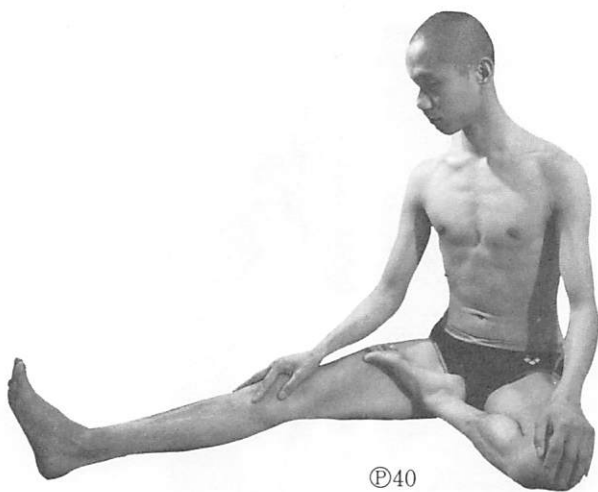


㊦39

⑤右鼻孔を押さえていた親指を離して、右鼻孔から静かに息を出していく。最後には、下腹を引き絞るようにして息を出し切る。

⑥今度は右鼻孔から息を入れ、左から吐き出す。左右三十息ずつ、合計六十息行なう。

※注意……入息、出息の割合が一对一になるようにする。その後慣れてきたら少しずつ出息の時間を延ばしていき、入息、出息の割合が一对二になるようにもっていく。



④40



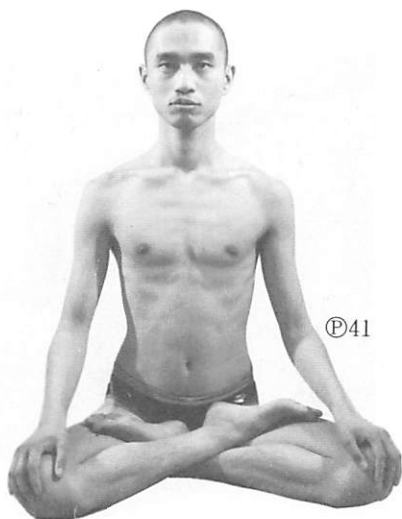
◎瞑想とマントラ

すべてでチャクラは九つあることは前に述べたが、ここはまだ初心者クラスなので、低次のチャクラ四つの開発だけがいい。ではその四つを説明しよう。

☆ムーラダーラ・チャクラ開発のための技法

①蓮華座を組む。蓮華座は次のようにして組む。

- 1 両足をそろえて前に伸ばして床に座る。
- 2 右ひざを曲げて、両手で右脚を左



④41

太ももの付け根に深く乗せる。

(P11参照)

- 3 次は左ひざを曲げて左脚を右の太ももの付け根に深く乗せる。(P41)
- 4 元に戻るときには、反対の順序でゆっくりとやる。

②手印は天地印を結ぶ。(P42)

③マントラ「ストリーム」を唱える(マントラに意味はない。聖なる音である)。ストリームの「ム」は消音で、響くように長く伸ばす。アクセントは「リ」に置く。

④マントラを唱えながら観想をする。天



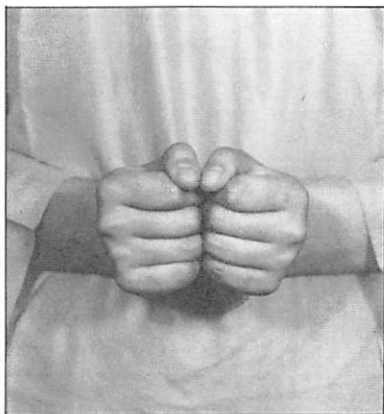
(P42)

地からエネルギーを吸収していることを感じながら、意識を尾てい骨に集中し、逆三角形の中にブラフマン神（日本人の場合、仏像をイメージしてもいい。以下の神も同じである）が鎮座しているという観想である。

⑤ マントラを唱えながらの観想を二十分続ける。

☆ マニプーラ・チャクラ開発のための技法

① 脚は蓮華座を組み、手印は金剛合拳である。ⓐ 43



ⓐ 43

② マントラ「クリーム」を唱える。「ム」は消音、「リ」にアクセントを置く。

③ マントラを唱えながら、観想する。こぶしを強く握り、修行に対する自分の意志が堅固であることを意識し、へその三日月の中にルドラ神が鎮座していることを観想する。

④ マントラを唱えながらの観想を二十分続ける。

☆アナハタ・チアクラ開発のための技法

① 脚は蓮華座を組み、手は開蓮華の手印を結ぶ。④44、④44



④44

② マントラ「アイマー」を唱える。アクセントは「イ」に置き、「イ」と「マ」を伸ばす。

③ マントラを唱えながら観想をする。観想の仕方は次のようにする。両乳頭と正中線を結んだところ、アナハタ・チャクラに六角形があり、サダー・シヴァ神が鎮座していることを観想するのである。

④ マントラを唱えながらの観想を二十分続ける。

☆アージュニア・チャクラ開発のための技法



④44'

①脚は蓮華座を組む。手印は大日印を結ぶ。④45

②マントラ「アウム」を唱える。「ウ」は鼻に響かせる。

③マントラを唱えながら観想をする。その観想は、眉間にある円形にマハー・シヴァ神が鎮座しているイメージである。

④マントラを唱えながらの観想を一時間行なう。



④45

●チアクラ開発のための修身法

チアクラ開発のための〈マントラと瞑想〉の修行をするにあたっては、併せて正しい生き方を実行しなければならぬ。正しい生き方は、「大乘仏教」「小乗仏教」「ラージャ・ヨーガ」が示している。

大乘仏教では、「六波羅蜜」の實踐をする。小乗仏教では、「七科三十七道品」の實踐をする。

しかし、本書では、ラージャ・ヨーガの示している正しい生き方を取り上げたいと思う。ラージャ・ヨーガについて触れる前に、正しい生き方の知識として、六波羅蜜と七科三十七道品にも簡単に触れておこう。

まず、大乘仏教における六波羅蜜とは、到達眞智運命魂（菩薩）が煩惱破壊界（涅槃）の彼岸に至るために修行する六種類の行のことをいう。

到達眞智運命魂とは、仏道修行を成就して覚者（仏陀）になることを目指している人または魂である。六種類の行は「布施」「持戒」「忍辱」「精進」「静慮」「智慧」であ

る。波羅蜜という言葉は極限を意味しているので、六種の行はその極限を目指さなければならぬということになる。

聞き慣れない語や、普通とは違った意味で使われている語もあるので説明しておく。

### ☆六波羅蜜

#### 布施

- 1 物を布施する（財産・金銭・家族や自分の身体など）
- 2 安心を布施する（自分の周囲に安らぎを与える）
- 3 法施（真理を自分の周囲に説き明かしていくこと）

この中で1よりも2、2よりも3という具合に功德が高くなる。



### 持戒

これは十善の実行である。十善とは以下のことを指す。

- 1 生き物を痛めつけない。殺さない
- 2 盗みをしない
- 3 愛のないセックスをしない
- (修行者のそれは「苦行」である)
- 4 嘘をつかない、自分にとって都合の悪いことを隠さない
- 5 必要のない言葉をしゃべらない
- 6 悪口を言わない
- 7 二人の人に別々のことを言って仲を裂くようなことをしない
- 8 貪<sup>むさぼ</sup>らない
- 9 怒らない
- 10 正法(サキャ神賢「仏陀釈迦牟尼」の教え)を否定したり、悪口を言ったりしない

### 忍辱

苦しさ、辛さなどに対して耐える力をつけ、自分の限界をいつそう高くしていくこと。

### 精進

忍辱で培った精神力によって、さらに積極的に修行を進めること。

静慮

極度に強い精神集中ができるようにする。

智慧

宇宙の真理を直感するか、体験する。

以上が六波羅蜜である。次の小乗仏教における七科三十七道品については数が多くなるので、実践項目のみを挙げておくことにする。

☆七科三十七道品

正見解・正思惟・正語・正行為・正生活・正奮闘・正記憶修習・正サマディ・記憶修習  
正覚段階・法則の検討正覚段階・精進正覚段階・喜正覚段階・静寂正覚段階・サマ  
ディ正覚段階・無頓着正覚段階・信の潜在性・精進の潜在性・記憶修習の潜在性・サ

マディの潜在性・智慧の潜在性・信の能力・精進の能力・記憶修習の能力・サマディの能力・智慧の能力・未来悪業断・現在悪業断・未来善業勤・現在善業勤・決意如意の基礎・精進如意の基礎・思念如意の基礎・観慧如意の基礎・我が身これ不浄なり・受は苦なり・心は無常なり・法は無我なり

それでは、皆さんに実践していただきたい正しい生き方について述べよう。これを完全に行なうことが望ましいが、できないことがあっても仕方ないと思う。なるべく心に留めて生活するように心がけてほしい。

### ●修行を成功させる生活法

#### ①食事

理想としては一日一食である。しかし二食でもよいだろう。

主食……玄米か胚芽米を炊いた粥（玄米は圧力釜で炊く必要あり）。

副食……暖かい地方だったら、純粹な菜食で、根菜類を中心にする。寒い地方だっ

たら、これに乳製品を加えてもよい。

食事量……食事の量は、腹六分目から八分目に抑える。

味付……常に薄味を心がける。白砂糖や精製塩はやめて、代わりに黒砂糖や自然塩を使うこと。それと同じように、白米や漂白したパンなどはよくない。

し好品……酒、タバコ、コーヒー、菓子類は全くとってはいけない。季節の果物少々のみ可である。

## ②生活

・異性との交際はいけない　・盗み、殺生、おしゃべりなどはいけない　・意識を常に自分の内側へと向け、一般的な外的楽しみを放棄する　・シヴァ大神、ヴィシュヌ神、覚者（仏陀）の名を機会あるごとに口にする　・グル（靈的指導者）への奉仕、布施、服従を喜びとする　・グルを持たない人は、シヴァ大神を奉り、供物を捧げて祈る　・節度ある敬虔な生活をする　・最低でも一日一回入浴などして、身体を清める

◆  
**第IV章 超能力開発法**

最短最良極秘カリキュラム



### \*最短マスター法を公開

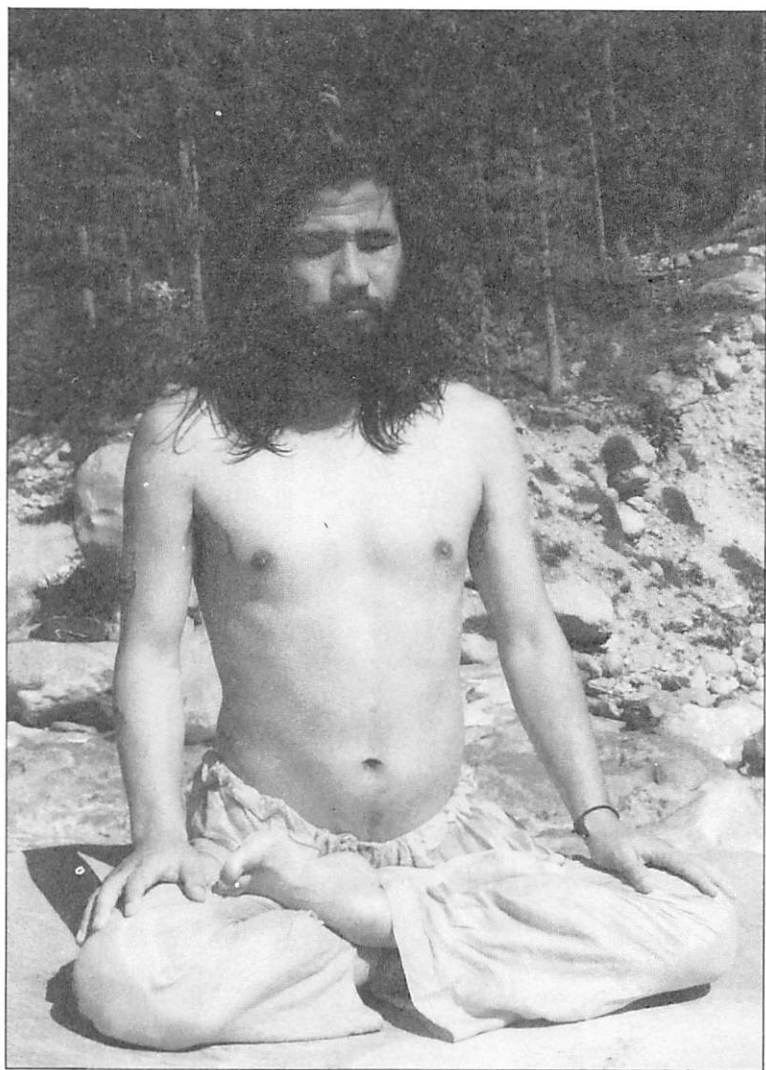
ここでは、第Ⅲ章の〈火と水の洗礼〉の終わった人を対象に、超能力獲得の方法を紹介しよう。〈火と水の洗礼〉が済んでいない人には、いくら最良の方法であっても獲得できない。この章には十二の超能力を載せているが、これらは、わたしが獲得している超能力の中から、重要性を考慮して選んでみた。

この中に自分が今身につけたい超能力があれば、その項を開いて読めばいいように書かれている。

なお、これらの超能力を得るためには、ここに書かれている方法しかないというわけではない。わたしは今までに、仙道、仏教、密教、ヨーガといろいろな修行をやってきた。そのため、一つの超能力をとってもいくつかの修行方法を知っている。

そこで、その中から一番短期間に超能力が得られる技法を主眼に紹介していきたいと思う。ぜひ参考にしていただきたい。

第IV章 超能力開発法



ヒマラヤ。最終の悟りを目指して。

## 1 〈空中浮揚〉の超能力開発法

空中浮揚の超能力を得たい人は、第Ⅲ章の修行をそのまま続けておかなければならぬ。そして、あるレベルに達したら、これから述べる空中浮揚のための修行に進むことができる。あるレベルとは、スクハ・プールヴァカ調気法（191ページ参照）の入息・保息・出息の割合が、一対四対二になったときである。

### ①アーサナ

アーサナは、第Ⅲ章に書かれているものをそのまま続ける。



② ツアンダリー

① ウジャーイー調気法を行なう。

1 かかとを立てて正座し、両手をひざに置く。このとき、ひざは少し開き加減にする。とよい。

2 意識をスヴァディスターナ・チャクラ（下腹の丹田の辺り）に集中する。このとき、喉を半分締めつけながら（半分のジャーランダラ・バンダ）両鼻から息を入れる。息を入れ終わったら、喉を完全に締め付ける。意識は引き続きスヴァディスターナ・チャクラに集中しておく。これと並行して、ムーラバンダ（肛門の締めつけ）を行なう。これによってプラーナ気とアパーナ気を結合させているのである。

3 喉を半分緩め、ムーラバンダを解き、鼻から中程度の強さで息を吐き出す。このとき、喉から音が出るが、口に近い上部から音が出なくてはならない。

4 2、3を十回繰り返す。

②以上が終わったたら、吉祥座を組む。吉祥座とは、ふくらはぎと太ももの間に両方の足をしっかりとはさんで、上半身を真っすぐに立てて安座するやり方である。

③次に、見えた足の裏に意識を集中して気を発生させる（見ているだけで、だれでも気が発生する）。

④発生した気を、下腿内側から大腿内側を通して、ムーラダーラ・チャクラ（尾てい骨）に導く。そして五分間ムーラダーラ・チャクラに意識を集中する。

⑤これが終わったら、ムーラダーラ・チャクラに集めていた気を、ブラフマ結節（背骨のヘソの高さ）、ヴィッシュヌ結節（背骨の乳頭の高さ）、ルドラ結節（後頭部の中心）に五分間ずつ意識を集中させながら移動させる。

⑥その後、そのエネルギーによって、ブラフマ孔（頭頂のやや下）に逆さに下がっている白銀色のハム字（梵字の一字）を溶かす。

⑦溶けたハム字は、冷たい甘露となって、アナハタ・チャクラ（胸）、マニプーラ・チャクラ（へそ）、スヴァディスターナ・チャクラへと滴り落ちてゆく。このとき、

甘露をそれぞれのチャクラに五分間ずつとどめる。

⑧ひと通り終わったら、③に戻り、同じ足で残りの三回、反対の足で同様に四回繰り返す。

⑨すべて終了したら、最後にスヴァディスターナ・チャクラから意識を集中することによって気を発生させる。その気をムーラバンダをしたまま、ムーラダーラ・チャクラ、ブラフマ結節、ヴィシュヌ結節、ルドラ結節と上げてゆき、同じようにハム字を溶かす。

⑩溶けたハム字の冷たい甘露を、ヴィシュッダ・チャクラ、アナハタ・チャクラ、マニプーラ・チャクラ、スヴァディスターナ・チャクラへと滴り落とさせる。それぞれのチャクラで五分間とどめる。

⑪①〜⑨は適当な時間を見つけて一日に十回行なうようにする（左右五回ずつ）。

### ③ダウティ

①幅七センチ、長さ三メートル半の清潔な布を用意する。

②布を縦に二つ折りにしてゆっくりと飲み込む。飲み込んだら、布の端を門歯でくわえ、全部が入ってしまわないようにする。

③次に腹をへこませ、腹直筋を立てる。そして肛門は締めつけている。

④立てた腹直筋を右回しに十回転させる。肛門は締めつけている。

⑤同様に左に十回転させる。このとき呼吸は息を吐き切って止めている。肛門は締めつけている。

⑥終わったたら②の状態に戻し、腹直筋、肛門を緩め、喉を緩める。

⑦ゆっくりと布を引き出す。

※注意……飲み込む練習は、初日は十五センチ程度に留める。その後一日十五センチずつ増やしてゆき、長く飲み込めるようにする。なお、この練習は食事の前に行ない、終わったら必ず食事を取るようにする。



#### ④バストリカー調気法

これまでの修行法で空中浮揚をする場合、これから述べる調気法が不可欠である。それは、心が軽くないと空を飛ぶことができないからである。呼吸を止めている長さ、人間の心が軽くなっている状態とは、密接な関わり合いがある。つまり、調気法で呼吸を長く止めるので、心が軽くなって空中浮揚ができるというわけである。初心者は、吸う息の長さに合わせて、止める時間吐く時間がそれぞれ一対一になるようにする。次は一対二対二、そして最終的には一対四対二になるようにするのである。さらに最後の空中浮揚の瞬間には、自然に入息二十秒、保息八十秒、出息四十秒となっているはずである。

①蓮華座を組む（193ページ参照のこと）

②右手の人差し指と中指を眉間に当て、薬指と小指は左の鼻を閉じて息がもれないようにする。左手は左ひざに置く。

③右鼻孔だけで、すばやく出息と入息を繰り返す（二十〜五十回）。

- ④最後に右鼻孔から息を全部吐き出し、次いで五秒かけて吸う。
  - ⑤吸い終わったたら、親指で右鼻孔も押さえ、喉、肛門、腹の締めつけを順次行なう。このときは息を止めている。時間は二十秒。
  - ⑥次に、腹、肛門、喉の順に緩めていく。そして、薬指と小指を離して、左鼻孔から息を十秒かけて吐く。
  - ⑦同様の手順で、鼻孔を替えて③→⑥を繰り返す。
- ※注意……この調気法は、最も激しいものの一つで、胸、心臓に強い負担がかかる。したがって心臓疾患のある人は、絶対に行なってはならない。また③以降で、頭に何かの変化が起きたときは中止すること。

● 2 〈願望成就〉の超能力開発法 ●

願い事が何でもかなうのが、この願望成就の超能力である。これはかなりレベルが高く、ここまで到達するのは大変なので、ここでは「願かけ」の要素を取り入れたいと思う。

これから

①水行、②断食行について説明するが、いずれも実行にあたって、願い事を強く心に念じることがポイントである。願い事を強く心に念じながら、水行も断食行も並行して行なうようにしなければならない。



## ① 水行

①風呂か大きめのたらいに、自分が少し冷たいと感じる程度のぬるま湯を用意する。

②洗面器にそれをくみ、次の順序で水を三杯ずつかけていく。

右足↓左足↓右手↓左手

これが終わったら、最後に頭から三十八杯かける。全部で計五十杯の水を使うことになるので、足りなくなったら、途中で継ぎ足して続ける。

以上のことを毎日繰り返して行かないながら、少しずつ水の温度を低くしていくのである。そして最後には手を加えない自然な水の温度に耐えられるようにする。その水をかぶる水行を三十日間続けたら、少なくともその願い事はかなうだろう。

実行にあたっての注意であるが、心臓の悪い人は水行に耐えられないので絶対にやっではないけない。また、食前、食後にやることもいけない。

途中で体調を崩した場合場合は休んだ方がいいだろう。ただし、これは精神が肉体に負けている状態なので、修行を再開するときには、ぬるま湯を使った最初から始めなけ

ればならない。

水行だけでも現実的な願い事が何でもかなうはずであるが、断食行を加えるとさらに効果的なので次に説明しよう。

## ②断食行

断食行は大きく分けて、五つの期間から成り立っている。第一期間は、食事の量を次第に減らしていく。第二期間は、断食の準備に入る。そして第三期間に断食をし、その捕食を第四期間にする。そして第五期間に普通食に戻していくのである。

これは、ちょうど山登りに似ている。断食の第三期間を頂上とすると、第一期間と第二期間は登山道に、第四、第五期間は下山道に相当する。だから山（断食）が高ければ高いほど、その前後の期間を長く取らなければならない。下山道は少々楽な気がするかもしれないが、注意を怠ったり、気を緩めると失敗してしまう。つまり、それまでの苦しい断食が無に帰すどころか、かえって害になりかねない。その点に特に気

をつけて実践に入ってもらいたい。

五つの期間の設定例を挙げておこう。断食の第三期間を三日とすると、第二、第四期は六日、第一、五期を十二日とする。比率で表わすと、第一期四…第二期二…第三期一…第四期二…第五期四の割合になる。

例えば、わずか三日の断食に計三十九日も費やすことになるのである。どうしてこのように多くの日数を取るかというと、第一、二期が十分ないと、胃酸のコントロールができず、胃酸過多症や胃や十二指腸の炎症や潰瘍を引き起こす原因となるからである。また、後期の第四、五期は、断食の反動の空腹から、つい食べ過ぎがちで、歯止めがきかないと最悪の場合死ぬことさえあり得るのだ。これは、働きを休んでいた胃腸に、急に多量の食物が入って過大な負担を強いることよって起こる悲劇である。以上、期間を長く取る理由がわかっていただけたことと思う。

## \*断食五日間のプログラム

### 第一期（二十日間）

第一期では、食事内容はあなたが今まで食べていたものと同じでよい。ただし、量を少なくする。また食事回数も減らす。

断食が五日間なので、この期間は二十日間取る計算となる。その二十日間のうち、前期十日間は三食を二食にしていく時期、後期十日間は二食の食事量を減らしていく時期である。

#### ①前期十日のプログラム

第一日―二食、第二日―三食、第三日―二食、第四日―三食、第五日―二食、以後十日までずっと二食。

食事以外の生活は、いつもどおりでよい。

例えば、酒、タバコ、セックスに至るまで自由であって構わない。これは極力ストレスをなくすためである。三食が二食になるだけでも、慣れないと大変なことである。

五日以上二食が守れるようになったら、次へ進んでよい。

②後期十日間

この時期は、やや面倒だといえる。というのも、二食となった食事の、今度は量を通常の四分の一程度に抑えなければならぬからだ。減らす手順は次のようにする。

第一日～五日までかけて、徐々に量を半分にする。続く第六日～十日までに目標の四分の一にする。

まず五日までは一割ずつ減らしていく。第一日目には、食事をいつもの九割の量に抑える。二日目に八割、三日目に七割、四日目に六割、そして五日目に五割でちょうど半分にするのである。

そして六日目にはいきなり四分の一の量にしてかまわない。二分の一に耐えられると、四分の一もわけなくこなせるからだ。

第六日～一〇日まで五日間かけて、身体を四分の一の食事量に慣らししていく。後期一〇日間に入ったらセックスは控えなければならない。なぜならば、食事量が減って

エネルギーが少なくなってきたので、なるべくエネルギーを蓄える方向へもっていかねばならないからだ。酒、タバコもやめる。この時期に、酒、タバコをやめておかないと、身体が吸収しやすくなっているので害が出やすい。

さて、四分の一の食事量で五日間過ごせたら次へ行こう。

## 第二期（十日間）

この時期の狙いは、質の良い食物を食べて血液を浄化させることである。これも前期五日と後期五日に分ける。第一期を経て、精神的には否応もなく神秘的なムードに浸っているはずである。

### ①前期五日間

一日二食、量は四分の一というのは引き続き同じである。ただし、食べる物を変えなければならぬ。食物の基本パターンは暖かい季節と寒い季節の二通りに分けられる。

暖かい季節においては、主食は玄米、ハトムギといった身体を冷やす傾向の性質を

持ったものにする。

反対に寒い季節においては、落花生やアーモンドなどの木の实類を主食とする。どうしてこのように気を配らなければならないかという点、食事が極端に少なくなるため、食物の影響をひどく受けるようになるからである。

副食に関しては、夏、冬にかかわらず、大豆製品と根菜類、葉菜類を取るべきである。それらは、一緒にスープ仕立てにして、割合は次のようにする。

#### 大豆製品四割、根菜類四割、葉菜類二割

大豆製品は、タンパク質の補給が目的である。例えば豆腐、生あげ、大豆、納豆などがある。この中に小豆も含めてよい。これらの中には純良な植物性タンパク質が豊富に含まれており、血液を濁す肉類を避けなければならないこの時期の重要なタンパク源となるのである。根菜類はさらに重要といえる。というのも、根菜類は、“昇”という性質を持っており、エネルギーを上へ持ち上げる働きがあるからだ。食事が少なくなるとエネルギーが欠乏しやすくなっているのがこの時期である。しかし、ここで参

てしまったては、何にもならない。そこで根菜類を用いてエネルギーを上昇させようというのである。根菜類には、ごぼう、人参、れんこん、大根などがある。これらは、根から水分、養分を吸収して上へ上げているので、前記のような性質を持っているのである。

今度は葉菜類であるが、これらはビタミンのバランスをとるために根菜類とともに取るという程度のものである。葉菜類には、キャベツ、レタス、パセリ、春菊などがある。

さて、食事以外にも、水分は努めて取らなければならない。この場合には、人肌くらいに冷ました「お湯」にする。決して熱いものや冷たいものはいけない。量と回数、できるだけ多い方が望ましい。

この食事法が五日間完全にできたら次の後期五日間に入る。

## ②後期五日間

前記五日間では、食事が一日二食になっていたが、後期ではそれを一食にする。食



事内容は前記と全く同じである。

セックスは禁物。絶対にいけない。

### 第三期（五日間）

これまで、水分をできるだけ取るように書いてきたが、宿便を取って胃腸を綺麗にするためである。同様に、第三期の断食期間中においても、ぬるめのお湯をできるだけ飲み続けなくてはならない。

水分を取り続けることに留意して、いよいよ五日間の断食である。すでに精神力が強くなっているはずであるから、簡単に断食期間を過ごすことができよう。

断食期間中に、睡眠時間が減ったり、身体が浮いたような感じになるかもしれないが、気にしなくてよい。重ねていうが、セックスは禁物である。

### 第四期（十日間）

断食後なので「食べられない・異常に食べたい」という相反する性質が現われる危険な時期であるが、意志の力で克服するしかない。

①前期五日間

第二期の後期五日間と同じで、一日一食、内容も同じであるが、断食後二日までは絶対に固形物をとつてはいけない。主食類は重湯にし、副食類もスープの汁だけ飲むようにする。味付けもかなり薄めにし、香辛料は使わない。つまり、薄い塩味かしょう油味ということになる。

三日目からは徐々に固形物を入れていってよい。

②後期五日間

第二期の前期五日間と同じように、一日二食とする。内容も同じである。水分としてはお湯だけである。これは第五期、つまり断食行が終了するまで気をつけなければならぬ。セックスも、酒、タバコもそれまで厳禁である。

第五期（二十日間）

①前期十日間

最初の五日間は、量は普通の四分の一のまま、自分が普段食べている物を少しず

つ取り入れていくようにする。六日目からは、通常の半分にまで量を増やしてよい。七日目から十日目にかけて、いつもの量にまで戻す。この間、食事回数は一食のままである。

②後期十日間

いよいよ最後の十日間である。五日目までは引き続き二食を続ける。第六日は三食、七日二食、八日三食、九日二食ともっていき、十日目は普通の三食に戻って断食行は終了する。

断食行において現われる変化は、身体的に若返り、精力絶倫となる。さらに身のこなしが軽くなることなどである。

精神的には、気力が充実し、神秘的な精神状態となり、生きているという実感がわいてくる。

超能力では、願望成就の他に靈視ができるようになるだろう。

#### 4 〈透視・遠隔透視〉の超能力開発法

第三章の修行を続けながら、次の二つの修行法を加える。

##### ①トラータカ

これは視線を動かさず、心を静めて、微小な標的を涙が出るまで見つめることである。対象は何でもよいのだが、柱に画びょうを打って対象とするのが一番よいと思う。これは、第三章の修行を進める中で、騒音に耐えられなくなるレベル（制感の行）に達していないと効果がない。そのレベルに達するまで、今までの修行を続けることである。

このトラータカの修行が成就すると、画びょうが真中から左右に分かれて、いろいろな映像が見えてくるであろう。

②ネーティ

これは、①の「トラータカ」の補助となる修行である。

☆ぬるま湯のネーティ

- ①洗面器の中に三十五、六度のお湯を入れる。
- ②その中に小さじ半分くらいの塩を溶かす。
- ③息を半分吸ってから、顔をお湯につけ、お湯を鼻で吸い上げる。このとき、腹をふくらませるようにするとよい。
- ④お湯が鼻から入ったら、それを口から出す。
- ⑤②→④を洗面器のお湯がなくなるまで続ける。

☆ひものネーティ1

- ①やわらかい三五センチの長さのひもを用意する。
- ②左鼻孔を指でふさぎ、右鼻にひものはしをさし込んで息を吸い、何回も繰り返して

口からひもを出す。

③口から出したひものはしと、右鼻の外に残っているはしを持って、静かにしごく。

④口の方からひもを引いて出す。

⑤新しいひもを使って、反対の鼻孔から入れ、同様のことを行なう。

#### ☆ひものネーティ2

1のやり方が上手になったら、2に移る。

①右鼻にひものはしをさし込む

②左鼻を指で押さえて息を吸う。

③右鼻を押さえて左鼻で息を吐く。

④左鼻からひものはしが出てきたら、右鼻に残っているひものはしと両方持って静かにしごく。

⑤新しいひもを使って鼻孔をかえて同様のことを行なう。

※注意……1ぬるま湯のネーティでは、頭にツンとくるが、我慢してやること

2 ひものネーティでは鼻の途中まで入れるときは寝てやり、立ってから出すとやりやすい

3 ひものをしごくのは三十〜百回行なうが、次第に炎症を起こしたような感覚を持つようになる。この場合でも、そのまま続けてよい。



ひものネーティ

#### 4 〈テレパシー・他心通〉の超能力開発法

テレパシー受信も他心通もあらゆる相手が出す波調を受けることのできる超能力である。その力を得るためには、次の修行が必要である。テレパシー発信についてはこの後述べる。

#### ●四無量心の実践

これは「慈悲喜捨」の実践である。「慈」とは相手の喜びを一緒に味わってあげる気持ち、「悲」は相手の悲しみを一緒に味わってあげる気持ち、「喜」は相手の善行をほめてあげる気持ち、「捨」は自分や社会に対する悪行に心を動かされない訓練である。



実践にあたっては、「捨」の訓練を最初に持つてこないといけないだろう。これによって、冷静な心、公平な判断ができるようになるからである。

①「捨」の瞑想

父母、子、恋人など愛する人と、憎んでいる人が自分の悪口を全く同じように言っているのと瞑想する。そして、どちらに対しても心を動かさなくなるまで、それを続ける。

②「喜」の瞑想

最も憎んでいる相手が善行を積んでいるのを見て、心から誉めてあげていて、瞑想する。これができるようになったら、次に進む。

③「慈」の瞑想

憎んでいる相手の幸福（昇進・合格・自分の好きな人と結婚したことなど）を心から喜んであげていて、瞑想する。できるようになったら、次に進む。

④「悲」の瞑想

憎んでいる相手の不幸（肉親の死・落第・左遷・失恋など）を心から悲しんであげていることを瞑想する。

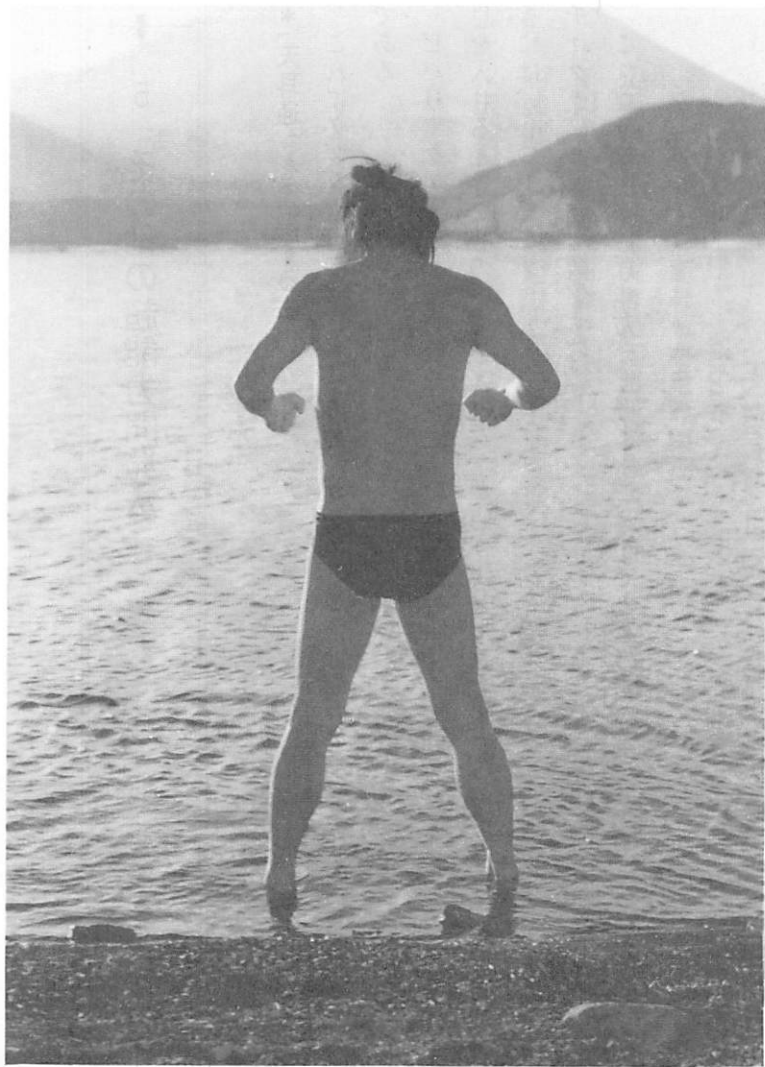
以上の四種の瞑想過程が成就したならば、相手のあらゆるヴァイブレーションを受けて心を知ることができるよう。

また、テレパシーを発信するためには、次の修行を行なえばよい。

〈具体的にイメージ化する訓練〉

例えば、「りんご」というテレパシーを送りたいとする。りんご↓赤い↓甘酸っぱい↓果汁という具合に、いろいろな要素を確認し、はっきりした具体的なイメージを作り上げていく。それができたら、それらを総合して映像として思い浮かべる訓練をする。

その次に、映像を思い浮かべたまま、アナハタ・チャクラ（胸）に精神集中を行なう。ここまで完全にできるようになったら、テレパシーを送ることができるようになっているだろう。



厳冬の本栖湖で。ヨーガ、インド宗教の極限を試す。

## 5 その他の超能力開発法

### \*「天耳通」を獲得する法

これに必要な修行は、ビバリータ・カラニー（第三章「アーサナ」の項参照）のみである。

ビバリータ・カラニーを行なうときに特殊な呼吸法を取り入れる。そのやり方は、息を入れるときに心の中で「アウム」というマントラを唱えるのである。息を出すときには、心の中で「ジャーナー」というマントラを唱える。そして、喉のヴィシユッタ・チアクラにハム字を観想する。

これだけで遠隔透耳能力を獲得することができるのである。

**\*体内組織を知る法**

これは透視能力を身につけてからでないと無理なので、この超能力を得たい人は透視の項を参照すること。

①相手のアージュニアー・チャクラ（眉間）に自分の親指を当てて、見たい部分に精神集中を行なう。

②そうすると、自分のアージュニアー・チャクラから白い光が、相手のその部分に注がれるようになる。

③その光が、相手の部分を浮き上がらせて、見せてくれる。

**\*「宿命通」を得る方法**

これも透視能力を得てからでないとできない。

①自分のアージュニアー・チャクラから発する白い光を自分のアナハタ・チャクラに当てる。

②光をアナハタ・チャクラに当てながら、自分の過去世や未来世が出てくるように念じる。

③過去世が出てくるときには、情景が暗く、早いテンポの心地良い音楽が聞こえる。

④未来世が出るときは、光り輝く情景が現われ、音楽は聞こえない。

他人の過去世や未来世が見たいときには、念じながらその人のアナハタ・チャクラに光を当てる。そうすると、喉の辺りに浮き上がって見えるはずである。

#### \*「サイコメトリー」を得る法

これはテレパシーと透視ができなければ得られない超能力であるので、この力を望む人は最初にテレパシーと透視を身につけること。

無想三昧に入るための行が必要である。

①右の乳頭を凝視して、浮いてくる想念に対して心を動かされないようにして、心の底に沈めてしまうようにする。

- ② そのうちに全く想念が浮いてこない状態がやってくる。それが無想三昧である。
- ③ 対象物または相手に触れたときに、無想三昧に入ると、自分の心に対象物や相手に対する知識が浮いてくる。それが、サイコメトリーと呼ばれる能力である。

**\*「予言能力」を得る法**

これは、頭頂にあるサハスラーラ・チャクラまでの開発がすすんでいることが条件である。まだ、そこまでいっていないかったら、第Ⅲ章の修行と、空中浮揚、サイコメトリーの項に書かれている修行を行なってサハスラーラ・チャクラを開発することである。

- ① 意識をサハスラーラ・チャクラへ集中して、そこから魂を抜け出させる。抜け出した魂は、何か乗り物に乗っているかのような感覚になっている。
- ② 必ずどこからか黄金色の光が射してきている。他に、白銀色、白、薄い黄金色の光もあるので間違えないようにする。

③ 黄金色の光の方角へ進むと、未来が見えてくるはずである。

※注意……他の三本の光は次の世界からの光である。白銀色……仏国土 白……天界  
薄い黄金色……過去

つまり、予言の超能力を獲得すると同時に、仏国土、天界、過去を知る力も得ると  
いうわけである。

#### \*美しさを永遠に保つ法

これは、身体の下部にあるパーナ気の働きを強化し、身体内の毒素を排泄するよ  
うにするのが最も効果的である。そのためには、第Ⅲ章の訓練を続けながら、バステイ  
(洗腸法) とシートカーリー調気法を行なわなければならない。

#### ① バステイ

① 二〇〇ccの洗腸器を用意する。



②ぬるま湯を二〇〇〜三〇〇cc肛門から直腸に注入した後、ナウリ（腹直筋の回転）空中浮揚・ダウティ参照）を行なう。

③その後、トイレで水とともに便を排泄する。

※注意……1冷たい水で行なうと腰痛が出ることがあるので、必ずぬるま湯を使うこと

と  
2ダウティ同様、終わったら必ず食事を取らなければならない。

②シートカーリー調気法

①吉祥座を組む。吉祥座とは、ふくらはぎと太ももの間に両方の足をしっかりとさし込んで、上半身を真っすぐに立てて安座するやり方である。

②下腹を引き締め、両鼻孔から息を吐ききる。

③口をやや開き、上下の歯の間から舌の先を少し出す。その状態で口から息を吸う。吸うときには、シーという音がする。

④息を腹、胸の順に深く満たしたら、舌を戻し口を閉じて保息する。

⑤ 保息が終わったら、鼻から静かに息を出す。

⑥ ③に戻り四十息繰り返す。

これらの修行をすれば必ず美しくなるし、それを保持することができる。そのためには、ずっと続けた方がよい。

#### \* 痩せられる法

痩せるためには、第三章の修行法にダウテイ（空中浮揚の項参照）と、バステイを加える。これらの修行を続けて制感の行を完成させるのが第一である。制感の行とは、精神が外界の刺激を避けて、寂靜を求める境地のことである。

制感の行が完成したら修行後二十分間、ヴィシュッダ・チャクラ（喉）に精神集中を行なう。食事前も二十分間の精神集中を行なう。

以上の方法によって、一カ月に五〜十キロは楽に痩せていくだろう。

#### 第IV章 超能力開発法



＊「不老不死・超健康体」を得る法

第一にサハスラーラ・チャクラの開発、第二にケーチャリー・ムドラーの完成が  
要である。

☆ケーチャリー・ムドラー

準備として以下のことをする。一週間に一回舌小帯（舌の裏側にあるひだのようなもの。舌先を天井に向けるとピンと張りつめる部位）をカミソリでほんの少し切り、一週間かけて引っぱる。六カ月後には、舌小帯がすべて切れているようにする。わたしは今、半分ほどを切っている。別に何の支障もない。

ムドラーのやり方は、舌を反転して、頭蓋のイダー氣道、ピンガラ氣道、スシュムナー氣道が合流している場所へ挿入する。最初は一秒に満たなくてもよい。ケーチャリー・ムドラーを修めることができたならば、若返りはもちろんのこと、すべての超能力を得、しかも解脱も可能である。

◆  
**付録 超能力獲得〈修行体験記〉**  
◆

●

# 第一部 超人たちの証言

—— 修行はわたしをこう変えた！

●

---

◎ 願望成就

---



音信不通の相手をも動かす

聖者タントラウツタマー上流師

最近、わたしは思念したことが頻繁に現実化するようになりました。例えば、ある人への連絡が必要になった場合、自分で連絡を取らなくとも、すぐ向こうから電話が来たり、訪ねてきたりという具合です。

先日もこんなことがありました。

それはオウム真理教恒例のインド巡礼ツアーを目前にしたある日のことでした。準備万端、

あととはインドに向かうだけと、ホッと一息ついていたときです。

早朝、突然に飛行場までの交通方法が変わるとの連絡。慌てて参加者の方々に連絡を取ろうとしたのですが、皆さん、もう会社に出勤されたりで、なかなか連絡が取れません。困ったなと思いつながら、わたしは心を鎮めて瞑想修行に入ることになりました。

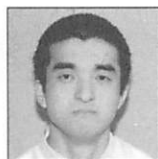
その後、次々に連絡が取れ出し、その日の夜には全員の方に連絡がついたのでした。それだけではありません。この話にはもう一つおまげがあるのです。

それは翌日にまたどうしても参加者の方々に連絡を取らなくてはならないことが起こりました。しかも今度は深夜遅くにです。時間帯を気にし、電話をかけるのを躊躇ちゆうちゆうしたわたしは、まず瞑想に入り、参加者の方と連絡が取れるように思念してみました。

すると、相手方から意外にも電話がかかったり、訪問されたりでアツという間に連絡が取れたのです。これには自分でも驚いてしまいました。

このように、わたしは修行を始めてから思ったことが頻繁にかなうようになって、いざというときに困ることが少なくなりました。修行の効果をつくづく感じているこのごろです。





## 功德の力で思いのままに

聖者カンカー・レーヴァタ上流師

仏典には覚者、真理勝者への布施や奉仕が大きな功德となってその果報を表わすという話があります。また、ヨーガの経典でも、グルに対する献身の重要性を説いています。

出家をし、わずかながらもグルであられる尊師への布施や奉仕、貪る心を捨断する実践をさせていただく中で、自然と「思ったことが即実現化する」という現象を体験しています。

例えば、ある書籍を書店で見つけ、「この本があるといいな」と思った翌日に、まさにその同じ本が人からプレゼントされるとか、またそういった物だけではなく、

「Aさんは日々の基礎的な修行をできないくらい忙しい。だれか来てくれないだろうか。」  
と思ったところ、そのほんの数日後、本当に新人が現われたりするのです。

このような体験は、修行を始める前には決してありませんでした。小さなことですが、尊師の教えの正しさ、修行の力を確信させてくれます。

◎直感智



適中続きの直感

聖者タントラバツダー到達光正師

クンダリニー・ヨーガを成就したのと同時に、様々な神通力が芽生えたことを実感していますが、中でも、直感が鋭く、しかも正確になったことには驚きました。

特にこの能力を顕著に感じるのは、信徒の方と面談しているときです。わたしは、出版の奉仕活動をしていますので本部・支部担当の師の方とは異なり、普段は直接信徒の方と接することはありません。したがって、その場で初めてお会いした信徒の方と面談することが多いので

すが、一言二言会話を交わしただけで、その方が修習してきたことやひっかかりが、言葉として脳裏に浮かぶのです。

例えば、Aさんの場合、自宅でどんな修行をしているかを聞いたときに、“S学会”という言葉が浮かんだので、

「以前、他の宗教を、それもかなり長い間信仰していたのではないですか？」

と、ご本人に確かめてみたところ、二十年近くもS学会の信徒をしていたとのことでした。Bさんの場合は、一目見た瞬間に“破戒”というイメージがわいてきたので、

「戒律はきちんと守っていますか？」

と聞いてみました。案の定、その方は性欲の戒を破っており、それが修行の妨げとなっていることがわかりました。

また、こんなこともありました。ある場所へ取材に出かける折のことです。その方面へは、わたしも運転手も一度も行ったことがありませんでした。出発時間を打ち合わせているとき、

“二時間半”というイメージがわいてきたので、

「二時間半前に出かけましょう。」

と言ったところ、運転手は、

「四時間、ひよっとしたら五時間かかるかもしれない。」

と言うのです。わたしは確信があったので、二時間半前で十分だと重ねて言ったのですが、相手も譲りません。最終的には、運転の経験の豊かな相手の言うとおり、五時間前に出発することに決まりました。

ところが、いざ車を走らせてみると、なんとわたしの直感どおり、ぴったり二時間半後に目的地に到着したのでした。

これは、直感を生かすことができなかつた例ですが、日ごろはこれらの直感を大いに活用し、修行に奉仕活動に役立てています。



## 恐ろしいほど適中！

聖者キレーサ・パハーナ・アーナンダ到達光正師

子供のころから好奇心が旺盛で、周りの人・物をじっくり観察する癖があったせいか、それらのデータをもとに周りの人の状態、あるいは近い未来にどんなことが起こるかを分析する能力に長けている方でした。それがオウム真理教の修行を実践することで、そのようなデータ分析とはまた違った、直感的に周りの状態や未来を知る能力まで開発されたようです。

これらの体験は信徒時代から何度も経験していることですが、出家して本格的な修行を始めてからより顕著になり、特にクンダリーナ・ヨーガを成就させていただいてからは修行の効果をご存じない方にはとても信じられないようなミラクル体験ばかり続いています。

友人から呼ばれているような気がしていて、連絡すると必死に自分を探し回っているところだった。電話を取る前に相手がだれかわかる。初対面にもかかわらず相手の心の引っかかりがわかる。対向車が来るときはカーブの手前で車が走っているヴィジョンが頭をよぎる。……一



一つ一つ挙げていったらそれこそ枚挙にいとまがありません。次に紹介する話もそんなミラクル体験の一つです。

その日、わたしは海外からの荷物を引き取りに、成田空港を目指して車を走らせていました。ところが、その日は出発時から胸騒ぎがしていてどうも気が進みません。これから成田空港に到着してどういう手順で作業を進めるか、その日に限っては全くイメージできないばかりか、自分が成田空港にいる姿さえ想像できなかったからです。そして、中央高速から首都高に入るところになるとその嫌な予感はいよいよ具体的になり、前を走っていた乗用車の後ろ姿に何ともいえない不快感を感じさせられるのでした。

事件はそれから十分ほどして起こりました。おそらく居眠り運転が原因なのでしょう。前の乗用車のそのまた前を走っていたトラックが沿石に乗り上げて横転しかかったのです。幸いそのトラックはすぐに持ち直して何事もなく走り去っていったのですが、ホッとしたのも束の間、前の車の運転手が動転してしまっただけで急ブレーキ後に完全に止まってしまったため、わたしの運転していた車は不快感を感じたその車の後部に突っ込んでしまいました。結果、わたしはその日、当初の直感どおり成田空港に行けなくなってしまうわけです。

こうした体験はオウム真理教に入信する以前はほとんどなく、まさに修行を始めてからた

続けに始まりました。やはりこれは麻原尊師が伝授してくださる修行法の正しさの証明ではないでしょうか。

---

◎  
空中浮揚



寝ていると体が浮き上がる！

聖者ヴァジラティツサ到達光師

わたしは、入信までにオウム真理教の本は何冊か読んでいて、体が意図せず跳ねるとか、浮き上がるとかいうことを読んで知ってはいましたが、あまり本気にしていませんでした。

入信当時はほとんど修行らしい修行はせず、一日三十分くらいの瞑想を家でしていました。そして一週間くらい経ったころです。寝ていると不思議なことに、何だかおなかの部分だけがどうしても浮いて、ちょうど体がブリッジのように反ってしまうのです。頭と足はついている



のですが、おなかの部分だけ、どういうわけかフツと持ち上がってしまうのです。

おかしいなと思いました。ひよっとして、これは蓮華座を組んで座れば体が跳ねるのではないかという気がしてきました。そこで、布団から出て蓮華座で畳の上に座ってみました。そして、ちょっと瞑想すると、体を動かさそうと思わないのに体が跳ねるのです。当時わたしは医学生でしたから、筋肉を使えばこれくらい跳ねるのは可能だろうと思いましたので、絶対筋肉を使わないように足を押さえたり、ひもで縛ったりしてみました。このときは、不思議で面白くて一晩中いろいろやってみました。ところが、どうやっても跳ねるのです。自分でさんざん研究してから、今度はそれを友人に見せました。友人が見ても確かに跳ねていると言っています。

その後、オウム真理教の道場へ行つて、激しいプラーナーヤマとかマントラ瞑想等をやるようになりました。すると、だんだん飛距離が高くなっていきまして、高いときは、椅子に座っているくらいの高さまで飛びました。これくらいになると、座法を組んだまま人間の筋力で飛ぶには不可能な距離だと思えます。

これは一般の方には本当に不思議なことでしょうが、体験している者にとっては真実の体験なのです。そして、オウム真理教では、クンダリニー・ヨーガの成就の条件の一つとして、この空中浮揚が挙げられているのですが、現在では百名以上の方がクンダリニー・ヨーガを成就

しています。また、クンダリニー・ヨーガを成就していなくても空中浮揚の能力を体得している方は大勢いらっしゃるのです。



遠くの出来事を見る

聖者ウツジャヤ到達光師

わたしがあつた地方へ出張したときのことです。その出張の目的は、信徒の方の自宅をお借りして真理の流布をする「アットホーム真理」という催しでした。その日は道場から離れている場所で、しかも道が渋滞していたため、目的の場所へ到着するのが大変遅くなってしまい、皆さんを待たせるのは申し訳ないと思ひながら車を走らせていました。

やっと目的の場所に着いたのはいいのですが、なかなか駐車場が見つかりませんでした。駐

車する場所を探しているうちに時間はどんどん経過していきます。仕方なく、他の車が駐車してあったところにわたしも止めました。

アットホーム真理も順調に経過していき、少し時間が空いたので、わたしは座法を組んで瞑想をしました。すると、目の前に、先程自分が駐車した車がヴィジョンとして現われました。何だろうとそのヴィジョンを見てみると、警官がわたしの車のところで、しきりに周りの人に運転手はいないかと聞いているのです。そして、その後、例の駐車違反のラベルを取りつけているではありませんか。わたしは、他の車も何台も同じように駐車していたはずだからと思っ  
て、瞑想から覚めてもこのヴィジョンを否定していません。

アットホーム真理が終わり、さっきのヴィジョンのことなどすっかり忘れて車のところに行くと、なんと、先程のヴィジョンどおり、わたしの車に違反のラベルがついていたのです。近所の人の話だと、警官はしきりに運転手を探していたとのことでした。

そうだったのです。瞑想中に、わたしは自分のいた場所からは見えるはずのない出来事を見ていたのです。瞑想から覚めたときにヴィジョンを信じていけば交通違反に問われることはなかったのにも思っても、もう後の祭りでしたが、修行によって遠隔透視の能力がついたことを知ることができた貴重な体験でした。



## 相手のデータをそのまま見透かす

聖者ヴァジラダンマサヴァ到達光師

ある日、信徒の方に、

「導きたい人がいるのですが。」

と、相談を受けました。わたしは、ぜひその方に真理に巡り合っていただきたいと思い、思念しました。すると、一人の女性のヴィジョンが浮かんできました。わたしは、そのヴィジョンのままに、

「あなたが導きたいと思っているのは、髪が長くて、眼鏡をかけていて、赤い色が似合う、よくため息をついている人ではないですか？」

と尋ねました。すると、その信徒の方は、

「どうしてわかったんですか？」

と、目を丸くして驚いていらっしやいました。わたしがヴィジョンで見た女性は、まさしくそ

の信徒の方が導きたいと思っていた人だったのです。

その数日後、今度は違う信徒の方に、

「導きたい方がいるのですが。」

と、また同じような相談を受けました。わたしは前回と同じように、強く思念してみました。

すると、今度は、オールバックにした、黒ぶちの眼鏡をかけた男性のヴィジョンが浮かびます。

「その人は、オールバックで、黒ぶち眼鏡をかけた、蛇皮の靴をはいている男性ですか？」

と聞いてみました。すると、

「その人は、導きたいと思っている人と同じ名前ですが、別人です。」

とのことでした。実は、このときは、エネルギーをロスしていたため、少し多めに修行をしなければいけないと思っていた矢先だったのです。やはり、エネルギー状態が良くないと、データをストレートに読めない場合があるのだと知り、修行の大切さを痛感しました。

---

## ◎サイコメトリー

---



### 椅子に残ったデータを読む

聖者ナンテイヤ到達光師

わたしがクンダリーニー・ヨーガを成就してから、はっきりと身についたといえる超能力は、サイコメトリーである。

わたしのこの能力は、その人が使っていた持ち物に残っているカルマをチャクラで感じて、（この人は、このようなカルマで、今ひっかかっているんだな。）とか、（あつ、性欲が出ているな。）とか、各チャクラに反応し、それにより、その人の状態を把握するのである。

例えば、Iさんの椅子に座ったとたん、スヴァアディスターナ・チャクラに激痛が走り、その後、ズキンズキンと定期的に痛んだ。間違いなく性欲が出ていると思ひ、彼に確認したところ、そのとおりであることがわかった。

また、Hさんの場合、中央のアナハタ・チャクラが突き刺されるように痛み、現世がなつかしいというような感覚が押し寄せてきた。これも本人に確認したところ、彼女は現世での思い出にひたっていたのだった。

Sさんの席では、ムーラダーラ・チャクラが強烈に痛み、その痛みは約一日消えなかった。やはりSさんは嫌悪にさいなまれていたのである。

あるいは、Mさんの席では、座った後で百パーセント、必ず下痢、もしくはトイレに行くなど、アパーナ気の働きが活発になる。案の定、彼女は下向の意識が強かった。

このようなことは数え上げればきりが無い。そして、チャクラや気で感じた内容は絶対ごまかすことはできず、百発百中で一度も外したことはない。

修行を始めるまでは全くの凡人だったわたしも、このサイコメトリーをはじめとして様々な超能力を身につけつつある。



---

◎  
予知

---



ヴィジョンで知る未来の出来事

聖者アツサージ化身成就師

未来のことが前もってわかるということは、わたしたちの人生にとって大変利益になることだと思う。これから起きることを知っていれば失敗がなくなるし、それに対する対策も立てられ、無駄な時間を使わなくてすむ。この超能力は、修行をしていけばだれもが得ることができ  
るのだ。

わたしもこの予知能力によっていろいろと助かることも多い。次の日にどうい  
う人が入信す

るかとか、一週間後に何が起きるとか、または一カ月後、半年後と、これからどうなるのかを体験できるのである。ヴィジョンの中の体験はともリアルで、実際に自分自身がそこにいる感覚がある。ヴィジョンが現象化したとき、現実の自分とヴィジョンがオーバーラップしてその瞬間にカチッと重なるような感覚がある。

実際に予知していてぴったり当たった例を挙げると、わたし自身がマハー・ムドラの修行に入れていただき苦戦する経験を半年前にして、やはりヴィジョンどおりに苦戦してしまっただことや、わたしが常駐している支部に、そのときはまだクンダリーニー・ヨーガを成就していなかったI正師が、成就した後配属されるといふヴィジョンを見、数カ月後にそうなったこと、最近では、ある会社に、支部の信徒さんが数名就職するといふヴィジョンを経験して、一週間後にそれが現象化したことなど修行や救済活動に関したものが多し。

このように、普段身近に起きることが当たるのだから、まだ成就していないヴィジョンも確実にそうなるのではないかと思っている。それは、第三次世界大戦、核戦争などのヴィジョンである。多くの過去の予言者が予言しているように、そして、オウム真理教の多くの成就者が予知しているように、何よりも麻原尊師が予言されているように、ハルマゲドンは確実に起こると確信している。

この未来を知る力を、一人でも多くの人が修行することによって得ていただければ、世の中はもっと良くなるのではないだろうか。



## 未来の出来事を事前にキャッチ

聖者ディーラー到達光師

もともとアストラル人間と尊師に言われていたわたしは、アストラルの体験が豊富なのですが、特に予知は自分でもびっくりするほどよく当たります。

ラージャ・ヨーガを成就して二カ月経ったころのことでした。ツァンダリーの瞑想をした後、シャヴァアーサナで休んでいると、いつものようにアストラルの世界へ飛んでいきました。ここでは、サマナ（出家修行者）が印刷工場らしきところからB5判サイズの『マハーヤーナ』（当時の教団機関誌、そのときのサイズはA5判だった）をたくさん運び出していました。

後でそのことを法友に言うのと、

「『マハーヤーナ』がそんなに大きくなるはずはないよ。」

と、笑い飛ばされてしまいました。ところが、それから二日後、支部に送られてきたファックスの通達文章には、「教団に印刷工場ができることになった。それに伴って『マハーヤーナ』

がA5判からB5判に変わる」ということが書かれており、わたしが見たヴィジョンはびつたり当たっていました。

クンダリニー・ヨーガを成就して半年ほど経ったころのことです。ヴィジョンの初めに「山梨はシヴァ大神に祝福された聖地である」というナレーションと字幕が出てきて、続いて建築現場のような風景が出てきました。そこにはビルが建ちかけており、サマナが井戸を掘っていたのですが、なかなか水が出なくて困っているという話をしています。そのビルは水を大量に使うワークをするために建てられるらしく、どうも食品工場になるらしいということがわかりました。

そのころ、オウム真理教には山梨に施設はありませんでしたが、半年から一年後にヴィジョンどおりに二つのビルが建造されました。ところが、井戸を掘ってもなかなか水が出ないということはびつたりだったのですが、食品工場はおろか、水を大量に使うようなワークをするための施設ではありません。予知が外れたのかしらと思っていたら、後にビルの一階に、神々に捧げる供物を作るための工場（食品工場とは少しずれていましたが）ができ、またもや予知が成就してしまいました。

これと同じように、熊本のシャンバラ精舎についても、建設が始まる二年前にヴィジョンを

見、実際に二年後にそこを訪れたとき、そのときのヴィジョンどおりだったのにはびっくりしました。

他にも、たくさんの予知が実現していますが、時折、山梨の食品工場のときのように、ヴィジョンを正確に読み取れないことがあります。観念が入ってしまうと、正確な予知はできないのかもしれない。



## 試験の内容がズバリと適中！

聖者マチク・ラブドンマ到達光師

極厳修行で教学システムの試験を受けているときのことです。

そのときのわたしは眠りに陥ってしまい、次の試験の準備が何もできていないまま究竟の瞑想の時間になってしまいました。究竟の瞑想が終わると一時間後には試験の時間が始まってしまいます。わたしは究竟の瞑想をやるよりも、試験の勉強をしなければ試験に落ちてしまうと思いい、こっそりと道場を抜け出し、試験勉強を始めようと思いました。

しかし、外に出てドリルを見ようと思っても、まだ眠りから覚めきれずウトウトしてしまいます。ところが、そのとき目をつぶったままコックリコックリしているのかかわらず、覚えなければならぬ部分の文章が目をつぶったままのわたしの脳裏にはっきりと出てきたのです。そして、表層の意識は眠りに陥っているのかかわらず、深い意識はとても鮮明で、目をつぶったまま見ている文章を一度で覚えてしまうことができましたのです。

わたしは、これで試験は大丈夫だと確信を持つことができたので、目を開けて道場へ戻り、究竟の瞑想を行なうことができました。この出来事は、時間にするとなった数分のことです。試験は満点を取らなければ合格することができないのですが、わたしは楽々満点を取ることができました。

不思議なもので、普段の意識状態のときは時間をかけても、その説法の内容を覚えることができないのに、このときは、たったの数分で簡単に頭に入ってしまったのです。やはり修行をして、いいエネルギー状態で物事を行なった方が、はるかに効率的で、いい結果が得られるんだということがよく理解できると感じました。



---

## ◎化身



### 目撃された変化身

聖者チャンドー上流師

わたしがクンダリニー・ヨーガを成就したばかりのときのことです。

わたしは富士山総本部道場の二階で立位礼拝の修行をしていました。少し疲れたのでシャヴァーアーサナをとることにしました。

少しすると、わたしの肉体から変化身が抜け出し、道場の隣のサティアン・ビルに向かい始めました。着いたところは、わたしより一足先に成就したI師が修行している部屋でした。わ

たしは、ドアを開け中に入りましたが、I師が瞑想修行をしていたので、そのまま部屋の外に出た。道場でシャヴァアーサナをとっている肉体に戻りました。

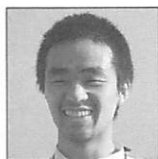
それから、また立位礼拝を始めましたが、数時間後にマンジュシュリー・ミトラ正悟師が来られ、わたしに、

「さつき、サティアンの三階に来なかったか？」

と尋ねられました。時間帯を聞くと、ちょうどシャヴァアーサナをとっている時間でした。後でI師にも、

「この前、わたしが修行していた部屋に来たでしょう？」  
と言われました。

わたしの肉体は、そのとき道場二階にいたのですが、そのときマンジュシュリー・ミトラ正悟師にもI師にも、わたしの変化身が見えていたようです。わたしは、この出来事によって改めて、修行することによって肉体だけではなく別の身体を動かすことができることを確信しました。



## 変化身で察知した不審な車

聖者ウァジラハーサ化身成就師

これはわたしがクンダリニー・ヨーガ成就の極厳修行中に経験したものです。そのときは、極厳修行に入っていた者は、十二時間修行をし、残りの十二時間は、カルマを落とし功徳を積むという目的で富士山総本部道場の敷地内を警備するワークをしていました。

十二月の中旬、標高千メートル近くの富士山総本部道場は、都会と比べると大変寒く、特にその日は雪が降ってもおかしくないくらい寒い日でした（実際に、それまで何度か雪が降っていました）。わたしはその寒さに耐えながら警備をしていましたが、あまりに肉体的ダメージが大きいので、ふと、このように思案しました。

「肉体ではなく、変化身で警備をしよう」と。

わたしは頭頂に意識を集中し、そして意識を変化身に移行させました。その変化身はこの肉体と同じように五感を持ち、この肉体と同じように、もしくはそれ以上の行動ができました。

わたしは、人の気配や物音を感じたら、即、意識を肉体に戻し、その後、意識を変化身に移すということを繰り返していました。

しばらく変化身を使って警備をしていたとき、変化身の意識が何か妙な気配を察知したので、わたしは意識を肉体に戻しました。すると、その数分後、不審な車が道場に近づいてきました。そして、道場の近くで止まり、道場の様子をうかがったり、写真を撮ろうとしたりしていました。わたしは、これは危険だと思い、その車に駆け寄りました。すると、その車は慌てたように去ってきました。もし、このときわたしの意識が肉体になかったなら、未然に防げなかったかもしれません。

そして、わたしはこの数日後、尊師よりクンダリーニー・ヨーガの成就を認めていただきました。



## 変化身で海外旅行

聖者メーカラダイカー化身成就師

クンダリニー・ヨーガの成就のための極厳修行中、わたしは究竟の瞑想を行なうことによつて肉体から変化身を抜け出させることができるようになりました。そして、ある程度変化身をコントロールすることができるようになったわたしは、究竟の瞑想の時間が楽しみで（一時間の究竟の瞑想が一日三回あった）、いろんな所に変化身を飛ばしていました。

ちょうど尊師がインドに行つていらつしやったとき、わたしは、まさか変化身がインドまで行くことはできないだろうと思いつつ、尊師を強く意識して変化身を飛ばしてみました。すると、尊師と、緑色のクルタを着た正大師、ピンク色のクルタを着た正悟師ご一行が山道を歩いていらつしやり、わたしはそれを崖の上から見ているというヴィジョンが現われました。正悟師方の中でも、特にマイトレーヤ正悟師ははっきりとわかりました。

わたしはご一行が歩いていらつしやるのをしばらく眺めて、元の肉体に戻ってきたのですが、

そのとき、先入観によって、先ほどのヴィジョンは自分の思念によって作り出したイメージにすぎないと判断をしてしまったのです。その先入観とは、大阪に住んでいる母親の所や京都までは飛んだことはあるが、まさかインドまで飛べるはずがないということ。マイトレーヤ正悟師が行っていらっしやるとは思っていなかったこと。そして、本当に変化身で見ているなら、尊師と一緒にインドに行っている師の方やサマナが連なっていないわけではないということでした。

数日後、尊師ご一行が帰ってこられ、インドでの模様をビデオで見せてくださいました。すると、なんと自分がヴィジョンで見たのと全く同じ場面が出てきたのです。そして、わたしが師の方やサマナを見なかったわけもわかりました。そのとき、尊師・正大師・正悟師方と、師・サマナは十メートルくらい離れて行動していたのです。マイトレーヤ正悟師もいらっしやるたのはいうまでもありません。やはり、わたしは変化身でインドまで飛んでいたのです。

もう一つ、実証可能な変化身の体験をお話ししましょう。

クンダリニー・ヨーガを成就してしばらく経ち、短期間の集中的な修行をしていたときのことです。そのときも、瞑想中に尊師を強く意識して変化身を飛ばすと、飛行機の中に座っていらっしやる尊師の前に出てしまいました。あわてて肉体に戻ったのですが、そのヴィジョンが

気になり、もう一度尊師を思念して変化身を飛ばしてみると、やっぱり飛行機の中に座っていらっしゃる尊師の前に出てしまいます。

ちょうどそのころ、尊師はロシアに行っていらっしゃるのは知っていたのですが、いつ帰って来られるのかは知らなかったのです、もしかしたら、わたしが変化身を飛ばしたのは、ちょうど帰りの飛行機に乗っていらっしゃるときだったのかもしれないと思い、修行が終わってから確認してみますと、その日は、尊師がロシアから帰って来られる日で、わたしがこの変化身の体験をしたときも、尊師が飛行機に乗っておられる時間帯だったのです。

---

◎天耳通

---



天耳界の神々が示唆する未来

聖者ソナー―思念不変連続師

わたしは、天耳通で近未来を予知することがよくあります。それは、次のワークの内容を、修行中に天耳通で知り、“まさか”と思っていると一日も経たないうちに現実となってしまうのです。

例えば、マイトレーヤ正悟師のシャクティーパーット・ツアーのお付きになったときは、究竟の瞑想中、天界の明るいメロデーとともに歌が聞こえてきました。その内容は、今度のお付



きはアメリカよ”というのもので、おまけにマイトレーヤ正悟師のお名前まで言っていました。これまでシヤクティーパット・ツアーでアメリカまで行った正悟師はいらっしゃらないので半信半疑でしたが、二時間後には「マイトレーヤ正悟師のシヤクティーパット・ツアーのお付きをするように」との指示があり、それが現実のものとなりました。もちろん、そのときのシヤクティーパットはアメリカでも行なわれたことはいまでもありません。

また、遠くで話された尊師の声を聞いたこともあります。極厳修行中に意識が覚醒状態となり、二十四時間不眠不休で修行に集中していたときのことです。

耳元で、尊師の「今までにないいい状態だ」という声を聞きました。もちろん、そのとき道場には尊師はいらっしゃいませんでした。

後日、ある人から「尊師が、『今までにないいい状態だ』とおっしゃっていましたよ」と教えてもらったときにはびっくりしました。



## 耳の奥底から聞こえる声

聖者タントラデユパ到達光正師

オウム真理教に入信して修行を始めてすぐに、わたしは耳の奥底に軽快な音楽が聞こえていることに気づきました。それは、いつでもどこでも聞こえているのです。これが、アストラル界の音楽であることは、麻原尊師が作曲されたアストラル音楽の中の「アストラルへの旅」とそっくりだということでもわかりました。修行が進むにつれてその音楽はだんだん大きくなっていきましたが、非常に心が軽くなる音楽なので、どんなに大きくなっても、単なる耳鳴りと違って耳ざわりな感じは全く受けません。このアストラルの音楽が聞こえるというのは、わたしが修行を始めてから常に体験しているものです。

この天耳通で、実際に意味のある言葉を聞いたのは、わたしが出家していわゆる「魔境」に陥っているときでした。「もうやめよう、これ以上出家生活を続けていても意味がない」という考えが日々わたしをさいなみました。そんな心の状態でしたから、法友の言葉にぶつかって

はいらだち、できることといえばフテ寝をすることくらいでした。

その日も、ワーク上のことをきっかけにして法友とぶつかり、「もう、寝てしまえー」と、机にうつ伏せたそのときです。いきなり耳元で「こらー!」という男の人の大きな声が聞こえました。「あー!」と思わずぱっと顔を上げて辺りを見回しましたが、だれもいません。わたしは、導師は常に弟子を見ているのだという話を思い出し、この声はきっと放逸になっている弟子を導師が叱詫してくれたのだと思つて納得したのです。

わたしがクンダリニー・ヨーガの修行に入っているとときのことです。瞑想中、道場の下の事務室で、あるサマナが電話でおしゃべりしているのが聞こえてきました。内容は他愛ない噂話でしたが、何を言っているかはつきりと聞こえてきます。そして、オーケストラが演奏する荘厳なクラシックのような音楽が上の方から降つてきて瞑想が終わりました。

また、その極厳修行も進んできたある日のことです。瞑想をしていると、わたしの前に三人の男性がやって来た気配がしました。その人たちの姿ははっきりしないのですが、彼らが話している声はよく聞こえました。その人たちはわたしを取り囲んで、

「エネルギーがここで詰まっている」

「どれどれ」

「これを通さないとな」

と、あれこれわたしの状態を見て相談し合っているのです。

そして、わたしの問題の部分を何やらいじくって去っていききました。その後、彼らが指摘した部分が非常に痛み、蓮華座を組むこともできなくなったのですが、痛みはカルマが落ちていくことです。修行は進んだということです。痛みの部分が彼らが指摘したところだったので、耐えることができました。

---

## ◎他心通

---



### ヴィジョンで知った人の心

ウツタマー師

あるとき夢に、尊師のご家族に非常に近いサマナ（出家修行者）が出てきました。その夢の中でもそのサマナは尊師の家で働いていました。しかしこの夢の中で、彼女は何と、すきをねらって尊師を毒殺しようとしていたのです。それは尊師のお食事になんか毒を入れて、わからないように自然に殺してしまおうというものでした。

その夢の中では、尊師はどこか外国の要人のようで、時も現在ではないようでしたので、わ

たしはこれは前生夢かもしれないと思いました。そこで尊師にお会いしたときに聞いてみました。すると意外にも尊師は「それは今彼女をたたいているからだよ」とおっしゃいました。たたくというのは、弟子を意図的に苦しい状況に追い込むことによって、そのカルマを落としてあげるということです。彼女は修行があまり好きではなかったので、尊師はたたくことによって、彼女のカルマを落とす、修行がしやすくなるようにしてあげていたので。

しかし、尊師の厳しいカルマ落としにあっては彼女の心は穏やかではなく、尊師に対する反発の気持ちがあったのでしよう。それがわたしの夢に尊師を毒殺するという形で現れたのです。ですから、これは前生夢ではなく、他心通でした。もちろんわたしは、尊師が彼女にそのようなカルマ落としをなさっていることは、全然知りませんでした。

さて、この夢の中でわたしは何をしていたのかと尊師に聞かれて、

「わたしは、彼女が尊師を毒殺しようとしていたのを何とか防ごうとしていました。」

とお話したところ、尊師は何もおっしゃいませんでした。そこでわたしは、これは少々かっこ良すぎたな、きつとわたし自身の願望が入っていたから、あんなにかっこいい役として夢に現われたのだなと思いました。自分の主観が入ると、物事をありのままに見ることができなくなります。わたしの他心通は、自分をかっこよく見せたいという気持ちによって、半分ゆがめ

られていたようです。



## 色で知る人の心

聖者メッター・アヴィヒンサー化身成就正師

他の人の心を把握して認識し理解する神通力、他心通。看護婦という仕事から、ずっと身につけたいと願っていた神通力でした。そして、オウム真理教の修行を始めると、間もなくこの力の初期の段階である、相手の心に自分の心が感応する形で相手の心を知る力がつき始めました。また、感応しなくても相手の発するヴァイブレーションを察知するということが頻繁に起こるようになりました。

例えば、ある患者さんと接する際、顔ではにこにこしてとても楽しそうなのですが、話しているうちにとても寂しく重たい心のヴァイブレーションが伝わってきて、その人が病についてかなり悩みを募らせていることをキャッチできたり、また、病室に入った瞬間、悲しいヴァイブレーションを感じ、話さずとも相手の心が把握できたり、患者の痛い部分と同じ部分が痛んだりというように他心通が現われ出したのです。



その後、出家し、極厳修行を経てクンダリニー・ヨーガを成就し、確実なサマディに入れるようになってからは、この他心通が本格的に現われるようになったのです。つまり、相手の心の変化の状態を瞬間的に察知するだけではなく、視覚的に相手の心の変化を、その人の発している色や光の変化でキャッチできるといふ体験が始まったのです。

ある日、一般の方に入信案内をさせていただいたときのことです。その男性と話し始めたときは、わたしの話に耳を傾けはするが、口調においてもヴァイブレーションにおいても否定的で、嫌悪の心すら伝わってくるような状態でしたが、真理の話をも具体的に話し続けていくうちにその人の体の一部分からピカッ、ピカッと白光が始めたのです。（あ、興味を示し出した）と察知したわたしは、この方が、修行の道に入り、本当の幸福・自由・歓喜を得ることができるようにと強くグルを観想し集中し話をしました。すると、相手の口調がだんだん柔らかくなり、突然アナハタ・チャクラに濃いブルーの光が宿ったのです。そして、相手から信仰心が芽生えたことと修行がしたいという心が伝わってきたのです。

そのため、わたしは入信していただくことと申し込み用紙を差し出しました。ところが相手は、全く書こうとせず、

「いえ、わたしはやりません。」

と言うばかり。わたしはおかしいなあと思い、その人の心に集中したところ、今までずっと否定的な自分を見せてきたため、「やります」という心の変化をわたしに見せるのが恥ずかしくて書けないというのが伝わってきました。

わたしは、彼に、

「わかりました。恥ずかしくて書けないようなので部屋から出ていきます。本当は入信したくてたまらない様子なので……。」

と言うと、彼は、

「どうしてわかるんだ？」  
と苦笑い。

このように、また一人、真理の流れに入ることができました。他心通がなければ無理だったかもしれません。

---

## ◎テレパシー

---



### 人の心を正確に読み取る

聖者サッカー到達光師

わたしは、もともと現実主義的志向が強く、こと神通力に関しては、あまり興味を持ったこともありませんでしたし、自分にそんな力があるなどと考えたこともありませんでした。しかし、オウム真理教に入り、出家して成就させてもらった今、本当に、わたしたちが目を開けて物を見るときのように、自然にそのような力がわたしについていたのには、びっくりしています。

あるとき、わたしは尊師のお嬢さんのカーリーさん（娘さんのホーリー・ネーム）と、ある信徒さんについて話していました。と、突然、カーリーさんは、

「今話していた信徒さん、男の子か女の子かわかる？」

と質問されました。そう言われて、わたしはなぜかその話をしてるとき、男の子を頭の中に思い浮かべていたことに気がつきました。しかし、彼女に質問された後、だんだん女の子かもしれないなあという思いがわいてきたのです。そこで、

「最初は男の子だと思っていたんだけど、だんだん女の子のように思えてきたな。」と答えたら、カーリーさんは言われました。

「それは当たり前よ。その信徒さんは男の子だったんだけど、わたし、あなたに質問した後、当たらないように、女の子、女の子って念じたんだもん。」

わたしは、この話を聞いて、わたしの中にも人の心をかなり正確に読み取る力が、自分でも意識していない間についていたこと、そして、尊師のお子さんが、そのような力を当たり前のように使っていることにびっくりしたものでした。



## 心の中の言葉が聞こえる

聖者ソーマー化身成就師

わたしは、他の人が心の中で思っていることが言葉として聞こえることがあります。

わたしが眠っている隣の部屋で、J師が海外に行く準備をしていたことです。わたしは寝ながらJ師が準備していることを認識していました。しばらくすると、

「よし！ 準備ができた。」

という声が聞こえたので、パッと目を覚まして、

「いってらっしゃい！ 気をつけて。」

と言いました。すると、J師は、まさに出かけようとしている瞬間で、

「なんでわかったの？」

とびっくりしていました。もちろん、J師は、一言も声を発してはいなかったとのこと。

また、ワーク中のミーティングのとき、資料としてみんなが見たビデオの内容について話し

ていたときのことで。V師はそのビデオを見ていなかったはずなのに、内容を知っていたので、一人が、

「どうして知っているんですか？」

と聞きました。そのとき、わたしはV師が、

「映像編成部で見てきたんだ。」

と言ったように感じたので、

「映像編成部で見てきたんですって。」

と言いました。すると、V師は、

「なんで知っているの？」

と驚いて言うのです。わたしは、さっきのははっきりV師の声だと思ってたので、周りのみんなに、

「今、V師が自分で『映像編成部を見た』って言いましたよね。」

と聞いてみました。しかし、だれもそれを聞いた人はいませんでした。V師の声は、わたしにしか聞こえなかったのです。

---

◎  
死生智

---



恐怖の動物転生

聖者ツツキタ上流師

クンダリニー・ヨーガの成就に向けて修行を始めて間もないころのことである。究竟の瞑想中に目の前に暗い緑色の光が見えた。その光に集中すると、暗い洞窟のようなものが見え始めた。その内部も暗い緑色の光で満たされており、よく見ると、うじ虫のようなものが無数にうごめいている。

見ているだけで大変な不快感と恐怖があったが、それにはおかまいなしに、いつしか意識が

そのヴィジョンの中にジワジワと引きずり込まれていった。嫌だ嫌だと思う気持ちとは裏腹に、完全に中に引き込まれたと思った瞬間、わたしはそのうじ虫のようなものに生まれ変わってしまった。そして、その虫のぶよぶよとした妙な感覚を味わったとき、意識は現実の肉体に戻っていた。

尊師は、常日ごろ、動物界への転生は緑色のバルドーと恐怖感を伴うと説かれているが、その言葉どおりの体験であった。そして、わたしはそのとき自分が死んだら間違いなく動物に生まれ変わることを証智したのである。





## 光がいざなう来世

聖者ティンジン・サンポ化身成就師

死生智を確かなものにするには、瞑想修行は欠かせないと思います。わたしも、日々瞑想をすることによって、たくさんの世界を体験し、それによって、その世界へ転生する条件を理解することができました。

まず、瞑想を始めると、アストラル世界で鳴り響いているナーダ音が聞こえてきます。その音に意識を集中していると、粒子のような光がたくさん見えてくるので、心をそこに固定します。すると、その光が大きくなってこちらに迫ってきて、意識がそのままゆい光に飛び込みます。その後、意識は真つ暗なトンネルをくぐっていくのですが、この真つ黒いトンネルこそ、死後の中間状態なのです。慣れないうちは、このトンネルを通っている間、粗雑な次元から微細な次元へ移行するというところで、かなり抵抗がありました。瞑想に熟達した今では、すんなりと移行することができるようになりました。

さて、トンネルを通っているときには、様々な光が見えます。その中の一つの光に意識を集中すると、光の中にあるヴィジョンが近づいてきて、気がついたときには、そのヴィジョンの中に新しい身体をまとって生まれ変わっているのです。

例えば、白い光に飛び込んだときは天界の住人として、青い光に飛び込んだときは人間として転生するとか、同じ色の光でも明るい光とどんよりとした光では、転生する世界は同じでも、全く違った条件で生を受けるといったような経験を数限りなくしました。その結果、このバルドーの体験が、導師の説かれている法則そのものだと納得することができたのです。

そして、自分の来世だけではなく、他の人が発しているバルドーの光の色によって、その人の来世を知ることができるようになりました。

例えば、楽しみだけを追い求めている人は、動物への転生を示す緑色の光を発していますし、貪りが強く、「これは俺が働いて得たものだから、全部俺のものだ」というような考えを持っている人は、低級霊域の色である黄色い光を発しています。また、徳のない人は光の色が弱く、徳のある人は輝く光を発しています。

このように、バルドーは転生するときだけでなく、その人が今現在どんな意識状態にあるか、今死んだらどんな転生をするかを表わしているのです。ただ、バルドーは不変のものではありません。

ません。修行によって変えることができるのです。

例えばこんなこともありました。その方に初めて会ったとき、緑色と黄色の光が見えました。その方は、貪りが原因であるガンを患っていたのですが、オウム真理教で様々なイニシエーションを受け、貪りを捨断する布施の実践をしたところ、ガンが壊死し始めたのです。そして、黄色のバルドーの光は消え、青い光を発するようになったのです。つまり、その方は低級靈域のカルマを切り、一つ高い世界の人間界のバルドーを持つようになったのです。

●

**第2部 サマデイがもたらす神秘の力**

●



## 新たなる心の旅立ち

聖者マハー・ケイマ最上善逝

この日もわたしは、瞑想修行中に肉体からアストラル・ボディー（幽体）が抜け出して、異次元の世界を経験（アストラル・トリップ）していました。

その後、ゴーストという音とともに、ものすごくまぶしい黄金色の太陽に吸い込まれるかのようにして光の渦に飛び込み、いまだかつて経験したことがないショックとともにその光の壁を突き破ったのです。そのとき、自分自身が光り輝く意識体であることに初めて気づきました。その空間は、まばゆいばかりの光に満ちており、至福感に満たされていました。

本当の自由、幸福というものは、すべての人間一人一人の中に内在しており、真実の自分（真我）に気づくことによって、他に何も求めなくとも、それだけですべてが満たされた状態に至れるのだ、ということをおわたしは確信しました。

それは、新たなる心の旅立ちを意味していました。

一九八七年六月二十八日。まだ肌寒い、神奈川県丹沢の山奥にある修行場で、わたしは極厳修行の十日目を迎えていました。

俗世間の喧噪から離れ、終日特殊な瞑想修行に没頭する、文字どおりの極厳修行です。わたしの修行場は、光をすべて遮断した真つ暗闇の一室で、一筋の光も射し込む隙を与えていませんでした。

このような環境の中、わたしは瞑想修行を続け、ヨーガのステージというと第二段階である、クンダリーニー・ヨーガの成就をさせていたのです。それはわたしが、偉大なるグル（導師）であられる麻原彰晃導師のもとで修行を始めてから、三年ほど経ったときのことでした。それでは、まずそのときの最後の手記をご紹介します。

\*

◎六月二十八日（日）

ツァンダリーのプラナーナヤマの途中、大きな変化があった。一息する度に気が上昇するとイメージすると、黄金色の光が眼前、そして頭上に現われるのだ。一昨日から現われ始め、昨日その光はだいぶ強くなったのだが、今日の光はその比ではない。それに伴い、その光が現われている間中、全身に快感が走る。そして、光が強まれば強まるほど快感状態は長くなり、

頭頂から腕、足、指先に至るまでが強烈にしびれるようになっていく。

ふっと、その光に意識を集中していたら、意識が途切れた。数秒後、意識は戻っていたのだが、自分がどこに行っていたのかすぐにはわからなかった。身体は前を向いていたのだが、横向き（右）になっており、細かく振動していた。

いったいわたしはどこに行っていたのか。このショックはわたしがいつもアストラル界へ飛んでいくときのものは全く違っていた（アストラル・トリップするときは、こんなにも強い光は射さない。そう、白く鈍い光の中にすっと入ってしまった、軽い震動とともに大した違和感もなく、身体に戻ってくるのである。そして、その間の記憶が、身体に戻った後、脳裏に焼きついており、ああ、わたしはどこどこへ行っただけかという行動をしてきたのだな、ということを感じることができるのだ）。

そして肉体を抜け出すときのショック、戻ってくるときのショックは、いまだかつて、わたしが経験したことのないものであった。いかなれば、黄金色の光に吸い込まれたというべきであろうか。光に向かって飛んでいったというべきであろうか。

ゴーツという音とともに、光の渦の中に入っており、そしてそこは、楕円形に回転していた。わたしの印象としては、光の渦というよりも、想念の渦という感じが残っている。言葉では説

明できないのだが、ありとあらゆる想念（想い）が回転している光の世界というのが、一番近いと思う。そして、その中にわたしは吸い込まれて失神してしまった。次に気がついたとき、わたしは肉体に戻っていた。

しばし、ボーゼンとしていた。自分の今の体験をわたしは理解できなかったのだ。

気を取り直して、再び修行を開始した。だが、この前述の体験が心の中の引っかかりとなつたようで、光がなかなか見えてこない。初めての体験に対する、わたしの潜在的な恐怖心が原因したようだ。

そこで、わたしは努めて身体の力を抜いた。気をつけてみると、やはり肩は張っていて、緊張していたのだ。できるだけリラックスして、何回か行なっていると、だんだん光が戻ってきた。そして、意識があるのと、ないのとの中間状態（これも言葉では説明できないが）に入るようになった。

そのときも、黄金色の光が頭上にあり、クンダリニーが上昇し、全身が光の身体になったような感覚になり、思考が停止する。そしてまたゆっくりと思考が働き始めて、体のしびれが解けていく。意識の中間状態は、こんなプロセスで入って醒めていく。

何回、いや何十回か、わたしはこの状態に入った。



そして、この後、前述の失神状態、光に飛び込んだ状態も二度体験した。三度とも同じプロセスである。

尊師がいらっしやった。

「今日必ず解脱するぞ。」

とおっしゃった。そして、最後のイニシエーションを与えてくださった。強烈なエネルギーだ。頭に気が集まっている。

修行を開始する。

快感が走る。震動する。しびれる。そして、太陽の光のようにまぶしく、ものすごく強い、明るい黄金色の光が頭上から眼前にかけて昇った。

金色の光が、雨のように降り注いでいる。その光の中で、わたしは至福感に浸っていた。

この太陽は、その後何回も昇り、そして最後に黄金色の渦が下降し、わたしの身体を取り巻いた。

このとき、わたしは光の中に存在していた。いや、真実のわたしは光そのものだったのだ。その空間の中に、ただ一人わたしはいた。ただ一人だが、すべてを含んでいた。真の幸福、真

の自由はわたしの中にあることを悟った。

そのとき、わたしは光だった……

\*

この体験の後は、至福感に満ちた素晴らしい空間に行こう、安住しようと思えばいつでも行くことができるようになりました。それは、光の壁を突き破ったことによって、その世界への筋道ができたからでしょう。この状態をヨーガの言葉では「サマディ」といいます。

サマディの状態に入ると、肉体的には呼吸が停止し、心もピタッと静止します。そして、全く苦というものが存在しない世界を経験するのです。これがクンダリニー・ヨーガの成就なのです。

また、クンダリニー・ヨーガの成就では、六神通という次の六つの超能力が芽生えます。

神足通——空中に浮く力

天耳通——普通人の聞き取れない音を聞く力

他心通——相手の心を読み取る力

宿命通——自分や相手の前世を見る力

死生智——転生先を知ったり、生きながらにしているいろいろな世界とつながる力

漏尽通——相手の煩惱を見極める力

このような六つの超能力の存在についてはわたしの師事している麻原尊師や、仏教の開祖であられるサキャ神賢（お釈迦様）も同じように提唱されています。わたし自身も修行の過程で、この六つの超能力を体得しました。しかし、まだ完璧なものではないので、クンダリニー・ヨーガの成就是六神通の芽生えである、つまりスタートである、といえるのではないかと思います。反してわたしのグルであられる麻原尊師は六つの超能力をすべて完璧に持っていらっしやいます。わたしを含めて尊師の弟子たちは、しばしば尊師の超能力を目の当たりにしているのです（尊師の超能力について興味のある方は、オウム出版『超越神力』シリーズをご覧ください）。

それは、尊師が十三年間に及ぶ死と隣り合わせの修行の結果、すべてのヨーガを成就して、世界でただ一人の最終解脱者となられたからです。

わたしにとつては前述の光の体験は、筆舌に尽くし難い強烈な素晴らしいものでしたが、それでもクンダリニー・ヨーガの成就というのは、たかだかヨーガのステージの第二段階にすぎません。本当はこの上に数え切れないくらいたくさんステージがあって、上に行けば行くほ

ど多くの力や能力に目覚め、素晴らしい歓喜を得ることができのです。

数年前までは保険会社のＯＬで現世的な生活をし、神秘体験などほとんどなかったわたしを真理の世界に導いてくださったのは麻原尊師です。わたしのような例は、本物の力のある指導者について教えを学び修行の実践をすれば、どのような人でも様々な能力を得て、真の自由、幸福、歓喜の状態に至れるということの証明ではないでしょうか。またわたしばかりではありません。尊師の八百人の弟子や数千人の信徒の中の多くの者も皆、いろいろな素晴らしい体験をしています（ヨーガのステージについて、またはいろいろな方の体験談について詳しく知りたい方は、オウム出版、麻原彰晃著『マハーヤーナ・ストラ』『生死を超える』『イニシエーション』を参照してください）。

瞑想中の体験はわたしたちに、わたしたちが生きている世界はこの世（人間界）だけではないことを実体験として教えてくれます。なぜならば、修行が進んでくると、瞑想中に肉体から魂が抜け出し異次元の世界へ飛び、様々な体験をするからです。

普通の人間は、異次元の世界など見えないし聞こえない、まして肉体から魂が抜け出すこともないので、この世（人間界）以外の世界について知らず、存在しないと思っている人もいる

でしよう。しかし、どんな人でも正しい修行をすることによって高次元の世界とのパイプが広がり、物質を根本とした三次元世界以上の空間へ行くことができるのです。

そしてその様々な体験は、夢でも幻覚でもなく、わたしたちが現実生活を営むのと全く同じ、いやそれ以上に鮮明に現実のものとして感じることができます。例えば、アストラル世界（異次元の世界の一つの空間の名称）を飛翔しているときに、そこで人と握手したとしましょう。意識が肉体に戻ってきてからも、手にその感触がくつきりと残っているのです。手の暖かさ、ぬくもりなどはあたかもたった今経験したかのようです。またその世界で人と話をする、相手の顔立ちや表情、肌の色、髪形、服の色、形までしっかりと覚えていられるのです。

この点が、マリファナや麻薬などの幻覚剤による体験との大きな違いです。幻覚剤を使うと、一時的には頭が冴えたり異常な幻覚を見たりするそうですが、その後はボーッととして物忘れが激しくなったり、記憶力が極端に低下したりするということです。ですから、瞑想による体験とは正反対です。そして、瞑想の場合は醒めた後も頭はスッキリとし、直感力や記憶力が冴えわたるのです。

（初出「マハーヤーナ」NO22・八九年六月刊）



## 神秘の世界から音が聞こえる！

— 聖者ヤソーダラー最上善逝

集中的な瞑想修行を終えたとき、尊師に呼ばれ、

「揺れているサマナがいるから、行って面談してくるようには」と言われました。

一瞬、わたしはたじろいでしまいました。これは大変なことです。せっかくこれまでの瞑想で培った安定が、一日も経ずして崩れ去ってしまったのか——わたしは危惧を抱きました。それと同時に、自己を犠牲とすることを厭わず救済活動をお続けになる尊師の足元にも及ばない自分が情けなくなり、また、大乘の道程の長さを思い知ったのでした。

わたしがこのとき面談を怖がったのは、シークレット・ヨーガによって受けるカルマのために、いつも苦しんでいたからです（当時、まだシャクティーパーットの経験はありませんでした）。シークレット・ヨーガは、個別に信徒さんのザンゲや相談を受けたり、行法を伝授したりす

るシステムですので、サマナとの面談も、信徒とサマナの違いこそあれ、シークレット・ヨーガと全く同じだといえるのです。

わたしがどれだけシークレット・ヨーガでカルマを受けるかというところ、例えば、あるときのシークレット・ヨーガでは、なんと声を失ってしまったほどなのです。その後一カ月にもわたって……。それは、あまりにも突然でした。一つの言葉を言い終わらないうちに、途中でプツンと声が出なくなってしまうのです。別に喉に異常が見られたわけでもありません。ただ、ただ、声が出ないのです。もともと口のカルマを内在しているわたしのヴィシユッタ・チャクラが、信徒さんのカルマにもろに反応してしまったに違いありません。

これは十分に考えられることなのです。何しろ、わたしの場合とは逆に、「口のカルマをザンゲしているうちに、声が出るようになってきました。」

という信徒さんがいらっしやるくらいですから。カルマが宙に消えてなくなるなんてことはないので、いうまでもなくこちらに移ってきているのです。

声が出なくなったことよって、こんなことがありました。それこそ、泣きっ面に蜂、そして、オウム流に言えば、良いカルマ落としてです。

編集や広報のワークをしていた関係で、オウムのデザイン部に行ったとき、ちょうど電話の

ベルが鳴りました。周りを見回しても、折り悪しくだれもいません。やむなく、わたしは受話器を取りました。聞こえてきたのは、よく知っているB師の声です。おそらく、この電話が長い間話し中だったのでしょう。

「駄目じゃないか、電話をふさぎっぱなしじゃー！」

身に覚えがないのに、いきなり怒られてしまいました。一生懸命、

「ヤソーダラーです。」

ということだけでも伝えようとしたのですが、悲しいかな、絞り出すような“音”が出るだけで、全くわかってもらえません。何日か経って顔を合わせたとき、彼は言ったものです。

「あのカスカス声、ヤソーダラー正大師だったんですって？」

と。——どれほどわたしが人のカルマを吸収しやすくなっているか、そして、どれほどそれによって苦しんでいたか、この例だけでもおわかりいただけたのではないかと思います。

さて、その日は結局、「行ってこい」という尊師のご指示に（素直に）従って、五人のサマナと話しました。みんな還俗を考えているくらい現世への執着の強い人たちでした。

帰ってから、その報告のために尊師の瞑想室に入った途端、果たして、

「何だ、エネルギーが真っ黒になってしまったじゃないか！」



との声が飛んできました。とても報告どころではありません。

「すぐに究竟の瞑想に入れ。そして、どこから漏れて、どこからカルマを受けたか考えてみる！」と、あっけなく瞑想室から出されてしまいました。

(困ったなあ。)

わたしには、瞑想したってそんなことわからないように思えました。それでも、尊師はどういう答えを出したのかお聞きになることでしよう。仕方ないので、とりあえず瞑想に入ってみました。

数十分後、意識が肉体に戻りかけたときのことです。どこからともなく、不思議な声が聞こえてきました。その声は、はっきりと、

「喉から漏れて、マニプーラから低いカルマが入って積もり重なった。」

と言ったのです。わたしはびっくりして目を開きました。意識は鮮明になり、エネルギーは回復していました。すっきりとした気分です。

(今の声は何だったんだらう。尊師の出された課題の答えだったんだらうか？ それは正しいのだからか?)

早速、尊師の所へ行ってみると、

「どうした？ 瞑想していたんじゃないのか？」

と言われましたが、すぐに、

「エネルギーがすっかり回復しているじゃないか。」

と、エネルギー状態の変化に気づかれました。

わたしは、究竟の瞑想で短時間に回復したこと、そして不思議な声のことを話しました。すると、

「そうだ、喉から漏れるんだ！ だからこそ、少ない言葉で、いかに相手に影響を与えるかが大切になってくるんだよ。」

と、よくやった、というような声の調子で言ってくださったのでした。また、マニプラー・チャクラ（へそに位置する霊的センター）でカルマを受けたという方も、まさにそのとおりだったのです。

「ヤソウダラーはシヴァ大神の祝福を受けているから、教えてくれたのはシヴァ大神だったんじゃないかな。」

という尊師のお言葉に、本当にシヴァ大神だったらうれしい、と思ったものでした。

その後、この不思議な声のアドバイスを、わたしは忘れることはありませんでした。このこ

とに気をつけることによって、わたしは自分の状態をキープしやすくなりました。確かに言葉が多ければ多いほど、時間が長ければ長いほど、エネルギー状態は悪くなり、判断力も鈍ってきてしまいます。これでは決して相手のためにもなりません。

——やはり、瞑想すればするだけステージは上がってゆくものなのですね。このように天耳界において適切なアドバイスを受けることができたのは良い経験でした。

さて、この天耳界というのは、アストラル世界の一つなのですが、原始仏典においては次のように記されています。

「このように、向煩惱滅尽多学男が四つの如意の基礎を修習し、真面目に行なうならば、清浄であつて人間を超越した天耳界において、神々や人々、あるいは遠くや近くの双方の音声を聞くのである。」

〔南伝大蔵経〕より  
と。

お読みになっておわかりのように、この神通力を得るための修行法が四つの如意の基礎であると書かれているわけですが、四つの如意の基礎とは

・ 決意如意の基礎

- ・ 精進如意の基礎
- ・ 思念如意の基礎
- ・ 観慧如意の基礎

という四つのことであり、「修行するぞ。正しい瞑想ができるように頑張るぞ」という、修行に対する強い欲求を固めるところから、本格的な瞑想修行までの四つの修行のプロセスを表わしているのです。…(略)…結局のところ、瞑想が神通力の源なのです。

わたしは、以前導師に瞑想の状態を聞かれたとき、

「今日は雑念が多かったみたいです。瞑想中、(周囲が静かであったにもかかわらず)いろいろな声が聞こえてきました。」

と答え、

「何もわからないで勝手な解釈をするんじゃない!」

と怒鳴られたことがあったのですが、このころから瞑想中に天耳界へと入ることができるようになったのかもしれない。それまでもレベルの低い天耳通はあったのですが……。

このレベルの低い天耳通とは、例えばナーダ音を聞くということが挙げられます。最初は——これは修行に入る前だったのですが——右耳からだけ突然、パイプオルガンのような(かといっ

てそれとも違う) 音色の、単調なメロディーが聞こえてきてびっくりしたものです。そのメロディーは、しばらくの間、繰り返し繰り返し聞こえていて、「この美しいメロディーを譜面に写せたら、どんなにステキでしょう。」と、はがゆく思いながらも、その素養がなく、どうすることもできません。そうするうちに、いつしかそのメロディーはいずれもなく消えてゆき、もうどこにもその痕跡をとどめてはおりませんでした。何となく、感傷的な出来事でした。

このアストラル音楽についていえば、クンダリニー・ヨーガ成就のためのリトリート中に、集中的にいろいろなものを聞くことができました。わたしはてっきり音楽班(現在のAEI)がずっと演奏し続けているのだと一人思い込んでしまっていたほどでした。

同じく、このリトリート中、長女のドウルガーと次女のカーリーのやり取りが、すぐ耳元で聞こえたことがあります。消しゴムがどうのこうの、という内容でしたが、当時書斎で受験勉強をしていたという二人の会話が、天耳界を通じて伝わってきたのでしょう。

あまり良い体験とは言えないものもいくつかあります。

例えば、疲れ切って、ちょうどシャヴァアーサナをとって休んでいるとき、頭の方で急に三人の男がガヤガヤとうるさいくらいに大きな声でしゃべり始めました。その部屋にはわたし一人しかいなかったので(アストラルの住人かな?) と思いながら、体を起こして見てみました。

が、姿は見えません。相変わらず声だけが聞こえるのです。男たちは、

「麻原は——。」

と呼び捨てにして尊師の悪口を言っています。嫌な予感がしました。その頃、まだオウム・バツシングは始まっていませんでしたが、今思えば、その現象化を暗示するものであったのかもしれない。

わたしが完全に起き上がって床に座ると、男達の話し声はわたしの身体を大きくグルリと右回りに回って消えてゆきました。

あるときは、ものすごい恐怖感とともに金縛りに遭い、必死にその状態から脱却しようともがいていました。いや、もがこうとして、わずかに指先が動くという程度だったのです。そのとき、右耳から、

「怖いよう〜。」

という、か細い、半分泣き声になっているような子供の声が聞こえてきたのでした。

(地獄からの声だ。)

わたしは思わずぞっとしてしまいました。下位アストラルとつながってしまったのでしょうか。

この原稿をここまで書いたところで横になつたら、また右耳からアストラル音楽が聞こえてきました。

(あれ、音程が狂ってる。)

導師は、階段のように何千何万というナーダ音があり、その上に天耳界があると『原始仏典講義』に書かれています。今日のわたしは低いナーダ音の世界とつながってしまったのかもしれない。心の状態のせい？——気をつけなければ！

天耳通を意識していたせいかしら？ 付け加えるなら、その翌日にも面白い体験がありました。

例の人工トウモの修行を三時間もやった後のこと。浄化のための頭痛で起き上がることできない状態になっていました。やり残しの仕事があり、時間ばかり気にかかります。

そんなところへノックの音。そして、次女のカーリーの声が聞こえます。

「トントントン（と声を出しています）……六時ですよ。」

「はいはい、わかりました。起きますよ。」

わたしは部屋の中から答えました。

(なぜ時間をわざわざ教えてくれたのかしら? 頼んでもいないのに。)と不審に思いながらも横になったままのわたし。七時になってやっと起き上がることができました。

後でカーリーに、

「どうして六時だって教えに来てくれたの?」  
と聞いたら、

「え、何のこと? カーリーそんなことしてないよ。」

と言うのです。しかし、あのときは確かに六時。時間は正確です。

だとしたら、天耳界のだからカーリーの声と口調をまねて? その可能性の方が高いと思います。なぜって、その後、途中の通路は鍵がかかったままで、だれも通っていないということがわかったのですから。

皆さん、イニシエーションで伝授された正しい瞑想によって、精神的ステージを向上させるとともに、いろいろな神通を体験してみてくださいね。それではまた――。

(初出「転換人生」・九一年二月刊)





## 不思議の国へ

聖者マイトレーヤ最上善逝

平々凡々な日常生活に飽き、何か新鮮なものが欲しいとき、あなたはどうかされますか。映画館に行つてスクリーンに展開される別世界に見入る、それとも恋人と遊園地のおとぎ話の国に行く、それとも思い切つて、どこか遠くへ旅に出る……。

では、わたしはどうかというと、出家修行者ですから、そのようなことは全くありません。こういうと、それはずいぶんつまらない生活だなと思われるかもしれませんが、実は修行を始める前よりずっと新鮮な毎日を送っているのです。

というのは、わたしはアストラル世界という、映画館や遊園地、そして現実の世界のどんな旅行よりも、刺激的な世界へ行くことができるからです。

アストラル世界というのは、平たくいえば、異次元の世界のことですが、それは微細な物質でできた広大な世界です。そして、だれでも正しい修行によって、アストラル・ボディとい

うもう一つの身体をつくれれば、そこへ行くことができるようになります。

アストラル世界に入っても、あなたには、視覚・聴覚等の五感が普通の世界と同じように備わっています。

そして、その世界の一部ではあなたはまるでスーパーマンのような力を持っています。

わたしは、約四年前、オウム真理教で集中的な修行を始めましたが、始めてから一カ月ほどすると、たくさんのアストラル世界を体験しました。

ある日の修行で行ったアストラル世界では、人々は皆、超能力者でした。野球のボールくらいの球が、フワフワと浮いていて、それを念力で自由自在に動かして遊んでいます。

どこかに行きたいと思うと、バツと行きたい場所に体がテレポーテーションし、その度、周りの景色がいっぺんに変わっていきます。

そして、普通の世界に戻ろうとすると、すぐに戻ることができ、そこには修行しているわたしがいます。それから、アストラル世界に戻りたいと思うと、元の世界がバツと現われ、普通の世界とアストラル世界を自由自在に行き来できるのです。

テレポーテーションだけでなく、ものすごいスピードで、地上から数メートルのところを滑走したり、山々のはるか上を飛んでいたり、硬いはずの壁を自由に通り抜けたり、友達に自分

の飛んでいるところを見せて回ったり……。まさに神々になったかのような気分でした。

アストラル世界に行くときは、先ほどお話ししましたように、アストラル・ボディィーを使います。では、どのようにアストラル・ボディィーが発進するかというと、これが少しばかりスリリングなものなのです。

調気法という修行によって、エネルギーを強めた後、シャヴァアアサナという体位をとって休息しています。すると、ビーンという音とともに、おなかの辺りにあるマニブーラ・チャクラがしびれてきます。そして、手足の感覚がなくなり、まるで意識だけが上方に飛ばされるように上昇し始めます。そして、前を見ると黒いトンネルがあり、少しの間、それを上昇していると、今度は下に下がり、そうしている間に前方に光が見えてきます。そして、その光が次第に大きくなり、ついに一つの世界の入り口が見え、そこに入るのである。

こうして、先ほど紹介した神々のような世界に入るわけですが、場合によっては映画や遊園地同様、大変怖い体験をすることもできます。

例えば、仏典の中にある地獄と同じように、暗く、人々の死体や首が転がっている世界に行ったこともありました。最も恐ろしかったことは、その世界では体が鉄のように重たいのか身動きが取れない上、上と下から挟まれてつぶされそうになったことでした。

SFのような宇宙戦争の世界もありました。とてつもなく大きい宇宙船といえいいのか、そのような物体が、宇宙空間の四方八方に漂い、その間を小型の宇宙船が飛び回っていました。わたしはその空間にゆっくりと漂いながら、不思議と冷静な気持ちでその光景に見入っていました。

アストラル・ボディーという問題があるかもしれませんが、わたしの肉体とは別のものが、肉体から離れていくところは、何も別世界だけではありません。肉体のある部屋の中にも行くことがあります。

そのときは、体からもう一つの体が離れるような感じですが、そのまま空中に漂いながら、自分自身の肉体を見たり、見慣れた部屋の中を見たりするので、大変不思議な感覚を経験します。

このように、アストラル世界は刺激的な経験でいっぱいの世界ですが、単に刺激的なだけではありません。それは普通の世界と連動しており、そのため、アストラル世界から様々な情報を得ることができなのです。例えば遠く離れた人の心や行動であっても、アストラル世界を通じて知ることができるのです。

ある日、オウム真理教の富士山総本部道場にいたわたしは、自分の部屋で瞑想をしていまし

た。しばらくして、アストラル世界に入ったのですが、その中にはわたしのよく知っている出家修行者が、現世に戻り、現世の友人と何やら話していました。

瞑想から覚めたわたしは、アストラル世界で見たことを不思議に思いました。というのは、その人は元氣に出家の修行生活に励んでいるはずだと思っていたからです。

そこで、その人のいたオウム真理教のある支部に電話を入れてみると、その人がある心の問題で揺れていて、今日にも現世に戻ろうと考えていたことがわかりました。

これは、現実の世界で起こっていたことの一步先をアストラル世界で見たという体験です。実際、本物の予言者はすべて、アストラル世界に入って、将来に起こるヴィジョンを見てくるといわれています。

もちろん、未来は現在の延長上にありますから、現在の状況が変われば、未来も変わります。悩んでいたその出家修行者については、本人の努力と周りの人の助言によって還俗しなくすみました。

それから、アストラル世界を見ている特別な視覚は、普通の人では見えない様々なエネルギーを見ることが出来ます。例えば、すべての人には、イダー・ピンガラ・スシュムナーの三つの気道を通れるエネルギーがありますし、地・水・火・風・空の五大エレメントがあります。こ

これらのエネルギーは、その人の特徴や状態を表わしており、修行が進むと、それが見えるようになってきます。すると、その人が今どのようなことで悩んでいるかとか、どのくらいの修行ステージにあるのかということがよくわかります。

オウム真理教の各支部には、修行に励み、アストラル世界を多く経験した師や正悟師と呼ばれる成就者がいますが、その人たちは皆、これらのエネルギーを見ることができる人たちです。このように、あなたの外側ではなく、あなたの内側には大変神秘的で刺激的な世界が広がっています。

そろそろ、月並みの娯楽にも飽きたなと思われる方、作り物ではない別世界に興味のある方、そして、真実の広大な世界を知りたいと思われる方は、ぜひオウム真理教の支部をお訪ねください。そこはあなたにとって「アストラル世界」への入り口となることでしょう。

(初出「マハーヤーナ」NO42・九一年六月刊)



## 変幻自在の世界

聖者マンジュシュリー・ミトラ供養值魂

功徳を背景とした正しい修行というものは、わたしたちの意識を高い世界へと導き、アストラルやコーザルの様々な体験をさせてくれるものです。わたしがこれからお話しするのも、解脱へ向けて極厳修行をしていたときのアストラル体験です。

\*

そのときわたしは、クンダリニー・ヨーガの成就を目指して厳しい修行をしていました。激しいムドラーを行なった後でシャヴァアーサナをとると、突然周りの世界が変わってしまったのです。

その世界というのは、金色に近いオレンジ色と紫色の光が満ちている綺麗な世界で、驚くほど巨大な山がそびえ立っていました。その山の形は普通の山よりかなり鋭角でとがっていました。そして、オレンジ色と紫色の光は、その山の方から射ってきているような感じを受けた

のです。

わたしは、ちょうど街の交差点のような所に立っていて、そのわたしの目の前を、たくさんの人が乗り物に乗ってスーッと空中を走っていきます。その乗り物は竹馬（またがる方の竹馬）に似た形でしたが、タイヤみたいなものはなく、エンジンがあるようにも見えませんでした。そして、地上一メートルくらいの所を飛び交っているのです。衝突することもなく、非常にスムーズに動いていました。

「ああ、面白いな。これはやっぱり使わんといかんな」と思ったわたしは、どこからかそれと同じ物を持ってきてまたがりました。そして、気持ち良くスーッと移動していくと、三階建ての家のようなものがあつたので、竹馬から降りて中に入ってみることにしました。ドアを開けた記憶はないのですが、不思議とスツと中に入れました。

中に入ってみると、なんとそこには、白い服を着た「わたし」がいたのです。その人を見た瞬間に、「これは自分に違いない」という強い確信がわき上がってきたのです。

その「わたし」は頭が非常に大きく、綺麗な顔立ちをしていて、科学の研究をしているみたいでした。わたしはその人と少し話をしました。残念ながら、そのときの話の内容は忘れてしまいました……。



このときのアストラル体験を導師にお話しすると、

「それは天界である。その非常に高くてとがった山というのは、スメール山だね。」  
と教えていただきました。

スメール山というのは、天界にあるとされる山のことで、その高さは標高八四〇〇〇ヨー ज्याナ（約一六〇万キロメートル）もあるといわれています。

そのスメール山をちよつと見上げているという状態からして、わたしが行った天界は、それほど高い天界ではなかったようです。科学的なアイテムを使っていることから考えても、そうだと思います。というのは、それよりもっと高い天界では、物質を使わずに思念の力だけで移動したり、自分自身がいろいろ変化したりすることができるところから。

実際、わたしが経験した創造満足天（楽変化天）は、まさに自在に自分を変えることができる世界でした。

\*

欲界における天界は、下から、四天王衆天・三十三天・支配流転双生児天・除冷淡天・創造満足天・为他神以神通創造欲望満足従事天というように六つに分けられています。創造満足天は、そのうちの第五番目の天界ですから、天界の中でも高い天界ということができそうです。

「仏教語大辞典」をひもとくと、創造満足天は「自ら五欲の対象を化作し、それを自ら享受する天」とありますが、果たして実際はどうだったでしょうか……。

その日もわたしは、サティアン・ビルで瞑想修行をしていました。エネルギーが強いときは、瞑想に入るとすぐに意識が肉体を離れて高い世界へ飛んでいきますが、あまりエネルギーがないときなどは、人間界の裏側にあるアストラル世界などの体験をしたりします。このときはエネルギー状態も良く、人間界よりも高い世界へ行くことができたのでした。

その世界では、わたしは定まった形を持たず、いろいろと変化することを楽しんでいました。初めは人間のような形をしていましたが、果たしてそれが原形かというと、そう断定することもできません。変身合体ロボみたいに、体のいろいろな部分が引っ込んだり、あるいは出てきたりして、様々な形態をとるのです。下半身が車になったり、飛行機になったり、ひどいときには体全体から女性の脚がいくつもバーツと生えたりすることもありました。また、変化するスピードも、ものすごく速いのです。アメーバがいろいろと動きますが、あれを極端に速くしたような感じでした。

その空間には、わたしだけではなくて、そういうものが他にもいるわけですが、見てみると、やっぱりみんな変化するのです。色も大きさも形もすべて変化して、その変わり身を楽しんで

いる。しかも空中でやっているわけです。周りには何も無い空間でした。

確かにこの創造満足天というのは大変楽しい世界ですが、相手をいかに幻惑するか、あるいは不思議な形に変身できるかを競っているような印象を受けました。

この体験について尊師にお伺いすると、創造満足天であると教えていただきました。「あそこでは、いつもあんなことをして楽しんでいるのか」と思ってお聞きすると、そのとおりであるということでした。

ものすごく楽しい世界であることは事実ですが、ただ単に徳を消耗しているような感じを受けます。わたしが瞑想中にそんな世界に行ってしまうというのは、自分の心の中に楽しみを求め、心があったからでしょう。尊師の救済という目的から見たら、その程度の世界に行って楽しみ、満足している自分を反省せずにはいられませんでした。

\*

ところで、瞑想修行をしていると、意識が飛んでアストラル体験をするばかりではなくて、三昧といわれる深い瞑想状態に入ることがあります。この三昧に入ったときの体験を最後にお話しましょう。

これはマハー・ムドラーの修行中のことでした。瞑想中に深い意識状態に入っていくと、肉

体の感覚がなくなつて、自分がどんどん広がっていったりとか、つぶれてしまつたりするような感じになります。

そんな中で、あるとき巨大な水玉になったことがありました。何も無い空間に自分がいて、それが白くポワーンとした巨大な水玉になっているのです。しかし、意識が飛んでいるわけではなく、非常に鮮明な状態でした。周りの音もはっきり聞こえています。例えば、隣にいる修行者の呼吸の音までもはっきりと聞こえるのです。この状態は、「水元素の崩壊」といわれるものではないかと思いました。

その状態からもう少し進んで、水玉でも何でもなくなつた状態になりました。空間があつて、ただそれを観察している状態です。ヴィジョンも何もありません。このときに、いったいこれはどうなっているのかなと考えました。するとどこからともなく、

「自分の心の状態をしてみる。」

という声が聞こえてきたのです（天耳界の神の声だそうです）。

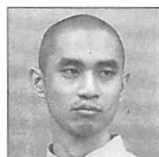
そこで自分の心の状態を考えてみると、非常に落ち着いているというか、醒めていながら寂靜の状態になっていることがわかりました。醒めているといっても、普通に醒めているよりも、もっと醒めているような感じであることに気づいたのです。

そのときのわたしの状態とは、肉体もなく、呼吸もない。意識が戻ってきて初めてそこに肉体が存在することを認識するという、いわゆる三昧の状態だったのです。肉体は完全に固定されて、背筋もピンと伸びていて、そこに意識がバキッとほめられてしまうような感じで戻ってきました。そのときわたしの心は、まるで洗濯したようにすがすがしく、非常に明るくなっていたのです。

\*

皆さんも全力で修行し、高い世界を経験することによって、その延長上に必ず絶対幸福・絶対歓喜の世界があるということを確認することができますでしょう。そして、オウム真理教の修行は、必ず皆さんに高い世界の経験をさせてくれるに違いありません。

わたしたちの上には、すべての世界をご存じの麻原尊師がいらっしゃいます。あなたも尊師の築かれた解脱への道を歩いてみませんか。 (初出『真理の芽』NO8・九一年三月刊)



## もう一人の自分、もう一つの世界

聖者ミラレバ供養值魂

今から三年ぐらい前のことですが、尊師から、

「アージュニア・チャクラ（眉間）のところにエネルギーが渦巻いて第三の目ができている。宇宙人みたいだ。そのうち天眼通がつくだろう。」

と言われました。このときの体験をまずお話ししましょう。

その日、わたしは「ボアの集い」のために大阪支部に行きました。そこでわたしは、信徒さんが来る十分か二十分ぐらい前、祭壇を背にして瞑想していたのですが、目をつぶっているのにアージュニア・チャクラのところに甘露水を入れたガラスの瓶が見えてくるのです。それを見ながら、「これは『水の祭典』の準備をしなければいけないなあ」と思ったのですが、その瓶がすぐくリアルに見えることが気になって、ずーっと集中していましたら、ふいに、その瓶には、いつもあるはずの甘露水をくむひしゃくがないことに気がつきました。

わたしが以前、大阪支部長だったときは、普段はひしゃくが瓶と一緒に置いてあったので、今回に限ってないのはおかしいと思い、今度は瓶は瓶として見ながら意識を道場の周りに張り巡らしてみました。

このとき、瞑想していて目はつぶっているのですが、視界が三百六十度あって道場を見回しているのです。こうして探してみたのですがどうしてもひしゃくを見つけないことができません。瞑想をやめて実際にひしゃくを探してみるとやはり見つからず、そこで、すぐに買いにいって、「水の祭典」にぎりぎりに間に合ったのです。

このころ、これと同じように、自分の持ち物がなくなったときに、瞑想して集中すると、その物がどこにあるのか見えてくるという経験をよくしました。

これらは普通は見えないものを見ているので天眼通（透視）の例といえます。

なぜこのような力がついたかを考えてみますと、ちょうどこのころ、尊師が「水中エアータイト・サマデイ」を行なわれた際に作られた特別な甘露水を大量に飲んでいたためだと思われます。皆さんも、このイニシエーションの効果を試されてはいかががでしょうか。

次に、昨年わたしがマハー・ムドラーを成就したときの修行中の出来事をお話ししましょう。

このときの修行では、まず、死に対する恐怖、肉体的苦痛がカルマとして現われました。

まず、もう忘れていた幼いころ強く感じていた、死に対する恐怖がこのときの修行によってどんどんわき出てきました。それに伴って肉体的にも、膿を持ったでき物がお尻にどんどん出てきて、畳に当たっているところが蓮華座の痛みより痛むのです。さらに、トゥモみたいに熱が出てきて頭も痛くなってきました。

そこで、わたしは尊師に「ヴァジラヤーナの帰依」という修行をさせていただきました。この激しい修行によって苦しみを乗り越えていき、少しずつ形状界の体験が始まってきました。

このときの体験としては、「幻身のヨーガ」(時間や空間、さらに自分自身までが幻影であることを認識するヨーガ。具体的には、時や空間を超えて様々な場所に移動するテレポーテーションが起こったり、自分の体つきや顔が瞬間的に変化したりする)の体験が多かったと思います。ちよつと究竟の瞑想に入ると周りが一変してしまふのです。

例えば、わたしの修行中、尊師がその場でイニシエーションのための飴を修法されたのですが、その修法されている場面が、森の中のような所が変わってしまったのです。そこでは片肌を脱いだ感じの尊師がいらっしやり、その周りに弟子たちが集まっていました。そして、その弟子の一人として自分もいるのです。尊師はそこでもやはり飴を修法されています。尊師が飴



を手を持つと、その鉤に向かって光が周りから集まって、鉤がどんどん輝き出して修法が終わるといふ光景でした。

このように、現実には自分がいるはずの光景が全く変わってしまうことが他にもたくさんありました。

このような体験が過ぎたところで、非形状界の方に意識が移っていきました。

修行中、ふいに座法を組んだ身体が押しつぶされていくような感じの前めりになって、体が地べたにびたつとくつついて頭が上がらない状態になりました。このとき、肉眼は下を向いているのですが、別の「眼」で自分自身と隣の人の姿と周りの状況も見えます。隣の人の息遣いとか、声も聞こえました。さらに別の「わたし」は非形状界の光に没入して、その光を見ているのです。光は確か黄色で、ちょっと無明を表わす黒があったと思います。そして、意識は非常に鮮明でした。

以前も宿命通の体験で、別の「眼」が自分自身を見るところにはありましたが、同時に非形状界まで見るといふのはこれが初めての経験でした。

この形状界、非形状界を同時に経験するというのは、意識が分化して同時に複数の意識が存在するというマハー・ムドラーの成就の状態なのです。

この体験を尊師にお話しして言われたことは、そうやって少しずつ死の体験をしていく（バルドーの光が見えるようになること）ということでした。

このプロセスは悪業の果が最初に現われ、それから善業の果が現われて、意識が肉体から離れて形状界、非形状界という別の次元に行ったということだと思います。これは煩惱が止滅して意識が鮮明な状態、つまり離解脱の状態になり、その鮮明な意識状態のときに形状界、非形状界の経験をしたということです。

この鮮明な意識状態というのは、例えば寝て眼が覚めてすっきりしたというような感覚ではなく、煩惱という重い衣を脱ぎ捨て、心が本当に自由になった状態から来る覚醒状態なのです。普通の人はセックスとか食べ物をたくさん食べるといった煩惱的な行為によってエネルギーを使うため、心が常にどよんとして憂いがあるのですが、こういった行為をあまりにしすぎると、初めて「心がどんよりしてるな」などと感じます。

わたしはすでにクンダリニー・ヨーガを成就しており、それは自分では調子がいい状態であると思っていたのですが、それすらもどんよりとしていたんだなというのがそのとき実感できたのです。

マハー・ムドラーを成就するまでは、結局わたしもいつも煩惱という重りをしょって歩いて

いたので、本当の意味での心の自由はなかったのです。しかし、成就によってその重りが取れて、「修行して良かった」「修行によって自分はこうなるんだ」ということをようやく納得できたのです。

わたしがお話しました、透視や普通は見えない世界を見る神秘的な力、さらには心の絶対的な解放も、麻原尊師という最高の指導者のもとで真理を学び、修行し、イニシエーションを受けることによって必ず到達できるのです。皆さんもぜひこの道を歩んでみてください。



## アストラルへの旅

聖者サクラー―供養値魂

オウム真理教の修行というものは、非常に効果のあるものです。これは、麻原尊師が何千生、何万生にもわたって過去世から培ってこられたもので、わたしたちをマハー・ボーディ・ニルヴァーナへと導く、本物の、かつ最高の修行体系とすることができましょう。そして、本物であるからこそ、ヨーガや仏教の経典にうたわれている様々な神秘体験や、今わたしたちが住んでいる現象界以外の世界での体験もさせてくれるのです。

わたしが最もいろいろな体験をさせていただいたのは、ラージャ・ヨーガの成就を目指して極厳修行に入っているときでした。

一筋の光も射さない真つ暗な個室の中で、毎日二十時間以上にも及ぶ過酷な修行が続きます。あるときは下位アストラルの世界に入ってしまう、悪魔や奇怪な動物に襲われて恐怖におのいたり、あるときは白銀の光に包まれて至福を感じたり……。このような体験をするにしがた

て、尊師がお説きになっていてるすべてが真実であるということ、それまで以上に確信できるようになったのです。

わたしがアストラル世界へ飛んでいろいろな体験をしたのは、主にムドラーと呼ばれる激しい修行を終えて、シャヴァアーサナをとっているときでした。最初は体が揺れるような感じになり、そのうち硬直し、ゴーツというものすごい音とともに意識がマニプーラ・チャクラにある変化身に移って体から抜け出すのです。

そして、風に流されながら、巨大な筒の中を下に行ったり上に行ったりして、行き着いた所で様々な体験をしていくというわけです。わたしがアストラル体験をするときは、いつもこのように始まるのでした。

その行き着く先というのは、地獄から天界までと様々ですが、よく印象に残っているのは、三十三天でした。三十三天は、天界の中でも下から二番目に位置するところで、楽しみを求め心が強く、しかも徳のある魂が集う所です。それほど高い世界ではありませんが、それでも人間の世界よりは数百倍も綺麗で素晴らしい所です。実はわたしの二生前が、この三十三天の生なのです。

極厳修行中にわたしが三十三天を訪れたときは、そこにいる人たち（神々）は、綺麗に着飾っ

ていて、何か飲み物を飲んでいました。彼らは、言葉をしゃべらないのですが、こちらの考えていることが黙っていてもわかってしまうのです。わたしも相手の心が自然にわかるわけですが、これはテレパシーのようなもので、意思の疎通をしているのだと思いました。みんな言葉をしゃべることなく、相手の心を読んで行動していました。

面白いことに、恋愛も同様で、手を触れ合うということもなく、ただお互いがお互いを好きだということをアナハタ・チャクラで感じ合って喜んでいる、そういう所でした。

ところで、アストラル世界では、自分の過去世のヴィジョンを見るという体験もしばしばしました。筒の中の風に流されて行き着いた先で、自分が全く別人となってしまうていたりすることがあるのです。

あるときなどは、マハー・ケイマ正大師が道案内をしてくださったこともあります。いつものようにわたしの変化身が風に流され、着いたところが長いトンネルの中でした。

そうすると、マハー・ケイマ正大師がいらっしゃって、わたしを導いてくださるのです。

「もう少しですからね。」

と、マハー・ケイマ正大師にこう言われて、わたしはくねくねした真っ黒なトンネルの中をひたすら歩いていくのです。そして、「右ですよ」とか「左ですよ」とか指示されながら、やっ

とのことでトンネルを抜けると、そこは見たこともない外国で、自分自身もいつの間にか金髪の女性になっているのです。

そのときの意識というのは、自分がその金髪の女性であるという意識と、すべてを客観的に見ている意識と、両方の意識が同時に存在しているのです。過去世のヴィジョンを見るときは、いつもこのような意識状態でした。

ところで、話は変わりますが、マハー・ムドラーを成就してからというもの、わたしは現実とアストラルが同一であるという体験をよくします。思念したことが現実となったり、現実と夢が一致したりすることが多いのです。

例えば、信徒名簿を見ながら、「明日は、この信徒の方に来ていただけたらいいな」と思うと、必ず来ていただけるのです。今のところ、これは百発百中です。

また、あるとき、夢の中でミラレバ正悟師が出ていらして、尊師のお部屋で一緒に食事をさせているのです。その食事というのは、わたしが実際に、その夢を見る二、三日前に尊師に供養させていただいたものでした。そして、夢の中で尊師が、

「サクラも食べないか。」

とおっしゃってくださいだったので、

「いいえ、これはわたしが供養させていただいたものですから、わたしはいただきません。」と申し上げたのです。

そんな夢を見たその日に、ミラレバ正悟師から電話があったので、夢のお話をお伝えしたところ、ちょうどわたしが夢を見ていた時刻に、尊師のお部屋でわたしが供養したものを召し上がっていたというのです。

これらは、色（アストラル）と空（心）が同一、つまり『般若心経』でいわれている「色即是空、空即是色」を日常生活で体験しているといえるでしょう。

真理というものは、今も昔も変わりません。サキヤ神賢がお説きになった法が、今麻原尊師によって現代に甦っているのです。このチャンスを逃すことなく、すべての人に真理の実践をしてほしいと思います。そして、全力でオウム真理教の修行をすることによって、あなたにも必ず素晴らしいアストラルの体験が訪れることを、わたしはお約束しましょう。

（初出『真理の芽』NO5・九十年十二月刊）





## ジョアンと象使い

聖者キサーゴータミー供養值魂

このコーナー（編集部注…当時の教団機関誌「真理の芽」に連載していた「真理ユートピア」というコーナー）では、毎回オウム真理教の修行者の様々なアストラル世界での体験が登場して、読者の皆様をしばしの間、神秘的な世界へとお誘いしています。「自分も早くこんな体験を試してみたいなあ」とか、「こういうことであるとは思いますが、自分とは無縁ではないかしら」と、ため息交じりにまだ見ぬ世界に思いを馳せる方も多いのではないのでしょうか。

実は、わたしは今回のような内容で原稿の書けるチャンスを秘かに待っていたのです。といいますのは、深い意味合いのあるアストラル体験は、修行の原動力に他ならないということ、そして正しい教義と修行体系に従えば、だれもが必ず体験できるのだということ、ぜひともお伝えしたかったのです。——かつてのわたしと同じように、劇的なその日がいつか来ることを心の片隅で期待をしながらも、「自分は神秘的なことに全く縁がない」とあきらめておい

での方に。

\*

鮮やかなアストラル体験は、ムドラーと呼ばれる、肉体的にも精神的にも、極度の緊張をす  
る激しい修行を終えた後、シャヴァアサーナ（心身をリラックスさせるポーズ）をとっている  
ときによく起きます。これは、これまでも当コーナーに登場した方々が語っていらっしやいま  
すね。通常わたしたちは、肉体と意識とがピッタリとくっついた状態で暮らしていますが、ム  
ドラーは両者を剥離する効果が高いために、神秘体験が起きやすいのです。

わたしがこのムドラーを集中して行なったのは、クンダリーニー・ヨーガの成就に向けての個  
室修行中のことでした。——このときの「個室修行」は、東京にあるマンションの一室で行な  
いました。六畳の洋間にじゅうたんが敷き詰めてあり、天井は結構高く、圧迫感は全くありま  
せん。窓もドアも、外からの明かりの入る所は目張りがされていました（もともと、最初は完  
全遮光の状態ではなく、隙間から光が入ってくるので、かえって気になったわたしは、完全遮  
光になるように自分で手を加えました）。自分で電気のスイッチを入れなければ、部屋の中は  
一日中真っ暗です。

——このような「個室修行」が約三カ月間続き、毎日二十時間にも及ぶプログラムが生まれ

ていました。全力で数時間のムドラーを行なった後にとるシャヴァアーサナでは、異次元や輪廻転生の確かな存在を実感する様々な体験をしました。今回は、人間だった生と動物だった生についてお話ししましょう。

八月の個室修行中。そのときも、わたしはムドラーを終えてシャヴァアーサナをとっていました。どれくらい経ったところでしようか？ ふと気がつくと、目の前に超大型スクリーンが登場していました。それまでは眠ってしまったのか、それとも、暗闇の中で見えない天井に目を凝らしていたのか……どうも記憶がないのですが、ともかく巨大スクリーンが見えた瞬間から、わたしの意識は活動を開始したのでした。これは、アストラル・トリップ（幽体離脱）に近い体験のようです。

そのスクリーンは、視野をはるかに上回る大きさで、しかもどこまでも行ける奥行きがあるのです。スクリーンいっぱい緑のじゅうたんを敷き詰めたような草原が広がり、点々とした大樹からは、風にそよぐ若葉のざざめきが聞こえてきます。これまで見たことがない、広大な光景に茫然としてしまいました。しかし、一方で懐かしさを感じている部分もありました。自分の心の矛盾に戸惑っているうちに、すぐそばでフル・オーケストラが演奏しているような、臨場感あふれた音楽が流れてきました。曲想としては、「エデンの東」に似ているなあとと思っ

たことを記憶しています。ダイナミックなサウンドに体が包み込まれると、突然「これは、南北戦争時代のアメリカ中西部である」という思いがわいてきました。

気がつくと、画面は、先ほどの大樹の一本が大写しになっています。その樹の、地面に近い低い枝に中年の男性が腰掛けて、ひざに女の子を抱っこしています。男性は、少しくせのある赤毛で、目尻に深い笑いじわのある、見るからに優しそうな人です。女の子の方は白いブラウスに、水色のジャンパー・スカートを着ています。そして、金髪をきっちり三つ編みにし、リボンをきりつと結んでいました。時折草原をそよぐ風が、女の子の前髪を揺らしていきます。二人はとても信頼し合っている関係のようで、安らいだ雰囲気は漂っています。

鼻筋の通った女の子の横顔を見ているうちに、「これはわたしだ」と強く確信しました。それまでは客観的に見ていた意識が一つあるだけだったので、その瞬間、主人公の女の子の意識と、それを客観的に見ている意識と、同時に二つの意識が存在していることに気がつきました。男性が女の子に話しかけます。

「ジョアンのお父さんとお母さんは、死んでしまったから、叔父さんがジョアンの面倒を見てきたんだよ。今日は、ジョアンの十三歳の誕生日だから、これまで黙っていたお父さんやお母さんのことを話そうと思う。」

と……。ジョアンであるわたしは、驚きもせずに叔父さんの話を聞いていました。

これは、アメリカ人だった過去世のヴィジョンでした。これで納得したのですが、今生のわたしは、はつきりした根拠がないにもかかわらず、英語（本当は米語になるのでしょうか）をはじめ、アメリカ文化に執着していたのです。これは、過去世の名残だったのですね。

もう一つ、これもなぜか今生で執着していたのですが、過去世のヴィジョンを見るに至って、なるほどと納得したケースです。

修行を始めるずいぶん前から、わたしはインドの文化に言い知れぬ懐かしさを感じていました。インドは、古い歴史の中に様々な方面の魅力を秘めているために、魅了される人も多いわけですが、わたしの場合は根拠が不明でした。結局それは、魂がどこかで過去の経験を懐かしがっていたのでしよう。

では、インドに生まれた生のお話に入りましょう。これも同じ個室修行中、シャヴァアーサナをとっているときです。ヴィジョンに登場したわたしは、象使いの少年でした。年齢にしたがって、八、九歳ぐらいです。手足が長い、ほっそりとした体つきをしていました。上半身は裸で、腰に赤茶色の布を一枚巻きつけているだけです。もちろん裸足です。

この生では、あまり裕福な家庭に生まれなかったようで、生計のために、象使いの親分に弟

子入りをしていました。そして、将来は自分で象を飼って商売をしようと考えていました。仕事としては、人を乗せたり荷物を運んだりしてお金をもらっていたのです。そのころ、わたしは子供だったし、不慣れなせいもあって、少しでも稼ぐのに必死でした。毎日手の中のコインが少しでも多くなるようにと、一日中こまねズミのように働きました。自分が使う象は、大切に扱ってよく面倒を見ていました。

……と、ここでいったんヴィジョンが途切れました。次の瞬間、自分が白い象になっているのです（この場合も第三者の自分と、この象は自分だと確信しているもう一人の自分がいるのです）。そして傍らには、かつての自分と似た年格好の少年が、自分の世話をしてくれています。これは、どうも次の生のようです。一生前で象との縁が深かったために、自らが象に転生してしまったのです。人間界から見れば、下の動物界に落ちたのですから、象使いのときに善い行ないをしなかったのでしょうか。動物界に転生する要素として挙げられるのは「無智」ですから、お金のことばかり考えていて、物事の真偽の程が見定められなかったのではないのでしょうか。その愚かさゆえに立場が逆転して、かつて使われていた「象」になって、カルマの清算を受けることになったのです。麻原尊師が常々おっしゃっている、すべてのことはカルマによって生起する、すべては無常である、輪廻転生は存在する、ということを実証する体験ではない

でしょうか。

そして、今生は真理を背景にした修行をし、前世でなした悪業を消滅することこそが、わたしが進むべき、唯一の道であると自覚したのです。そうでもしなければ、次生は今生以上に悲惨な人生（人間とは限りませんが）が待っているに間違いないのですから。

\*

——さて、わたしの体験談はいかがだったでしょうか？ 文頭にも書きましたが、以前のわたしのように、神秘体験にあこがれつつもあきらめていらつしやる方へ。まず一年ほど一生懸命に修行なされば、必ず得るものはあります。まだ、オウム真理教にご入信されていない方は、これをチャンスに、麻原尊師の修行体系にチャレンジなさいませんか？ 悠久の經典に残された、真実の世界をあなたも実体験することになるでしょう。

（初出「真理の芽」NO7・九一年二月刊）



## 瞑想、そして真実の世界

聖者ウツパラヴァンナー供養值魂

わたしは、オウム真理教に入信し、そして出家し、麻原尊師の説いていらっしゃる真理の法に基づいて、すべての現象を見つめ、考える実践をしてきました。その法とは、生ずるものは必ず滅する——つまり、わたしたちは死ぬ、必ず死ぬ、絶対死ぬ、死は避けられないという事実、あるいは、なしたことが返ってくるというカルマの理論、苦は存在し、苦は生起するものであり、苦は滅尽できるものであり、その滅尽に至る方法があるという四つの絶対的真理、などのことです…(略)…。

その結果、わたしの潜在意識、あるいは超潜在意識に根づいている煩惱に対して次第に抵抗力を強め、尊師の偉大なる導きによって、一九八七年にはラージャ・ヨーガ、一九八八年にはクンダリニー・ヨーガ、一九九〇年にはマハー・ムドラーの成就を授かり、煩惱の本質を見、超えることができたのです。このマハー・ムドラーの修行において、わたしは、真理のデータ



である經典、あるいは尊師の説法を日々繰り返し修習することにより雑念から解き放たれ、寂靜の境地に達し、集中力を増しました。そして、正しいサマディに導かれ、大いなる空の体験をし、輪廻のからくりを知って、尊師の世界観、教えが真理であることを確信したのです。

普通、わたしたちは、この人間界と動物界のみしか見ることはできません。しかし、わたしは尊師の指導される正しい瞑想修行によって、地獄界、低級靈域など、經典に記されているような様々な世界を旅することができました。尊師の説かれる世界観が真実であると確信した理由には、これらの実体験が大きな要素となっているようです。皆さんにも、その真実の世界を少しでも知っていただくために、修行中の瞑想体験の一部をここに書き記したいと思ひます。

\*

欲六界の最下位にある地獄。ここは、苦痛のみの世界です。生き物を殺すことを喜びとしたり、脅かして遊んだり、恐怖心を抱かせることに心を費やしている魂は、この地獄に赴きます。そこは、自分よりも大きな獄卒がいて、にぶい黄金のよろいをまとい、両手には大きな鋭い刃の付いたサーベルと三叉戟を持っています。そして、自分は身体が固定され、全く動けない状態になり、その獄卒が自分に少しずつ近づいてくるのです。当然、自分を殺しにやってくるということがわかっていますから、その少しずつ近づいてくるときの恐怖は、頭がおかしくな

る寸前、つまり発狂寸前にまで高まり、その状態の中でサーベル、三叉戟によって身体をバラバラに刻まれるのです。その後、また身体は復活し、固定され、再び獄卒が近づいてくる間、極限の恐怖に襲われ続け殺されるというパターンを、その魂が他に対して与えた恐怖の総量に達するまで終わることなく繰り返されます。

次に、貪りの心が強いとき、わたしたちは黄色い光に包まれ、満たされることを知らない貪欲な心によって形成された世界に行きます。その世界の住人は、ただおなかを満たすことのみ集中しており、それによって目が飛び出て、口は大きく裂けています。身体は赤茶け、おなかの前に大きく張り出ており、その他の部分は骨と皮のみのガリガリの身体です。たとえるならば、アフリカで飢えに苦しんでいる人たちの様子がテレビなどで紹介されますが、ちょうどその中にいる子供の目をもっともっと大きくて飛び出し、口が耳まで裂け、手足の皮はしわがで、しなびている状態に似ています。

彼らは、食べ物が少しでもあると、我こそはというすごい勢いで、その少々のおにぎり等を奪い合うのです。しかし、その食物を得たとしても、食べたいという気持ちが強すぎて、喉に通っても通った気持ちも生ずることはなく、次の瞬間にはさらに強い貪りの欲が心を支配し、満たされることのない苦しみに身を置かなくてはならないのです。これが低級霊域と称される

欲六界の下から三番目の世界の様子です。

また、善業を積み、持戒を守り、功徳に満たされたとき、天界の白い光が現われます。その光に入ったわたしは、戯れ墮落天に行きました。そこでは、女性は一人残らず美しく、赤や黄など彩りの鮮やかな衣装を身につけ、和やかに過ごしているのです。

わたしが行ったところは、デパートのような建物があり、その一階ごとに様々なものが置いてあるのですが、人間界のデパートとはかなり様子が違います。例えば、そこにある風景画に注目すると、その風景が広がり、その世界を楽しむことができたり、単なる置物としか見えないうものでも、それに目を向けると、大きくなって動き出したりするのです。遊園地をもっとダイナミックにしたようなところでした。そこには女性のみならず男性もいましたが、やはり美しく、そこに集っているすべての人々は、それぞれが心ゆくまで楽しんでるのです。

心は、神聖天へと傾き、神聖天にあこがれ、集中したわたしは、黄金と白銀の光のうねりが透明光をまといながら立ち昇っているのを見つけました。そして、その光の中へと入っていったとき、その世界には、ギリシャ神話の神々を思わせるような長い巻毛、髭の豊かな人物がいて、白い衣を足元までまとい、ゆったりとした物腰でわたしを迎えてくれました。そこには、数多くの書籍が並んでいて、わたしはそこから欲六界に関する本を貸していただいたのですが、

その本には、それぞれの世界を構成する様々な心の働きが記されていました。驚いたことは、その一つ一つの心の働きに、聞いたこともないような名前がつけられており、心が一つの形ある物として表現されているようでした。その方々は、大変静かで、かといって冷たいヴァイブレーションはなく、とても聡明な印象を受けました（この神聖衆天への旅は時間にすればたった二十分のことでしたが、得たものが多く、いつの日か再び赴きたいと思っています）。

そして、戯れ墮落天を超え、神聖天を超え、大いなる空に没入したとき、心は寂靜の中に入り、輝くばかりの透明光に包まれます。その満ち足りた空間の中で憩うとき、わたしの心は歓喜を得て、偉大なるグル、シヴァ大神に心から奉仕したいと思うのです。

わたしのこれらの瞑想体験は、決して特別なものではありません。麻原尊師の説かれる教えに基づいて修行すれば、だれでも体験できることなのです。わたしは、一人でも多くの魂がこの絶対なる真理に出会い、真実の体験をし、本当の幸福を得てほしいと思います。

（初出『マハーヤーナ・スートラPART2』・九一年五月刊）



## 再び巡り合った偉大な光

聖者フナ・マントーニツタ供養値魂

「君のアージュニア・チャクラは変わっているねエー。」

と尊師が言われながら、厳かにエンパワーメントされている。

わたしが初めて尊師より、靈的覚醒の第一歩、クンダリニーの覚醒へ向けて、シャクティ・パットを受けた忘れもしない記念すべき日のことであった。そのときわたしは白銀光から虹色に変わり、それが円盤状になりクルクルと回り始めた七色以上の綺麗な輪を靈視していた。

その五日後、寝入りばな、身体のしびれの後に背骨の両側から、ちょうど不動明王の背後の炎のような形で身体が包まれ燃え上がった。炎に包まれたまま、なんとそのまま肉体から幽体が浮かび上がったのである。完全に肉体と幽体の離脱だ。その炎は、オレンジ、赤といったような炎の色であり、クンダリニーであった。これが今生における初めてのアストラル・トリップであった。

まさにわたしの靈的体験は、偉大なる麻原尊師のエネルギーによって、そう、偉大なるグルのエンパワーメントであるシャクティーパーットによって幕が開けられたのであった。

それでは、わたしのアストラル体験の一部をお話ししよう。

その日、夢を見ていたわたしは、瞬間的にアストラルの世界へ切り替わった。それは唐突に、いきなりジャーンという感じで、尊師がわたしの感知し得る最大限の画面いっぱい、ものすごい大きさと現われた。

いつもアストラルでの尊師は、ものすごい大きさと現われる。それはたとえてみると、雲一つない晴天の空を見上げて、その視野いっぱいにといい感じである。

「あー尊師！」

と思っていると、尊師は何も言わず靈視をされたり、プラティヤハラのお顔でジーとわたしを見降ろしておられる。そしてパーッとヴィジョンが瞬間的に切り替わり、今度は尊師のプリプリッとした右足の親指のみが眼前に見え、同時に尊師のお姿も二重映しのように見えている。

わたしはすかさず古式礼拝をしていた。それは、グルの右の第一趾へ軽く口を触れるという

礼拝の仕方である。アストラルでのわたしは、心の底からわき上がる「偉大なるグル」という思いが強すぎるあまり、礼拝を一度でやめることができずに触れ続けていた。

導師はと見ると、今度はいつもの肉体次元の普通の大きさに戻られ、苦笑いをされながら両手でわたしを制し、慈愛に滴ちた目を向けながらも、半ばアキレたような感じで、

「わかった。わかった。もうよい。」

と言われた。今思えば、当時サマナになり、オウム真理教第一番目の支部、大阪支部へ配属になり、グルと離れた状態のわたしの帰依を、嘘のつけない潜在意識レベル、アストラル界でテストなさったのではと思った。

また、クンダリニー・ヨーガ成就に向けての個室修行中、ムドラーの後のシャヴァアーサナ中、わたしが猫であった生を思い出すことができた。

それは、バルドーから母親猫の子宮に入ったところから記憶が甦った。魂が糸を引くような感じで、ものすごいスピードでバルドーから母親猫の子宮に入り、生まれ、子猫から親猫になって死んでゆく。面白いもので、このとき猫はわたしであり、それを客観的に見ているもう一人のわたしがいる。すなわち、猫の自分と、それを離れて客観的に見ている自分が同時に存在しているのだ。

その体験は、とてもリアルで母親猫から生まれるときの粘膜を通過する感覚から、目が開かない子猫が母親を求める動物の習性、そして一人立ちし、他の猫との猫同士のコミュニケーション等、猫はこうして生きていくんだと納得することしきりであった。

例えば、初めて会った猫、前生で縁ある魂なのだろう、ゴロンと横になって、おなかを見せて親愛の情を示し、敵意のないことを知らせる。また闘争においては、まさに毛が逆立ちその臨戦体勢の猫の緊迫感がヒシヒシと伝わってくる、等々である。

しかし、生まれて間もない子猫のころまでは、わたしの真我は猫に固定された自己のカルマから脱出したいと願いながらも、カルマの制約を受けざるを得ないことに激しい抵抗感を示した。

いつしか猫の食事をし、猫の言葉を話し、本当は面白くも何ともなかった、ほうきやハタキのようなものにじゃれつくことも、柱に爪を立てることも、いつの間にか快感となり、猫の所行をなし、猫そのものになってその生を終えた。生まれて間もない子猫のころに思ったことは、きつとわたしの真我の叫びだったのだ。

——猫は悲しい。

またわたしは、天界の生も多い。あるときは、UFOのような乗り物に乗り、飛び回ってい



た。不思議なことに操縦席には操縦かん等、何も無いのだ。思念の力というか、心的エネルギーによって自在に動かし、停止させ、方向転換させたり、あるいは、時空を超え、いきなり別な世界へ現われたりとか……。

その名残か、この生においても、知らない土地へ行きたい、自由に放浪したいとか、乗り物を運転することが好きであった。この世の乗り物はUFOと程違い、粗雑なもので、ある程度制約された動きしかできないが動いてくれる。

そして、前生は第四天界、除冷淡天であった。これはある日、尊師が言われたことだ。

「お前との縁も深いよ。節目、節目の救済のときには一緒であった。前生は、お前を休ませるために第四天界へ放り上げた。」

と。  
そしてそこでわたしは、よく法を学んでいた。そこでのわたしは、意識体であった。何か円い光り輝く身体があつて、そこに真我が存在しているようであった。そして周りには、同じように法友たちがたくさん光を放っている。そこに、とてつもない大きさの光り輝く光輪が、わたしたちの放つ光とは比べようもない光を放ちながら天空からゆっくり、ゆっくりと降りてきた。

「ああ、尊師！」

尊師なのである。本当に、「あー、尊師だ」とすぐ感じた。

ゆっくり、ゆっくり降りてくる大光輪（尊師）を皆が待ち望むように見つめている。わたしは、うれしさのあまり光速以上のスピードで飛び回った。他の者たちも飛び回っている。なつかしさ、歓喜、たとえようもなく心が高揚してくる。ちょうど、今生で初めて尊師に巡り合えたときの喜びそっくりである。

グルが法則をお説きに来られたのだ。その法則は、言葉で説かれるのではなく、ヴァイブレーションだ。わたしたちは、そのヴァイブレーションによって、その法則を理解するのだ。

そして今生。尊師が、

「今生、お前を救済のために降ろした。」

と言われた。

その除冷淡天から人間に降りるときも記憶に生々しい。

落下するのだ。天界から人間界にら旋状にものごいスピードでグルグルと回りながら光の弱い世界へ落下し母親の子宮に入った。このときの落下する恐怖は、今も鮮明だ。

マハー・ムドラーを成就するまで、わたしは高所恐怖症であった。高い所から下を見ると、

吸い込まれるような、恐怖を感じていた。きっと、そのときの記憶が残っていたためだと思う。さて子宮に入ったわたしは、同じように粘膜を通過する感覚を得ながら今生、人間に生まれ変わった。赤ちゃんのときから幼児期ころまでも、同じように人間の肉体を持った苦しみを感じた。立てない。自由に動けない。意思表示が限られた世界。不自由だ。とても苦しい。もつと自由のはずだ、と……。

人間界のカルマの制約に固定された苦悩が始まり、人間の言葉を覚え、人間の食事をし、人間の情を受け、人間の所行をなし、悪業の数々を積み、いつしか前生の記憶を失った。そしてわたしは、導師に巡り合い、シャクティーパーットの他、様々なエンパワーメントによって、少しずつ前生を思い出し、ここまで来ることができたのだった。

偉大なグルなしには、何も生まれない。

「君のアージュニアー・チャクラは変わっているねエー。」

わたしは三つ目の小僧の生もあつたのだ。三番目の目は、アージュニアー・チャクラ（眉間）の位置にある。とても知性的な種族で、他心通・天眼通など超能力をバンバン発揮する世界でわたしは法友たちと共に三叉戟を持ち、救済のお手伝いをしていた。

蓮華座を組みながら、天空を自由に飛ぶこともできる。空中浮揚から、空中飛空の世界だ。

これは大阪支部のある信徒さんで、わたしと同じアージュニア・チャクラの形をしているといわれた人がいた。

「お前たちは、三つ目の種族であった生もあるのだよ。」と。

その生に、一緒に生きた魂が、きつと今、このオウム真理教の中にたくさんいるのではないかと思う。そういえば、オウムの人たちとは、いろんな生で縁が深いに違いない。初めて会ったときも、なつかしい人ばかりだし、きつと、どこかで会っていると思わずにはいられない人ばかりである。

まさにわたしの靈的覚醒、心の安定は、あの日、あのとき、

「君のアージュニア・チャクラは変わっているねエー。」

とおっしゃられた、導師のシャクティーパーットによって始まったのだった。

偉大なる導師がいればこそ、わたしたちの魂の向上が最終解脱へ向けて、スタートを切るこ  
とができるのだ。

さあ、皆さんも縁ある法友と交わってみませんか。きつとオウム真理教に初めて来たあなたは、いつかどこかで会った人ばかりがいることに、驚きともになつかしさを感じ、心の高揚感を味わうことでしょう。

おわりに

麻原彰晃の神秘の世界——いかがだっただろうか？

実は、本書の初版が出たのは一九八六年、すでに五年も前のこととなるのだ。したがって、その後のわたしの変化についてもお話ししなければならぬだろう。

わたしは、その後、さらに厳しい修行を続け、ついにヨーガの最終段階を極めるといふところまで到達した。これはわたしが自分の目標としていたステージに他ならぬ。

ところが、実際にそのステージに至ってみると、まだまだ上のステージがあるような気がして、満足できなかった。そこで再び模索が始まったのである。

その結果、これまでのように自己のためにしていた修行には限界があるのだということに気づき、自己の苦しみを喜びとし他の苦しみを自己の苦しみとする。大乘の修行へと移行していったのである。

この大乘の修行によって四無量心（聖慈愛、聖哀れみ、称賛、聖無頓着）を培うことができる。そして、この四無量心こそが大いなる空の広がりを作り、いつそう素晴らしい超能力をわたしにもたらしたのだ。

この素晴らしい超能力の数々——わたしはこれを「超越神力」と呼ぶことにした。その詳しい内容については、わたしの「超越神力」シリーズでご紹介している。ぜひ本書と併せてお読みいただきたい。

一九九一年

麻原彰晃

# あなたに絶対の幸福を約束する

## オウム真理教

心身の悩みを解決したい

超健康体を得たい

豊かな生活を送りたい

素晴らしい人間関係を築きたい

スーパー・パワーを身につけたい

来世も幸福に生きたい

解脱し、永遠の至福を得たい

最高の教義、最高の奥儀、そして麻原尊師のもと、すべては確実に実現します。



# ●オウム真理教が誇る二つの基本的修行体系

## 1、マハーヤーナ

現実生活をより豊かにし、幸福な人生をお約束します。ご年輩の方、仕事が忙しく時間のあまり取れない方にお勧めです。

## 2、タントラ・ヴァジラヤーナ

行法、イニシエーションを中心として進め、靈性を向上させて、神秘世界を体験することが出来ます。この修行体系を選択すれば今生で解脱し、悟ることも夢ではありません。

## 3、テラヴァータ

原始仏教の上座部仏教を再現しました。真理にのっとって清浄な日常生活を送ることによって、幸せな来世が約束されます。また、経典の記憶修習によって心の成熟が促され、悟りを得ることが可能です。オウム真理教の深遠な教義を徹底的に学びたい方に最適です。

※資料請求券を貼付けしたハガキ、または電話にて最寄りの本・支部までご連絡ください。  
入信案内等、詳しい資料をお送りします。





# ズバリ! 真理のメッセージ 「リオン・テス・バシレイアス」

中波 1476kHz 毎日22:15 ~ 1:15  
短波 英語放送(朝) 毎日 5:30 ~ 6:00  
(昼) 毎日 1:30 ~ 2:00

※今週の聴きどころなどを毎日紹介。  
便利なテレホンサービスもぜひご利用を。  
TEL 03(5450)3602

※タイアップマガジン

「えんじょい・



定期購読受付中!

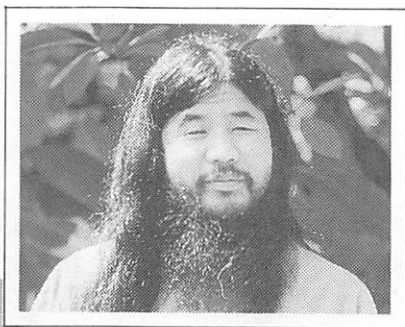
「はびねす」

※詳しいお問い合わせは、  
「エウアンゲリオン・テス・バシレイアス」係まで。  
TEL 03(5450)5586





モスクワからあなたに——  
オウム真理教放送「エウアング



尊師の声が  
あなたの耳を直撃!

麻原尊師が電波によってあなたのもとへ。  
宗教、音楽、科学、神秘……。  
盛りだくさんの内容と、  
次から次への新しい発見で  
眠気も吹っ飛ぶこの時間!  
さあ、あなたも今日から尊師を聴こう!



# “オウム真理教ネット”

## 電子掲示板

- 神秘体験談
- ジャータカ仏典
- オウム真理教ニュース

## 電子会議室

- 秘儀修行法
- あなたのちよっと気になる話題を……

## 電子メール

あなたの気に入った相手に

## チャット

画面を通して  
解脱者と  
さあ 語ろう

## フリーソフト

- 尊師画像
- 真理紙芝居
- 転生うらないゲーム
- などなど

※ただ今、新入会員の方に素敵なプレゼント(えんじよい・はびねす最新号)をさしあげています。

●なお、その他詳細は下記までお問い合わせください。

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17

“オウム真理教ネット” 事務局 TEL 03-5450-3554

# 好評! あなたとオウムをつなぐ パソコン通信、

オウムについてもっと詳しく知りたい……  
教義その他について、いろいろと聞きたいことがある……  
オウムの人たちの生の声を聞いてみたい……  
そんなあなたに最適な情報ネットワーク

## “オウム真理教ネット”のご紹介

TEL番号	03-5450-5580 (4回線) Tri-P利用可能(CXAUMNET)
通信速度	1200/2400bps
通信条件	BITS-8 PARITY-NONE STOP-1
プロトコル	X-MODEM Y-MODEM(-G)
ゲストID	GUEST
運用時間	24時間
入会方法	ゲストログイン後、 SYSOPあてメールにて申請

めんどうな手続きはいっさいありません。オウムに興味をお持ちの方、聞いてみたいことがある方は、今すぐお気軽にご利用ください。

# 麻原彰晃の世界 シリーズ

人はなぜ麻原彰晃を尊師と仰ぎ、彼のもとに集まるのか？  
その答えがこの本に集約されている。  
麻原尊師の多彩な魅力を満載したファン待望のシリーズ。

PART-1  
幸福に至る四つの実践  
定価2500円

PART-7  
仏教真理・八正道  
定価800円

PART-2  
尊師、麻原彰晃が斬る！  
定価980円

PART-8  
仏教真理 六波羅蜜  
定価800円

PART-3  
真実！六道輪廻  
定価980円

PART-9  
尊師、聖地インドを行く  
定価750円

PART-4  
宗教にだまされるな！  
定価980円

PART-10  
仏教真理 五蘊無我  
定価650円

PART-5  
絶対の真理  
定価980円

PART-11  
自己を超えて神となれ！  
定価820円

PART-6  
願望成就の秘法  
定価980円

PART-12  
仏教真理 十二縁起  
定価620円

絶賛発売中!!

これが尊師!

PART-13



B6判 定価570円

雑誌・テレビ・ラジオにと、今大人気の麻原尊師。尊師の人気の秘密は何か? 雑誌社からの取材を中心に、様々な角度から尊師の魅力を探る。

宗教の条件

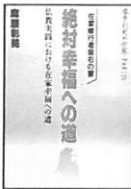
PART-14



B6判 定価570円

今、本物が明らかになる! 真の宗教の条件とは? 第三次宗教ブームと呼ばれる現在、様々な宗教の中から間違いなく本物を選び出すための条件を、あますところなく説き示す一冊。

PART-15



B6判 定価620円

最終解脱者、麻原彰晃尊師が、幸福になるための最速・最短の道をおなたに伝授する! あなたを確実に幸福へと導く秘法が満載の、在家修行者座右の書。

麻原彰晃 方便品

PART-16



B6判 定価720円

難解な仏典の比喩・奥儀が現代的に説き明かされた! 釈迦牟尼の深遠な教えの真髄を、最終解脱者麻原尊師が巧みな方便でわかりやすく解説。読んで、考え、実践するための、本物のお経を公開!

世界は尊師を待っている

PART-17



B6判 定価1030円

転換期にあるロシアでの説法、大学での講演、インタビュー等を集めた第一部。テラヴァーダ仏教のスリランカでの高僧との対談を集めた第二部。四十八ページカラーで尊師の幅広い活動を紹介。

最新刊

THE説法 I

世紀末の危機を乗り越えるために

PART-18



B6判 定価670円

「解脱が二十一世紀の日本を、そして世界を背負う!」——新しい時代の文明理念が今明らか! 道なき現代社会に明確な指針を与える麻原尊師の説法集。

THE説法 II

初公開! タントラ・ヴァジラヤーナ最高の教え

PART-19



B6判 定価570円

本来ならば直弟子にしか明かされない秘儀、タントラ・ヴァジラヤーナの高度な内容も惜しみなく公開。激動の時代において絶対不動の自己を確立させてくれる麻原尊師の説法の集大成。

(価格にはすべて消費税が含まれています。)

●全国の有名書店にてお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。

オウム出版

〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL 03(3439)6043 振替 東京2-109325

秘をこわなく公開!!



## PART 2



定価980円

前生を知れ！ 死生智の秘密

あなたの持っている本当の力

無始の過去から輪廻を繰り返しているわたしたちの魂。瞑想によってサマデイ(三昧)に入ったとき、様々な前生の記憶が甦る。麻原尊師の興味深い前生を満載したファン待望の一冊。

## PART 1



定価980円

天耳通・他心通

あなたの持っている本当の力

神々の声や遠くの音を聞くことのできる天耳通。他人の心を手に取るように読んでしまう他心通。今明らかになるこの超越神力のすべて。あなたもこの素晴らしい力を持つことができる。

## PART 3



定価550円

完全なる絶対なる神の叡智、漏尽通

あなたの持っている本当の力

智慧の解脱、心の解脱で心のけがれを完全に破壊した最終解脱者だけが知る、完全なる絶対なる神の叡智とは？最後の超越神力漏尽通の秘密が今明らかになる。

あなたの持っている  
本当の力

# 超越神力

りき

ちょう

えつ

じん

真理の御魂

最聖 麻原彰晃尊師 著

麻原彰晃尊師の神  
あますと

人の魂に宿っている不思議な力—  
それを発現させるものを修行という。  
多くの弟子たちが獲得した  
神通力の紹介を交えて、  
最終解脱者、麻原尊師の神秘力を  
明かす！

## PART 4



定価570円

人気シリーズ「超越神力」の  
第四弾。あなたは信じられる  
か？まさに超越神力と呼ぶ  
にふさわしい超能力の数々を  
見せる麻原彰晃尊師。その超  
越神力を目的の当たりにした内  
弟子の生の声を豊富に掲載。

わたしは見た！これが尊師の超越神力

●全国の有名書店でお求めください。弊社に直接お申し込みの場合は下記まで。(定価には消費税が含まれています)

オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL 03 (3439) 6043 振替 東京2-109325



あの名著がグレードアップ！  
増補改訂版

# 生死を超越える

麻原彰晃尊師の不朽の大ベストセラー「生死を超越える」が、  
新しく増補改訂して登場！

麻原尊師の教えに導かれ、  
生死を超えて解脱した四十八名の弟子の体験談を、  
解脱へのプロセスに沿って掲載した。

真理の御魂<sup>みなま</sup> 最聖麻原彰晃尊師著

B6判 定価1800円

オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 振替 東京2-109325

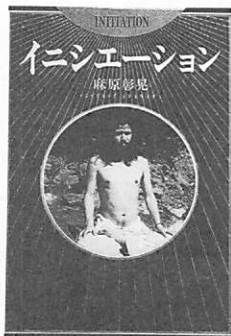
# 仏陀の智慧が光を放ち混迷の時代を照射する

# INITIATION

## イニシエーション

真理の御魂みたま 最聖麻原彰晃尊師著

この名著はすべてを語っていた！



「解脱」「悟り」のプロセスを細やかに説き明かし、最高の修行法を伝授する。

本来、選ばれた弟子にのみ明かされる秘儀

ヨーガ・仏教の奥儀を極めた修行の正しさは、

誕生した三五〇名の解脱者が証明する。

さらに、自民党の大勝と大敗、円高の進行、

農作物輸入自由化など、

今日の世界と日本の動向を正確に予言している、

驚くべき記述の数々！

- ◎「解脱」「悟り」の真実／現代の仏陀麻原彰晃が最高の修行法を公開。
- ◎タントラ・イニシエーションの全貌／チベット密教・ゲールク派とオウムの秘儀を比較する。

武田 健さん（東京都／学生）  
「本法の時代は終わった」ということを確実に感じさせる本である。

松岡謙次さん（愛媛県／警備員）  
読めば読むほど、「頑張ろう、やるぞ」と思わせるような素晴らしい本です。

山本 勇さん（石川県／会社員）  
解脱するまでの心の状態が、多くの例を挙げてわかりやすく書いてある。

大森恵子さん（山形県／店員）  
他の書では得られない絶対なる真理に触れることができた。

武田葉子さん（熊本県／主婦）  
「人間として最高の、最終の目的は何か」ということがはっきり示されています。

本間智加子さん（東京都／経理事務）  
宗教に対する偏見がいっぺんに吹き飛んでしまいました。

- ◎確実に核戦争だ！／日本と世界の近未来を予言する。
- ◎総勢三十一名の体験談／クワンダニーが覚醒する」「過去世が甦る」「悟りのプロセス」など、これが修行プロセスと霊的ステージの真実だ。

# マハーヤーナ・スートラ

M A H A Y A N A S U T R A

真理の御魂<sup>みたま</sup> 最聖麻原彰晃尊師著

## 解脱——それは光を超えて

魂は彷徨する、自由を求めて。  
魂は飛翔した、歓喜の世界へ!!



解脱それは、一言では表現することのできない深遠で、広大な世界。今まで、曖昧に定義されていた解脱の段階と状態について、この本はわかりやすく解き明かします。真理の最終地点を目指すあなたにとって、欠くことのできない宝書。

B6判296ページ(巻頭カラー8ページ) 定価3090円

●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。

オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17  
TEL 03(3439) 6043 郵便振替 東京2-109325



MAHA YANA SUTRA

# マハーヤーナ・スートラ PART 2

あの『マハーヤーナ・スートラ』の続編、  
待望の発刊！

私は現代人に欠けているもの、それは絶対的真理の実践、  
四つの預流支の実践だと考えている。

この『マハーヤーナ・スートラ PART 2』は、  
まさにその目的のために編集された経典である。  
オウム真理教は伝統的な仏教、  
ヨーガを根本とした教団である。

特にこの仏教の教えについては、後世に作られた  
仏陀釈迦牟尼の教えでないといわれている大衆経を排し、



みたま  
真理の御魂  
最聖 麻原彰晃尊師著  
定価2100円(税込)

あくまでも仏陀釈迦牟尼の口から出たといわれている  
原始仏教の教えをとっている。

そしてこの教えの実践は、

まさに現代の多くの悩みを解決する妙薬と言わざるを得ない。  
さら、あなたは真の灯明を見た。

この灯明を生かし、

あなたの心に真理の灯明を点火していただきたいと思えます。

麻原彰晃

お経は読むためのものではない。  
読んで、考え、実践するためのものである。

## 〈本書の構成〉

### ◆ 八つの功德

南伝大蔵経『布施品』  
尊師説法  
体験談

### ◆ 四預流支

南伝大蔵経『預流相応』  
尊師説法  
体験談

### ◆ 八正道

南伝大蔵経『道相応』  
尊師説法  
体験談

ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)  
オウム出版 〒154東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(3439)6043 郵便振替 東京2-109325



水戸支部 0292(26)8044  
〒310 茨城県水戸市中央2-2-1 HDビル6F  
船橋支部 0474(66)4965  
〒274 千葉県船橋市新高根6-26-18  
那覇支部 098(869)7707  
〒902 沖縄県那覇市安里2-4-12 嘉数グラビアハイツ5F  
堺支部 0722(21)1843  
〒590 大阪府堺市海山町4-168-9  
高崎支部 0273(46)1573  
〒370-12 群馬県高崎市倉賀野町 下稲荷前1081-5  
福井支部 0776 (26) 6145  
〒910 福井県福井市御幸3-3-41 東伸ビル2F  
松本支部 0263(28)7429  
〒399 長野県松本市芳川野溝527-3  
深谷出張所 0485(74)6205  
〒366 埼玉県深谷市査場441-8  
渋谷出張所 03(3476)5065  
〒150 東京都渋谷区道玄坂1-15-3 プリメーラ道玄坂317号

〈海外支部〉

ニューヨーク支部 212(421)3687  
8 East 48th St. #2E (2nd Floor), New York, N.Y. 10017 U.S.A.  
ボン支部 (0228)616647  
Auf dem Hügel 48, Endenich, 5300 Bonn 1, S.R.Germany  
スリランカ支部  
(AUM SACCA SAṄGHA ASSOCIATION)  
Horahena, Watte, Angulgaha, Galle, Sri Lanka  
モスクワ支部 7-095-455-95-32  
Kindergarten No.468, 32A Petrozavodskaya ul. Moscow, 125475  
Russia

超能力秘密の開発法

ISBN4-87142-071-X C0014 P1260E 定価1260円(本体1223円)